

---

# 俺の決闘

KT

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の決闘

### 【Nコード】

N0438L

### 【作者名】

KT

### 【あらすじ】

姫宮神楽は気がついたら遊戯王GXの世界に来ていた。

原作通りに進めていこうと思います、初めてなのであたたかく見守ってくださいとありがたいです。

三月十四日からだいたい大幅に書き直しています。

## 第一話（前書き）

書き直しました。

感想など書いてくれるとありがたいです。

## 第一話

体が動かない。

目が見えない。

暖かい液体が背中を濡らす。

背中が痛い。

尋常じゃないくらい痛い。

手足の感覚がない。

寒くなってきた。

誰かが俺に触れる。

寝ていたような状態から上半身だけ起こされる。

「ら な!！」

何かが聞こえる。

「ぬな ら!！」

視界が明るくなる。

どつやら目を閉じてたみたいだ。  
ぼやける視界の中に映ったのは、よく知る顔だった。

「……………つ……………う……………」

口から出てくるのは言葉とは言えない音と、鉄臭いなにか。  
俺を抱き起している女はそれを見て驚愕し、さらに声を張り上げる。

「ぬな　　じゃない!!」

口の中の物を吐きだし、声を出す。

「」

意識が薄れる。

何も見えなくなる。

だんだんと耳も聞こえなくなる。

最後にアイツはなんて言ったんだろう？

それを思い出せないまま、俺は

死んだ。

## 第一話（後書き）

変な所があったらご報告ください。

## 第二話（前書き）

変なところがあったら指摘をお願いします。



## 第二話

気がついたら、見覚えのない公園のベンチに座っていた。

「どこだ・・・どこ?」

昨日仕事から帰ってきて疲れていたので仕事着のまま寝たはずだ。それならば目の前にあるのは自分の部屋のはずだ。

しかし、俺の目にうつっているのは建物の奥に見えるバカでかいビルと鬼ごっこをしている小学生と思われる数人の男女である。

「ん?」

建物の奥に見えるビルは、他の建物に比べると明らかに大きかった。よく見てみるとそのビルは見覚えがあった。

「・・・夢か・・・?」

顔に手をやり、目を閉じる。再び目を開けても目の前の光景は変わらなかった。

夢を見ている訳ではない。そう確認してもう一度バカでかいビルを見る。

「・・・なんだよ、これ・・・」

それは、アニメに出てくる海馬コーポレーションというビルにとてもよく似たビルであった。

しばらく放心状態だったが、あるものに気がついた、それは俺の左腕に装着されていた。

「これってデュエルディスクか？」

そう、それはまさしくデュエルディスクと呼ばれるものである。しかもアニメの初期で使われていた奴だ。

「……………いやいや、それはないだろう」

俺は自分が出した答えを否定した。普通に考えてありえないから。

「そつだ、バツク……………」

自分が出した答えをさらに否定すべく、そばにあった俺の持っていたバツクに似たバツクを調べることにした。

「うそだろ……………」

無意識にそんな声がでた。

なぜならバツクの中身は俺が出した答えを確信させるには、十分だったからだ。

バツクの中には、「デュエルアカデミア受験者案内」と書かれてい

る紙があった。

俺の出した答えは大方あたっていた。どうやら俺は遊戯王の世界に  
来ているらしい。まあ、来てしまったものはしょうがないと思い、  
さらにバックやら身に着けていたものを調べた。

バックの中には受験に必要なと思われるものなどがはいつていた。  
まず、今日は実技の試験らしい、筆記試験は案内を見るがぎりもつ  
済んでいるらしい。あとは、財布や携帯といった日常品があった。  
そして探していくうちに、

「おお、俺なんか若返ってる」

俺の本当の歳は20と2、3ヶ月くらいで、高卒で仕事をして現在  
の仕事に慣れてきた頃だった。

「16か、ずいぶんとまあ若返ったな」

さらにバックの中身を見ていく。

バックの中を探していると長方形のケースが出てきた。

「これデッキか。……まあ、このデッキが一番気に入ってる  
からいいか」

あったデッキは俺がよく好んで使っていたものである。

これはうれしいのだが、一つ問題があった。

シンクロ召喚

ここは、たぶんだがGXの世界だ、GXなのに5D、Sのカードを使っているのだろうか？

「まあ、知ったこっちゃねえか。とりあえずさっさと会場に行くか」  
細かいことは、気にしないようにしよう。

「あつと、受験票……」

バックを探したがバックの中にはなく、ポケットなどを探したら受験票は胸ポケットから出てきた。

そして受験票には111番と書かれていた。  
どうやらこの世界の俺はあまり頭が良くないようだ。確か十代より下だ……。

とりあえず落ち込んでいる暇はない。時間を確認したところ、まだ時間はあった。

「……いきますか」

とりあえず俺は海馬コーポレーションを目指した。

「まだ来ていない者はいるか？」

受付にいた男は同じく受付の女性にたずねた。

「まだ来ていない受験者あとは111番だけです」

「そうか」

そう言い腕時間を確認する。

「なら、あと少し待ってみよう」

受付の女性は「はい」と答える、その時。

「ちょっとまってくれえー！ー！ー！」

ヤバイヤバイ！

道に迷っちゃまった！目印がでかいからって甘く見ていた。とりあえず目的地に向かって走り続ける。すると、目的地の玄関らしき場所とその前に設置された受付らしきものを発見する。

「ちょっとまってくれえー！ー！ー！」

俺の声にびっくりしたのか受付の人たちがビクッ！と動いた。そのまま勢いを落さずに受付まで走る。たどりついた所で息を整える事もせずに口を開く。

「はあっ、はあっ、じゅっ、受験、番号111番、姫宮神楽ひめみや かぐらです！  
まだ大丈夫ですか!？」

俺は息を整えながらきいた。

「あ、ああギリギリだが大丈夫だろう。早く行ったほうがいい」

「どうも！」

息を整えながら会場につくと、ちょうど十代がクロノスにとどめを刺していた。

「喰らえ、スカイスクレイパーシュート!!」

「ペペロンチ〜ノ〜!!」

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ先生！」

十代が決めポーズした。そして会場からは「クロノス先生が負けた

だと・・・」「ありえねえ」「いいぞー1110番!」なんていう声があがった。

しばらく突っ立ると、席に座ってた奴に話しかけられた。

「キミも、遅れてきたのか？」

離しかけてきたのは三沢大地だった。声も姿もアニメで登場する三沢大地と一致した。少し緊張したが話を合わせる。

「ああ、道に迷ってな。それとあいつ強いな」

「見ていたのか？」

三沢の質問に「ああ、少しだけな」と答える。

「あいつとは、良きライバルになりそうだな」

そうしている内に十代が帰ってくる。良い機会なので話しかけるのも良いだろうと思い、話しかけてみる。

「いいデュエルだったな」

「ああ、楽しいデュエルだったぜ!とところで初めて見るけど、アンタはもうデュエルしたのか？」

「いや、まだだ・・・」

「えっ、大丈夫なんスか？」

「まあ……大丈夫だろ」

などと十代達と話していると、会場のアナウンスがなる。

『受験番号1111番の生徒は、第三デュエル場に来てください』

「おっ、俺の番か」

「がんばれよー！」

「がんばるっスよ！」

と応援されたので、手を振って返す。

デュエル場に着くと俺の相手の先生が自己紹介してくるので、できるだけ礼儀正しく返す。

「受験番号1111番、姫宮神楽ですよろしくお願いします」

「じゃあ、さっそく試験を始める！いくぞー！」

「ちよと待つノ〜ネ！」

なんかクロノス待ったをかけた、嫌な予感がする……。

「このデュエル私が担当する〜ノデス！」

おいおい何言ってるんだ、ふざけんなよ！

担当の先生も「し、しかし」と、言っている。

「問答無用！私がデュエルします〜ス！」



「わ、わかりました……」

わかってんじゃないやねーよ、マジかよ……。トラップとか無意味になるじゃん。

「あなたも遅刻してきたのデスから文句は言えないノ〜ネ！」

うつ、言い返せない……。会場からは「終わったな」なんていう声も聞こえてくる。

「それでは始めるノ〜ネ」

気合十分つてな顔でデュエルを始めようとするクロノスを見て、聞こえないようにため息を吐く。

「はあ、マジかよ」

「デュ「デュエル!!」……」

クロノスVS神楽

「先行はアナタに譲るノ〜ネ」

「じゃあ、遠慮なく。ドロ〜！」

微妙な手札だ、特にする事もない。

「俺は、えつとこうか・・・モンスターをセット、カードを二枚セ  
ットしターンエンド」

LP4000

モンスター/裏守備一体。

魔法・罫/二枚

手札/三枚

「私のターンドロ！私はトロイホースを召喚！」

トロイホース

星4/地属性/獣族/攻1600/守1200

地属性モンスターを生け贄召喚する場合、

このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

「そして、マジックカード<sup>デュアルサモン</sup>二重召喚発動！」

<sup>デュアルサモン</sup>  
二重召喚

通常魔法

このターン自分は通常召喚を2回まで行う事ができる。

「トロイホースを生贄に、古代の機械巨人<sup>アンティーク・ギアゴレム</sup>を召喚！」

「いきなり来たかつ」

トロイホースの真下に光の円ができロイホースが足から沈んでいく。完全に沈みきった瞬間その光の円からアンティーク・ギアゴーレムが突風と共に現れる。

「トロイホースは地属性モンスターを生け贄召喚する場合、1体で2体分の生け贄とする事ができるノ〜ネ」

「トロイホースの効果くらい知ってる！」

「ほう、そうデ〜スカ。アンティーク・ギアゴーレムの攻撃、アルティメットパウンド！」

ゴーレムの手が迫ってくる。ソリットヴィジョンリアルすぎないか！？

「ぐっ！」

ソリットヴィジョンの衝撃は思ったよりも強く、両腕で顔を庇う。

「アンティーク・ギアゴーレムの効果で、貫通ダメージをあたるノ〜ネ」

俺のモンスターはボルト・ヘッジホッグ・・・2200も受けちまった。

LP1800

「カードを二枚セットしターンエンド！アナタのターンデース」

LP4000

モンスター／古代の機械巨人

魔法・罠／二枚

手札／一枚

「俺のターンドロー！」

引いたカードを手札に加えながら手札を見る。これならいけるかな。

「俺はマツシブ・ウォリアーを召喚！そしてワンショット・ブースターを特殊召喚！」

マツシブ・ウォリアー

効果モンスター

星2／地属性／戦士族／攻 600／守1200

このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

ワンショット・ブースター

効果モンスター

星1／地属性／機械族／攻 0／守 0

自分がモンスターの召喚に成功したターン、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

このカードをリリースする事で、このターン自分のモンスターと戦

闘を行つた  
相手モンスター1体を破壊する。

「そんな、ザコモンスターを並べたところで私には勝てないノ〜ネ」

「……マジックカード大嵐！フィールドの魔法・罠カードをすべて破壊する！」

発動と同時にフィールドに竜巻が起こる、ほんとリアルだなー。つてクロノスの野郎ミラフォ伏せてやがった。

「ぐぐつ！だけど、アナタのカードも巻き込まれているノ〜ネ」

「これでいいんですよ、俺は今破壊したリミッター・ブレイクの効果発動！デッキからスピード・ウォリアーを特殊召喚する！」

リミッター・ブレイク

通常罠

このカードが墓地へ送られた時、

自分の手札・デッキ・墓地から「スピード・ウォリアー」1体を特殊召喚する。

「だけど、そんなザコモンスターなんて怖くないノ〜ネ」

むっ、やっぱりザコザコ言われるのはむかつくな。

「なら……そんなザコモンスターにやられるあんたのモンスター」

はもっとザコってことだな！」

「な、なんでス〜ト！」

クロノスの顔に驚愕の色が浮かぶ。

そして会場の生徒全員がざわついた。まあ、俺のモンスターの効果しらなかつたら普通だな。

「マツシブ・ウォリアーでアンテイク・ギアゴーレムに攻撃！」

攻撃した瞬間、デュエルを見ていた生徒が「ヤケになったか」「やつぱ馬鹿だな」とか言って笑っていた。

確かに効果を知らなかつたら唯の自滅にしか見えない。

「わざわざ倒されに来るな〜テ、よっぽどおバカさんなノ〜ネ」

何度も思うがむっかつくなこいつら。

「マツシブ・ウォリアーは戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない！」

マツシブ・ウォリアーがアンテイク・ギアゴーレムに殴られるが、持っていたヘリポートっぽいのを盾にして防いぐ。

「そんな意味のない攻撃をしてどうするのデ〜スカ？」

「意味ならありますよ。メインステップ2に移行しワンショット・ブースターの効果発動！このカードをリリース・・・もとい生け贄にする事で、このターン自分のモンスターと戦闘を行った相手モンスター1体を破壊する！」

「なんでスト！」

カードを取り墓地に送る。

するとマツシブ・ウォリアーがワンシヨット・ブースターの腕っばい部分に乗りアンテイク・ギアゴーレムに突っ込んで爆発した。

「我がアンテイク・ギアゴーレムガ〜!?!」

目の前でエースモンスターが破壊されるのを見てクロノスが嘆く。それを見た会場の生徒達は静まり返っている、いい気味だ。

「俺はカードをセットしてターンエンド。どうした先生このままだと俺が勝つぜ」

俺の勝利宣言に会場はさらに騒ぎ出し、クロノスは怒ったようだ。

「ぬぐぐぐ……」

LP1800

モンスターノスピード・ウォリアー、マツシブ・ウォリアー。

魔法・罫ノ1

手札ノ0

「私のターンドロ―！私は強欲な壺発動！カードを二枚ドロ―！」

クロノスはドロ―したカードをみて不敵に笑う。

「世界の広さを私が教えて上げルノです！！マジックカード発動！洗脳・ブレインコントロール！ライフを800ポイント支払うことで、マツシブ・ウォリアーのコントロールを得るノーネ！」

LP3200

マツシブ・ウォリアーがクロノス方に行く。

「そしてフィールド魔法、ギア・タウン歯車街を発動！」

フィールドが歯車でできた街になる、何をする気だ？

ギア・タウン  
歯車街

フィールド魔法

「アンティーク・ギア」と名のついたモンスターを召喚する場合には必要なリリースを1体少なくする事ができる。

このカードが破壊され墓地に送られた時、自分の手札・デッキ・墓地から

「アンティーク・ギア」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

「そしてマジックカードアンティーク・ギアガレージ古代の整備場発動！」

アンティーク・ギアガレージ  
古代の整備場

通常魔法

自分の墓地に存在する「アンティーク・ギア」と名のついたモンスター1体を手札に戻す。



「この効果で墓地に存在する古代の機械巨人を手札に加えるノ〜ネ。そしてマツシブ・ウォリアーを生贄に、再びアンテイク・ギアゴレムを召喚するノ〜ネ！」

「マジかよ!？」

トロイホースと同じようにマツシブ・ウォリアーが消え、アンテイク・ギアゴレムが姿を現す。

「この攻撃が通れば私の勝ちナノ〜ネ！」

確かに通れば俺は負ける、だが！

「させるかよ！リバースカードオープン、威嚇する咆哮を発動！これで先生はこのターン攻撃できない！」

威嚇いかくする咆哮ほうごう

通常罠

このターン相手は攻撃宣言をする事ができない。

「ぐっ、ターンエンドなノ〜ネ・・・」

LP3200

モンスター / 古代の機械巨人。

魔法・罠 / 歯車街

手札 / 0

なんとか防いだな。さてどうするかな、手札はなし場にはスピード・ウォリアーだけ、はつきり言ってこのドローにすべてがかかっている。

そう、文字どおりすべてである。負ければ絶対落ちる……筆記が最悪だからな。

だとしたら浪人か？この年で？まあ、落ちたら仕事探せば……高校の受験ってことは、中学三年生くらいだよな？中学三年生くらいで雇ってくれるところなんてこの町にあるのだろうか？

運よく仕事があっても、衣食住はどうする？財布はあったが五千くらいしかなかった。

……本格的にヤバいんじゃないか？これ？

「お、俺のターンドロー！……強欲な壺発動！二枚ドロー！」

この引きに全部掛かっている。

デッキに指を乗せ、深呼吸をする。

「頼むぜ……ドロー！」

そして勢い良く引く、すぐに引いたカードを確認する。

「……よし！まだまだ行くぜクロノス……先生！！天使の施しを発動！三枚ドローし、二枚捨てる」

これが奇跡なのだとしたら俺は運がいい、手札を捨てながら俺はそう思った。

「これでそろった！俺は、チューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚！そして天使の施し捨てたニトロ・シンクロンを、ジ

ヤンク・シンクロンの効果で特殊召喚！」

フィールドに出てきたジャンク・シンクロンが腕を振るう、振るった先にニトロ・シンクロンが姿を現す。

「チ、チューナー？」

「そして墓地のボルト・ヘッジホッグの効果発動！俺の場にチューナーが表側表示で存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚する事ができる！」

ここまで一気にやったから翔あたりが訳がわかりませんみたいな顔してる。

「そしてレベル2ボルト・ヘッジホッグにレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！」

「チューニング？」と俺以外の人の頭の上に？が浮かぶがかわわず進める。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！シンクロ召喚！出でよ、ジャンク・ウォリアー！」

ジャンク・ウォリアー

シンクロ・効果モンスター

星5/闇属性/戦士族/攻2300/守1300

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在する

レベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

シンクロ召喚に驚く奴もいるが「すげー、かつこいい！」と十代は叫んでいた。

「そ、それでもアンティーク・ギアゴーレムには、およばないよね！」

「ジャンク・ウォリアーがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする！よってスピード・ウォリアーの攻撃力分、攻撃力アップ！」

ATK2300 3200

「これでジャンク・ウォリアーの攻撃力上回ったっす！」

「まだだ！レベル2のスピード・ウォリアーにレベル2の二トロ・シンクロンをチューニング！こい！アームズ・エイド！」

アームズ・エイド

シンクロ・効果モンスター

星4/光属性/機械族/攻1800/守1200

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとしてモンスターに装備、

または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、

装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。  
装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「そしてジャンク・ウォリアーにアームズ・エイドを装備！」

ジャンク・ウォリアーの右腕にアームズ・エイドが合体した。

「ジャンク・ウォリアーの攻撃力はさらに1000ポイントアップ！」

「なんでスツテ〜!？」

ATK3200 4200

「ジャンク・ウォリアーでアンティーク・ギアゴーレムに攻撃！パワーギア・フィスト!!!」

アームズ・エイドが合体したジャンク・ウォリアーの右腕がアンティーク・ギアゴーレムを貫いた。

「ぐぐぐっ・・・!!でも、ライフは残ってるノ〜ネ!!!」

「言い忘れてたけどアームズ・エイドを装備したモンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与えるって効果がある。よって3000ポイントのダメージだ」

「ホワッツ!?」

ドガシャアアンー!と言う轟音をたてて、崩れかかっていたアンテ  
イーク・ギアゴーレムがクロノスを下敷きにした。

「楽しかったですよ、ありがとうございました!」

そして、俺はクロノスに勝利を収めた。

「融合使用に、シンクロ使用。おもしろい人たちが入ってきたわね、  
あとで亮にも言わないと」

と他の場所では、

「フフッ、神楽・・・やっぱり面白い奴だ・・・」

そして、今日という日が終わった。

## 第二話（後書き）

これを読んでくれた人たちに感謝いたします。  
次は入学式を書く予定です。

## 第三話

試験の結果はその日に渡るらしい。

デュエルには勝ったが筆記が十代以下というところだったから気が  
気でいらなかった。なぜならこれで浪人になるかホームレスにな  
るかが決まるからである……。

そんな俺の願いが通じたのか、結果は見事に合格だった。

結果を聞いて歓喜する者もいれば、肩を落して落ち込んでいる者も  
いる。翔は大泣きしながら喜んでいる。

そして、かなり急だがアカデミアに行くのは明日らしい。

だがここに拠点がない俺にとっては結構ありがたい事であった。

説明が終わった後はそれぞれが帰路に着く。とりあえず俺もそれに  
合わせて歩き出す。……今日はあの公園で野宿するでしょう。



確かアニメだとヘリでアカデミアまで行ったと思うが、さすがに少なくなっただとはいえ少なくとも100以上の人間を運べる訳もなく、フェリーで移動することになった。

「気持ち、悪い・・・」

船に乗って数分も経たずに俺は船酔いしてしまう。

「大丈夫か？」

「酔い止めあるっすよ」

そんな俺をきずかったのか十代達は、酔い止めなどをくれた。

「すまん・・・」

フェリーを降りたら酔いもさめ、校長のありがた迷惑な長ったらしいあいさつ聞いていた。

三沢や翔あたりのまじめ君達はちゃんと聞いている。

十代はウトウト程度だが、俺は熟睡していた。

「  
楽しく勉強してください。では解散」

ん、何だ寝ていたら終わってしまった。  
そろそろと生徒たちが自分の寮に向かう。ちなみに俺はオシリス・  
レッドになったようだ。

「俺はオシリス・レッドか……」

「あつ僕もだ」

「俺もだぜ！」

「なんだみんな一緒なのか」

三人で話していると三沢がやってきた。三沢の姿をとらえた十代は  
三沢に話しかける。

「やあ二番お前もレッドか？」

「いや、僕は制服でわかるだろ。ラー・イエローだ」

「制服ってそんな意味があつたのか？」

「知らなかったのか？」

俺の質問に十代と翔は声をそろえて知らないと答えた。

「どうして君たちがレッドなのか、不思議だよ」

「実技はよかったが、筆記がだめだったんだろう」

もしくはクロノスがなんか裏でやっていたんだろう。

「そうか、なら落ち込まずに頑張るんだな。それと姫宮、シンクロ召喚について少し教えてくれないか？いくら探してもデータが見つからないんだ」

その問いは少し考えてしまう。

どうしよう……別に教えてもいいが……大丈夫なんだろうか？

腕を組んで考える。そして考えた結果を三沢に伝える。

「……企業秘密だ、そうそうと手の内を明かしたくないんでね」

「そうか、なら自力で調べるよ。では失敬するぞ」

そう言っただけで歩き出す三沢。

「落ち込まずに頑張れよ〜！」

「俺たちの場合それは掛けるんじゃないで、掛けられる言葉だと思っただけな……」

「え？どうゆうこと、神楽くん？」

「その内分かるだろ……よし、俺らも行くとするか」

そう言い、三沢とは違う方向に進む。

三沢と違う方向に体を向けた所で翔に声を掛けられる。

「えっ、あっちじゃないんすか？」

と三沢が言った方向をさす。俺は翔に首だけ振り返る。

「ちげーよ、俺たちはこっちだ」

と言い俺は歩き出す。

「な、なんスカ〜これ……………」

自分たちの寮に着いた途端、翔がガツカリしたような声をだす。

まあ、言いたいことは分かる……………。実際見てみるとすごいボロい。

「なんかオシリス・レッドだけボロくない？」

「そうか？眺めもいいし、風情があると思っぜ」

「俺は、住めればいいからな」

二階に上がる階段は上るたびにギシギシと音をだし、床はギィギィと音がする。

「……………やっぱりボロくない？」

「……………そうだな」

レッド寮は見た目以上にボロかった。  
そんな事を話しながら指定された自分の部屋の前まで行く。

「ここが俺の部屋か」

俺が立ち止まった左隣で十代達も立ち止まる。

「俺達はこっちだな。あ、そうだ神楽」

「ん、なんだ？」

ドアノブを掴んで扉を開けようとしたところを十代に呼びとめられる。

十代の方を見ると、十代はやる気に満ちた顔だ。

「俺とデュエルしようぜ！」

「別にいいが部屋の整理をしたい。それが終わってからじゃダメか？」

十代は一度不満そうな顔をしたが、すぐにその表情を一変させる。

「えー・・・まあいいや、じゃあ掃除が終わったらデュエルしようぜ！」

「わかった、またあとでな」

「ああ、待ってるぜ！」

「ふーん。一人暮らしには十分すぎる部屋だな」

当たり前だ、元々複数人が住む部屋だからな。どうやら俺以外に同居人は居ない。他人が居ても気まずいだけだから丁度いい。少ない荷物を置き、部屋を見渡す。

「ベッドに水道、電気もあるしガスコンロもある……。中々良い部屋だな」

ボロい事を除けばだがな……。

### 第三話（後書き）

あと、少しで新キャラを出すと思います。

感想など書いてくれたら励みになります！

## 第四話（前書き）

十代とのデュエルです、間違いがあったらご報告お願いします。



## 第四話

俺は十代とデュエルするためには多少荷物をかたづけただ後にデッキの調整をしていた。

調整をする中でいくつか問題点が出てきた。

一つ目にカードが少ない。まあ、この辺は調整に必要なカードしかなかったのであまり問題にはならなかった。

二つ目の問題は禁止カードとかだ。こつちじゃ禁止じゃない死者蘇生や強欲な壺はいいとして、他のカードをどうするかという問題だ。しかし、禁止カードを使っても大して面白くないんじゃないか？と思ひ、その辺の禁止とか制限とかは知ってる範囲でそれに倣うことにした。

そんなこんなで、デッキ調整が終わり、部屋を出て十代の部屋に行く。

コンコン、とノックをするとすぐに十代が出てきた。

十代の左腕にはすでにデュエルディスクが装着されている。

「おっ！待ちくたびれたぜ、じゃあさっそくデュエルしようぜ！」

「ああ。場所はそこでいいよな?」

寮の目の前にある小さなグラウンドを指さす。

「いいぜ!」

そうしてお互いにレッド寮の前にあるグラウンドに白線で引かれたデュエルリング(たぶん)に立つ。

「さあ、楽しいデュエルにしようぜ!」

十代がディスクを展開しながら言った。

「ああ!」

「デュエル!」

「先行は貰うぜ、ドロ!俺はE・HEROクレイマンを守備表示で召喚!カードを一枚伏せターンエンドだぜ!」

LP4000

モンスター/クレイマン

魔法・罫/一枚

手札／四枚

「俺のターンドロ―！」

クレイマンか、なんか残しておくとか次のターンに融合とかきそうだな。

「俺はマックス・ウォーリアーを召喚！そしてクレイマンに攻撃！」

マックス・ウォーリアー

効果モンスター

星4／風属性／戦士族／攻1800／守 800

このカードは相手モンスターに攻撃する場合、

ダメージステップの間攻撃力が400ポイントアップする。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、

次の自分のスタンバイフェイズ時までこのカードのレベルは2になり、

元々の攻撃力・守備力は半分になる。

俺がそう言ったのと同時にマックス・ウォーリアーが槍を正面に構え、クレイマンに突っ込んでいく。  
それを見た十代が声を上げる。

「クレイマンの守備力の方が上なのにな？」

「マックス・ウォーリアーが相手モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が400ポイントアップする！」

マックス・ウォーリアーがクレイマンを槍を連続で突き破壊した。

「ぐっ!?!この瞬間トラップ発動、ヒーローシグナル!この効果でデッキからE・HEROスパークマンを特殊召喚する!」

### ヒーローシグナル

通常罫

自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。

自分の手札またはデッキから「E・HERO」という名のついたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

「マックス・ウォーリアーが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、次の自分のスタンバイフェイズ時までこのカードのレベルは2になり、元々の攻撃力・守備力は半分になる。カードを二枚伏せ、ターンエンド。結局モンスターが残ったか……」

LP4000

モンスター/マックス・ウォーリアー

魔法・罫/二枚

手札/三枚

「俺のターン、ドロー!俺はE・HEROフェザーマンを召喚!そしてマジックカード、R-ライトジャスティス発動!」

アイル

R-ライトジャスティス

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO」と名のついた

カードの枚数分だけ、フィールド上の魔法・罠カードを破壊する。

「このカードはフィールド上に表側表示で存在する「E・HERO」と名のついたカードの枚数分だけ、フィールド上の魔法・罠カードを破壊する！フィールドのE・HERO二体！よって神楽の二枚のリバースカードを破壊する！！」

「R・ライトジャスティスにチェインしてスキル・サクセサーを発動！マックス・ウォーリアーの攻撃力を400ポイントアップする！！」

#### スキル・サクセサー

通常罠

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

このターンのエンドフェイズ時まで、

選択したモンスターの攻撃力は400ポイントアップする。

また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の

攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで800ポイントアップする。

この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動する事ができず、

自分のターンのみ発動する事ができる。

マックス・ウォーリアー ATK900 1300

「スパークマンでマックス・ウォーリアーに攻撃！スパークフラッシュュー！」

「ぐっ！」

LP4000 3700

「フェザーマンでダイレクトアタック！フェザー・ブレイク！」

「いつつう！？」

LP3700 2700

ソリットビジョンとはいえ、正面から殴られると痛いものである。ちよつと恨みを込めた視線を送るとフェザーマンがたじろいだように見えた、気のせいかな？

「そして手札からマジックカード融合発動！手札のとバブルマンと場のフェザーマンとスパークマンを融合！E・HEROテンペスターを融合召喚！」

「なかなか厄介なモンスターを出してきたな」

「へへっ、これでターンエンドだ！」

LP4000

モンスター／テンペスター

魔法・罫／0枚

手札／一枚

くそっ、クズ鉄破壊されたから守れなかった。さすが十代と言っべきなのだろうか？

「俺のターンドロー！」

攻めたいがどうにも手札悪い。

「手札抹殺を発動。お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドロウする。俺は三枚捨て、三枚ドロウする」

「俺は一枚ドロー！」

「よし、反撃といくぜ十代！死者転生を発動！手札のニトロ・シンクロンを捨て、マックス・ウォーリアーを手札に加える。そしてジヤンク・シンクロンを召喚！効果で墓地のニトロ・シンクロンを特殊召喚！」

さらに墓地のボルト・ヘッジホッグは自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚する事ができる！」

ボルト・ヘッジホッグ

## 効果モンスター

星2 / 地属性 / 機械族 / 攻 800 / 守 800

自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚したこのカードはフィールド上から離れた場合、ゲームから除外される。

## ニトロ・シンクロン

チューナー（効果モンスター）

星2 / 炎属性 / 機械族 / 攻 300 / 守 100

このカードが「ニトロ」と名のついたシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

## ジャンク・シンクロン

チューナー（効果モンスター）

星3 / 闇属性 / 戦士族 / 攻1300 / 守 500

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

俺のフィールドに現れたモンスターを見て、十代の顔が綻ぶ。

「来たな！チューナーモンスター！！」

「そして、レベル2ボルト・ヘッジホッグにレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！」



ジャンク・シンクロンが三つの輪になりボルト・ヘッジホッグがその中を通る。

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！シンクロ召喚！出でよ、ジャンク・ウォリアー！」

そういえばこのセリフ言うのメチャクチャ恥ずかしいんだけど・・・。  
そんな俺の心情を知らない十代は、興奮したように言った。

「ジャンク・ウォリアーの攻撃力は、俺のフィールドのレベル2以下のモンスターの攻撃力分アップする！」

ATK 2300    2600

「出たな、クロノス先生を倒したモンスター！でも、テンペスターには届かないぜ！」

「ああ、そうだな。だから俺はさらに上に行く！レベル5ジャンク・ウォリアーにレベル2ニトロ・シンクロンをチューニング！」

「何!？」

ニトロ・シンクロンが二つの輪になり、その中をジャンク・ウォリアーが通る。

「集いし思いがここに新たな力となる。光差す道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれ、ニトロ・ウォリアー！」

ニトロ・ウォリアー

シンクロ・効果モンスター

星7 / 炎属性 / 戦士族 / 攻2800 / 守1800

「ニトロ・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上

自分のターンに自分が魔法カードを発動した場合、そのターンのダメージ計算時のみ

1度だけこのカードの攻撃力は1000ポイントアップする。

このカードの攻撃によって相手モンスターを破壊した場合、

相手フィールド上に表側守備表示で存在するモンスター1体を攻撃表示にして

そのモンスターを続けて攻撃する事ができる。

「攻撃力が並んだ!？」

「まだまだ!!そして墓地のスキル・サクセサーの効果発動!墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで800ポイントアップする!」

ニトロ・ウォリアー ATK2800 3600

「攻撃力がテンペスターを上回った!？」

「そして、ニトロ・シンクロンの効果で一枚ドロ―!二重召喚を発動、スピード・ウォリアーを召喚。ニトロ・ウォリアー!テンペスターに攻撃!ダイナマイト・ナックル!!」

ニトロ・ウォリアーがテンペスターに殴りかかった。テンペスター

は両手でガードする。

「そしてニトロ・ウォリアーは自分のターンに自分が魔法カードを発動した場合、そのターンのダメージ計算時のみ1度だけこのカードの攻撃力は1000ポイントアップさせる!!」

ニトロ・ウォリアーの体が青いオーラに包まれる、そしてガードされた腕を無理矢理押し込み、テンペスターを地面に叩きつける。

「ぐあっ!!」

LP4000 2400

「スピード・ウォリアーは召喚に成功したターンのバトルフェイズ時、このカードの元々の攻撃力はバトルフェイズ終了時まで倍になる!スピード・ウォリアーで攻撃!!」

スピード・ウォリアーが十代に蹴りかかる。

「うわっ!?!」

十代が衝撃で尻もちをつく。

LP2400 600

「ターンエンドだ」

LP2700

モンスター/スピード・ウォリアー、ニトロ・ウォリアー

魔法・罾/0枚

手札/0枚

「やるな神楽！わくわくしてきたぜ！俺のターン、ドロー！」

さて状況は俺のが有利だ・・・だけど安心はできないなにせ相手は十代なのだから。

「俺はマジックカード強欲な壺を発動！デッキからカードを二枚ドロ！さらに俺は融合回収フュージョン・リカバリーを発動、その効果で墓地のフェザーマンと融合を手札に加え、融合を発動！手札のフェザーマンとバーストレディを融合！現れるE・HEROフレイム・ウイングマン！」

「だがニトロ・ウォリアーにはまだ及ばない！スピード・ウォリアーを攻撃してもライフは残るし次のターンにニトロ・ウォリアーで攻撃して終わりだ！」

「慌てんなよ、ヒーローにはヒーローの戦う舞台つてもんがあるんだ！フィールド魔法スカイスクレイパー発動！」

下からたたくさんのビルが出て来きてあたりが暗くなる。そして十代の後ろに建つビルの天辺にフレイム・ウイングマンが腕組して立っている。

摩天楼まてんろう - スカイスクレイパー

フィールド魔法

「E・HERO」と名のつくモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントアップする。

「スカイスクレイパーがある時、「E・HERO」と名のつくモンスターが攻撃する場合、ヒーローの攻撃力が相手モンスターの攻撃力よりも低い場合、ヒーローの攻撃力をダメージ計算時のみ1000ポイントアップする！」

フレイム・ウイングマンが体を前に倒し、炎を纏いながら急降下してくる。

「いけ！フレイム・ウイングマン！ニトロ・ウォーリアーに攻撃！スカイスクレイパー・シュート！」

フレイム・ウイングマンが炎を纏わせた右手をニトロ・ウォーリアーに叩きつける。その攻撃でニトロ・ウォーリアーが破壊され爆風が俺を襲う。

「ぐっぐっ！？」

「そして破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！」

フレイム・ウイングマンが右手をこっちに向けてきた。そしてその右手から炎が俺の至近距離で放たれる。

「熱っ！？」

実際そんな熱くはないが突然のことで声がでて、尻もちを着いた。

LP27000

「ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ、神楽！！」

そう言つて、尻もちを吐いたままだった俺に手を差し伸べてくる。その手を取つて立ち上がる。

「そうかい、俺も負けたが楽しかった」

負けたし短いデュエルだったが、満足できた。べつに満足は狙ったのではなく本心だ。

「アニキの勝ちだ！！」

「いいデュエルだったな」

そう言いながら翔と三沢がこっちに近づいてくる。

「シンクロ召喚、本当に興味深い」

「ほんとっスよね、見たことないっすあんな召喚方法」

「だろっな俺以外は使えないと思うぞ」

シンクロモンスターはおるかチューナーも俺以外持ってないだろう

からな。

「そういえば、なんで神楽はそんなスゲーモンスター持ってるんだ？」

十代が思い出したように質問してくる。

「まあ、企業秘密だ」

この後三人にいろいろ質問攻めをされたが適当にはぐらかした。そうして適当な理由を付けてさっさと部屋に戻る。部屋の中に入って、とりあえずベットに横になる。

「ふう、とりあえずは、高校生活を満喫するしかないのかな・・・」  
これから色々あるんだよなー、幻魔とか光の結社とか。  
巻き込まれなければ良いか・・・。

「・・・眠い・・・」

急に襲ってきた睡魔に身を任せ、俺は眠った。

## 第五話（前書き）

変なところがあったらご指摘ください。



## 第五話

ある部屋薄暗い部屋の中、床に胡座をかいた一人の少女が居た。

髪はボサボサで床まで届くくらいの長く、邪魔にならないように後ろで束ねられている。

その少女の目の前にはモニターがあり、そのモニターにはある男のプロフィールが映し出されていた。

少女はそれを睨みつけるように見ていた。

「……………なんでコイツだけ」

そう呟き、モニターを見ながら小さく唸っていると、少女の後ろにあるドアが開く。

ドアを開けて入ってきたのは男だった。長身で髪は短く切りそろえられてある。そしてその男は両手で籠を抱えている。籠の中には女の服が綺麗に畳んで入ってあった。

男は部屋の様子を見たとたんに溜息を吐く。

「……………はあ、シルビィ？目が悪くなるから、明るくしなきゃダメって、いつも言ってるじゃないか……………」

「うっせ。ノックくらいしろ」

シルビィと呼ばれた少女は振り向きもせずモニターを睨んだまま答える。

「ゴメンゴメン。この通り手が塞がっていてね」

男は籠を少し持ち上げる。しかし少女はこちらを見ていないのでその仕草は伝わらない。

男はため息を吐きながら部屋に入ってくる。

「はぁ・・・着替え、ここに置いておくよ?」

男は籠を置くと少女に近づき、少女が見ているモニターを後ろから覗き込むように見る。

モニターに映し出されているものを見ると、男は少女に声を掛けた。

「あれ?この仕事はもう終わってたんじゃないのかい?」

「そう思ってたんだけど、どうやら残ってたみたいね・・・。らしくないミスだわ・・・」

そう言うと、少女は立ち上がりドアの方に歩く。

「・・・シルビィ、少しくらい休んでからでもいいんじゃないか?」

少女は立ち止まり男の方に振り返る。

「・・・もたもたしてらんないのよ」

そう一言って部屋を出る。

男はヤレヤレという表情で小さなため息を吐き、少女の後を追うために立ち上がる。ドアノブを握った所でもう一度モニターを見る。

「ヒメミヤ、カグラ。・・・か」

そう呟いて、ドアを閉める。

「……………んあ？あ、れ……………何時の間に寝たんだ、俺……………」

ベットから起き上がり、体を伸ばす。ポキポキと体中の骨を鳴らし、鳴らなくなった所で伸ばすのを止め、何もせずにただボーっとする。

「……………起きてもやることねえな」

これから何をするか？そう悩んでいると、部屋のドアがノックされる。

ノロノロとドアまで行ってドアを開ける。ドアの向こうにはと十代と翔がいた。

「お前等か……………どうかしたのか？」

「ああ、これから学校の中を見に行こうって思ったんだが、神楽も来ないか？」

「一緒に行くっすよー!!」

「おお、丁度いいな。何もする事が無かったんだ。ちょっと待って

てくれ」

そう返事を返すと、一旦ドアを閉めて財布などを取り、部屋を出る。部屋を出て三人で歩く。校舎の目の前までは他愛もない話をしていたが、校舎内に入って色々見まわっていると突然、翔がため息を吐いた。

「はぁ……」

「なんだ翔、まだ落ち込んでんのか？」

「なにかあったのか？」

「実はさ……」

翔の話を聞くと、同じ同居人である隼人にオシリスレッドがどうしようもない落ちこぼれ集団だと言われ、落ち込んでいたらしい。

「そんなことがあったのか」

「そんなことって、何も思わないんスか？」

「気にしてもしょうがないだろ」

「そうだぜ翔。それに俺は赤が大好きだぜ！」

「ネガティブ過ぎなんだよ。そんなこと思ってるから、そうゆう偏見を持たれるんだ」

「そうゆうもんスか？」

「そうゆうもんだ」

そんなことを言いながら歩いていると十代が急に走り出した。

「どうした十代っ?」

「どっかでデュエルしている奴がいる!!」

「そんな音何にも言えないっスよー!」

そう言いながら俺と翔は学校に走っていく十代を追いかける。

。そもそもデュエルにそんな匂いあるのか？音ならまだ分かるが・・・

「こつちだ！」

十代がデュエル場みたいな所に入って行った。

「うおー！すげー！」

「うわー、これって最新設備のデュエルフィールドだよ！すごい！」

俺と翔も後に続き、その場所へ入る。入った途端に十代と翔が声を上げる。

そこは大型の体育館のようで、真ん中にデュエルをすろと思わしき円形のステージがある。

「おお、広いな」

「こんなところでデュエルしてみたいな」

「じゃあさっそくやろっぜ！」

十代が笑顔でそう翔に言う。

「えっ、いいのかなー？」

「別にいいだろ、学校の設備なんだから生徒が使っても」

「そういつ訳にはいかないんだな、これが」

「ここは、オシリスレットのようなドロップアウトが来る所じゃないぞ」

三人で話していると、奥の方からブルーの生徒二人が現れ、話しかけてきた。

「なんでだよ、別にいいだろ」

十代がそう反論すると、ブルーの生徒は指を入口の方に向ける。

「そうはいかない、それを見ってみろ」

三人そろって指の差された所を見る。そこにはオベリスクの巨神兵の顔が彫られた紋章が付けてあった。

「オベリスクの紋章が見えないか？」

「あつ……ごめん。知らなかったんだ、寮に帰ろうアニキ、神楽くん」

それを見たとたん翔が気を落す。十代は納得がいつていない顔だ。

「うーん、なんかしっくりこないな……」

「奇遇だな、俺もだ。オベリスクの紋章があるからって何なんだよ？」

「なあ！俺達とデュエルしないか？それならいいだろ？」

どうしてそうなる？と思ったが、ブルーの生徒の一人が何かを思い出したように声を上げる。

「あつ、誰かと思ったら・・・」

「万条目さん、クロノス教諭に勝った110番と111番ですよ」

「・・・」

もう一人のブルーノ生徒が観客席に向かって話しかける。そこには万条目が居てこっちを万条目が睨んでいる。

「俺、遊城十代よろしく！」

「神楽だ、よろしく」

「えっと、丸藤翔です・・・」

十代が元気よく、翔が控えめに自己紹介をする。自己紹介をした所で十代が俺に話しかけてくる。翔が良い終わった所で十代が口を開く。

「それで、あいつは誰だ？」

「・・・十代、本人の前でそれは失礼だぞ」

「お前万条目さんを知らないのか!？」

「未来のデュエルキングと名高い万条目準様だぞ!」





万条目の言葉に即答する十代、その姿を見て万条目は見下したように笑う。

「ふふっ、ならばその実力ここで見せてもらおうか」

「いいぜ！」

十代と万条目がデュエルをする、という状況に翔はオロオロだし、俺たちの目の前に居るブルーの生徒はそれらを見て嘲笑っていた。その時、後ろから女性の声が聞こえてきた。

「あなたたちなにしてるの？」

その声の主に万条目が反応する。

「いやあ、こいつらがあまりにも世間知らずで、学園の厳しさを少々教えてあげようと思って」

「そろそろ寮の歓迎会が始まるところよ」

入ってきたのは天上院明日香だった。

明日香と万条目はしばらく睨みあっていたが、万条目が痺れを切らす。

「ちっ！引き揚げるぞ」

そう言い万条目は去っていく、それを追うように二人のブルーの生徒たちもどっかに行ってしまう。

万条目達が出て行くのを見届けると明日香が俺たちに話しかけてくる。

「あなたたち、万条目君の挑発には乗らないことね、アイツ等ろくでもない連中だから」

「わざわざそんなこと言うなんて、もしかして俺に一目ぼれか？」

「アニキそんなあり得ないこと・・・」

「翔、案外お前にかもしれないぜ」

「ええっ！？ちょ、なに言ってるんスか、神楽くん！！」

俺の言った言葉に翔は本気になって慌て始める  
これを見ていた明日香がフフツと笑った。

「あなたたちの寮でも歓迎会があると思うからそろそろ戻ったら？」

「あっ、そうだった！戻るぞ！」

そういつて走り出す十代、翔と俺はそれを追いかける。  
それを追いかけようとして、立ち止まる。そして明日香の方を向く。

「っとアンタ、ありがとな。仲裁に入ってくれて」

「フフツ、気が向いただけよ」

「それでもだ、じゃな」

それだけ言って俺は十代達を追いかける。

一人残った明日香の後ろから一人の女子生徒が現れる。  
明日香はその人物に振り返り、十代達にあつた感想を言う。

「あなたの言うとおり、面白そうな人たちね」

「そうだろうな」

「アナタは会わなくてよかったの？」

「……ああ、もう少し、もう少し……整理してからにする」

そう言いながらその女子生徒は神楽達が出て行った方を見る。

「………神楽」

そして隣に居る明日香にも聞き取れないほど小さな声でそう呟いた。

レッド寮に戻った俺達は、その後に行われた歓迎会に出て料理を食べ終え部屋に戻ってきていた。

「ふー、食った食った……。すげーうまかったな！」

「ああ、あれだけ美味しい料理を食ったのは久しぶりだ」

「アニキと神楽くんだけおかわりしてたね」

実際、あれほど美味いとは思っていなかった。しかし、食べてみると色々な所に工夫が施されており、俺自身なぜおかわりする奴が俺と十代だけなのだろうと思うくらいだ。

「でも、他の人たちなんか暗かったよね……。やっぱり落ちこぼれ集団なのかなあ？」

確かに、はしゃいでいたのは十代だけだった。他の奴らは少しだけしか食べていなかった。中には全く手を付けていない奴もいた気がする。

「負け癖がついてるんだらう。そんなのだから良い様に言われるんだ」

「神楽くん、それは言いすぎだよ……。ここの人たちだって……」

「頑張つていても、どこかで負けるとか思ってるんだろつよ、なあ十代？」

「ああ！デュエルはやるからには勝たないとな！！負けるより、勝つ方が面白いに決まってる！！」

「でも、それができないから負けるんじゃないあ……」

「翔！そうゆう気持ちじゃあダメだ！！大体……！！」

そこで十代の言葉を区切るように、部屋のなかに電子音が鳴り響く。その音源は二つあり、一つは十代のポケットから、もうひとつは俺のポケットからだ。

鳴っていたのは入学式の前に渡されていた生徒手帳みたいなものだった。手帳と言っても、携帯電話に近いが。

「なんだ？メールか？」

そういつて十代はそれを取り出し、操作する。すると生徒手帳の画面に映像が映し出される。それに映っていたのは、万条目だった。

『やあ、ドロップアウトボーイ。午前零時デュエルフィールドで待っている、互いのベストカードをかけたアンティールでデュエルだ。勇気があるんだったら、来るんだな』

それで映像は終わる。

映像を見ていた俺たちはしばらく無言になる。その静寂を破つたのは翔だった。

「これって……」

翔がそう呟く。

それに答えるように、俺は口を開いた。

「挑戦状、つて所だろうな……」

はあ、まだ面倒なことが残っているようだな。

## 第五話（後書き）

次は側近？とのデュエルです。



## 第六話（前書き）

側近？とのデュエルです、おかしなところがあったらご報告お願いします。

## 第六話

午前零時、俗に深夜と呼ばれる時間帯である。そんな時間に万条目に呼び出しを食らった。まったく、迷惑極まりない。学園にちよつど零時につくように寮を出ると、十代達もちよつど出てきたところだった。

「よう、お前らも万条目に呼び出されたのか？」

原作を知っているのですそのはずなのだが、一応聞いてみる。

「ああ、お前もか？」

「そんなところだ」

そして学園に向かう。

学園の廊下を歩いていると翔が、

「やっぱりやめた方がいいツスよー、明日香さんもあいつの挑発に乗らない方がいいっ言ってたし」

「なにいつてんだ、デュエルだぞやるに決まってるだろ」

「そうだぞ翔、売られたデュエルは買うまでだ」

「そんなこと言ったって」

そうしているうちにデュエルフィールドにつく、万条目と側近？は

すでにいた。

俺たちの姿を確認すると、万条目がリングの上から偉そうに迎えてくれた。

「よく来たな、110番111番、怖気づいて来ないのかと思ったが・・・」

「へへっ、デュエルと聞いちゃこない理由はないぜ」

そして、二人はフィールドに立つ。

「111番。お前の相手はこいつらだ」

万条目が側近をさす。

「二対一か・・・成績優秀であるブルーの生徒様がレット相手に随分臆病なことだ。あっ、もしかして負けるのが怖いとか？ププっ！なぐんだブルーって臆病の集まりなんだ」

自分で思いつくムカつく口調を再現してみたが、どうやら効果は抜群のようだ。万条目の側近AとBが顔を真っ赤にしてこっちを睨んでいる。挑発は適当なこと言えばそれなりの効果があるからな。

「なら、お前はそこのもう一人とタッグを組めばいい！そこまで頭が回らないのか！」

Aが苦し紛れに挑発してくる。だが俺はそんな挑発に乗るほどバカではない。

「何言ってるの？お前らなんて一人で十分だよ、それに一人一人や

るといふ発想はなかったのか、アホども」

そう言いながら、ディスクをかまえる。

「何だと！」

「後悔するなよ……！」

「そつちがな！」

「……デュエル！」「……」

「俺から行かせてもらう、ドロー！」

言うておくがこのデッキはシンクロではない、

「モンスターをセット、そして」

残りの手札をすべて取り、

「カードを五枚伏せターンエンド！」

「……なに！？」「……」

そう、このデッキはパーミッションっぽいデッキだ。

LP4000

モンスター／モンスター  
魔法・罾／五枚  
手札／零枚

「馬鹿にしているのか!？」

「している」

「何だと!？」

「さつさとやれアホども」

「くっ、俺のターン!」

Aがカードを引く、どうやら俺 A Bの順のようだ。

「チエミナイ・エルフを召喚!ターンエンド!」

LP4000

モンスター／チエミナイ・エルフ

魔法・罾／零枚

手札／五枚

「バナラかよ、ブルーでも入れてるんだな。まあ1900ってのはこの世界じゃ強いんだろうな。」

「俺のターン!ドロー!」

「さてこいつから攻撃は可能だ、どう出る?」

「俺はゴブリン突撃部隊とっげぶたいを召喚！」

ゴブリン突撃部隊とっげぶたい

効果モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族 / 攻2300 / 守 0

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になり、

次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない。

「ゴブリンで攻撃！」

ゴブリンの一体が場に出ている俺の守備モンスターを破壊した。

「なんだそのリバーズカードは！全部意味がないのか！？ハッやはり所詮はレッド！クズカードしか入っていないのか！？」

むかつくな！それに俺のデッキには必要なカードしか入れてねーよ。

「俺の破壊されたモンスターは、メタモルポットだ」

「なに！？」

メタモルポット

効果モンスター（制限カード）

星2 / 地属性 / 岩石族 / 攻 700 / 守 600

リバーズ：お互いの手札を全て捨てる。

その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを5枚ドローする。

「その効果で、五枚ドロー！」

デッキの上から五枚引く、Bは悔しそうに手札を捨てた、いいカードがあつたのか？ラッキー。

「ゴブリンは攻撃終了後、守備表示になる、カードを一枚伏せターンエンド」

LP4000

モンスター/ゴブリン突撃部隊

魔法・罠/一枚

手札/四枚

「俺のターンドロー！ターンエンド。」

A「何だと!？」

LP4000

モンスター/なし

魔法・罠/五枚

手札/六枚

「俺たちをなめているのか！」

「てめーらなんて舐めたくねーよ気持ち悪い、絶対まずいだろうし」

っ！か何もすることが無いんだよ。アルテミスを引きたい！

「こいつっ！？」

いい感じに怒ってるね。

「俺のターン！ドロー！俺はマジックカード大嵐を発動！魔法・罨をすべて破壊す」まきゆう魔宮の賄賂わいろを発動。大嵐を無効にする。「何！？」

まきゆう魔宮の賄賂

カウンター罨

相手の魔法・罨カードの発動を無効にし破壊する。  
相手はデッキからカードを1枚ドローする。

「そしてお前はカードを一枚ドローする」

「くっ」

Aが悔しそうにドローする、しかしまだ終わらんよ！

「そして！俺が相手のコントロールするカードの発動をカウンター罨で無効にした場合、このカードを手札から特殊召喚する事ができる！こい！冥王竜ヴァンダルギオン！」めいおうじゆう

めいおうじゆう冥王竜ヴァンダルギオン

効果モンスター

星8 / 閻属性 / ドラゴン族 / 攻2800 / 守2500

相手がコントロールするカードの発動をカウンター罨で無効にした場合、



このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚に成功した時、

無効にしたカードの種類により以下の効果を発動する。

魔法：相手ライフに1500ポイントダメージを与える。

罫：相手フィールド上のカード1枚を選択して破壊する。

効果モンスター：自分の墓地からモンスター1体を選択して

自分フィールド上に特殊召喚する。

フィールドに残っていた魔宮の賄賂がその下に出来た穴に沈み、そこから突風と共にヴァンダルギオンが出てくる。

「そして魔法を無効にして特殊召喚した場合、お前に1500ポイントダメージを与える！」

「なに!?!」

さつきからこいつ同じリアクションしかしないな、おもしろくない。ヴァンダルギオンがAに向かって炎をはく。

「ぐあっ!」

LP 4000 2500

「くっ、だが俺は装備魔法デーモンの斧をチェミナイ・エルフに装備! 攻撃力1000ポイントアップ!」

デーモンの斧おの

装備魔法

装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、  
自分フィールド上に存在するモンスター1体を  
リリースする事でデッキの一番上に戻す。

「これで俺のモンスターの方が上だ！チェミナイ・エルフで攻撃！」  
斧をもったチェミナイ・エルフがヴァンダルギオンに切りかかる。

「リバーズカードオープン！魔法の筒マジック・シリンダーその効果で攻撃を無効にし、  
チェミナイ・エルフの攻撃力分のダメージをお前に与える！」

チェミナイ・エルフが目の前に現れた大きな筒の中に入って行った、  
そしてAの前に現れた筒の中から現れそこから現れたチェミナイ・  
エルフがAに切りかかる。

「うあああああー！！」

LP 2500 0

「くそつ。俺のターン！俺はゴブリン突撃部隊を生け贄えんぐんにサイバテ  
ィック・ワイバーンを召喚！そしてリバーズカード援軍えんぐんを発動！サ  
イバティック・ワイバーンの攻撃力を500アップ！」

ATK 2500 3000

「ブッ！」

まずい吹いてしまった、しかしブルーが援軍を入れてるってどうよ？  
だが、Bは勘違いしたのか勝ち誇った顔をしている。

「サイバティック・ワイバーンでヴァンダルギオンにこうげ「サンダー・ブレイク発動。」何だと!？」

サンダー・ブレイク  
通常罠

手札を1枚捨て、フィールド上に存在するカード1枚を選択して発動する。

選択したカードを破壊する。

「手札一枚をコストにフィールドのカードを一枚破壊する。」

サイバティック・ワイバーンが上から降ってきた雷に破壊された。それを見たBが悔しそうにしている。

「お前、援軍を使うタイミングをミスしたな」

「なに？」

「どうやら分かっていないらしい。」

「お前がダメージステップに援軍を発動していれば、サンダーブレイクは発動できずヴァンダルギオンを破壊できたのにな」

Bはそれに気がついたようだ。まあそれでも神宣があったから意味なかったけどな。

「くそっ！カードを一枚伏せ、ターンエンド」

LP4000

モンスター/なし

魔法・罾ノ一枚  
手札ノ五枚

「俺のターン、ドロー」

おっ、やっと来たか。三枚入れてるはずなのにな。

「俺は豊穰トウジウのアルテミスを召喚」

豊穰トウジウのアルテミス

効果モンスター

星4 / 光属性 / 天使族 / 攻1600 / 守1700

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、  
カウンター罾が発動される度に自分のデッキからカードを1枚ドロ  
ーする。

「かかったな！トランプ発動、激流葬！これでお前のモンスターは  
ぜんめー「神カミの宣告センコク発動、激流葬を無効にする」何だと!？」

ホントこいつら同じリアクションしかしないな、つまらん。

神カミの宣告センコク

カウンター罾（制限カード）

ライフポイントを半分払って発動する。

魔法・罾カードの発動、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚の  
どれか1つを無効にし破壊する。

LP4000 2000

「アルテミスの効果で一枚ドロ、バトル！アルテミスとヴァンダ  
ルギオンでダイレクトアタック！」

「ぐああああー！ー！？」

LP40000

「俺の勝ちだ、さあアンティールルだカードをもらつぞ。」

「「！？」」

「なにびっくりしてんだお前ら？」

「素晴らしい二人のデッキをとる。」

「うあー、ほしいのなさぞー。つーかこいつらよくこのデッキでブル  
ーになれたな。」

「ん？これは……」

「なんか、ひとつだけ違うカードが入っていた。なにが違うのかとい  
うと、他のカードとは雰囲気が違うカードが一枚だけ入っていた、  
それは……。」

エレメンタルマスター  
精霊術師 ドリアード。

え？なんでこいつ儀式魔法入ってないのにこのカード入れてんの？  
ああ！あれか！アイドルカードってやつか！いやぁこいつらもこんなカード入れてるんだね。気持ち悪いけど。  
まあ、このカードの雰囲気が違うのは本当なんだからこのカードにしようか。

「じゃあこのカードでいいや」

そう言っただリアードを見せる、するとAが慌てた、  
ああ、こいつのカードなんこれ。

「そ、それは・・・」

「なに？負けたのにこれはダメって言うのか？」

そう言っただ他のカードをAとBに返した。  
十代の方は、ちょうど万条目が地獄将軍・メフィストを出して、  
十代のターンのようだった。  
すると、廊下の方から足音が聞こえてきた。

「まずい、ガードマンが来るわ！時間外に許可なく施設を使っているし、アンテイルールは校則で禁止されているし見つかったら校則違反で退学かもよ！」

「えー！？ホントっすかーそれ！？」

「え、え、え！そんな校則あんのかよ！？」

「アナタ生徒手帳読まないの？」

あーあ、もう時間か。明日香の声を聞いてAとBもあわて始めた。

「まずいですよ万条目さん！」

「そうですねよ、早く逃げないと！」

「今夜はここまでだ、俺の勝ちは預けておいてやる。」

「まだ勝負は終わっちゃいないぜ！」

「もういい、お前の実力は見せてもらった、試験はまぐれだった。」

「ふざけんな！」

「アニキ見つかっちゃうよ!?!」

「こっちよ、ついてきて」

「うっ、嫌だ！俺はここを動かない！」

「ふざけるな！俺は退学は嫌だぞ！」

そう言って十代を担ぎ、リング降りる。

「どっちに行けばいい!?!」

「こっちよ!?!」

明日香が走って行った方向についていく、十代が「はなせーまだ終わってねー！」と言っているが無視！  
しばらく走っていると学園の玄関についた。

「まったく世話の焼ける人ね」

「まったくだ」

そう言いつつ十代を下ろす。

「どお？ブルーの洗礼を受けた感想は？そつえばアナタは勝っていたわよね」

そう言つて俺をさす。まあ勝てなきゃ俺のメンツが丸つぶれだからな。

「まあまあかな」

「そうかしら？邪魔が入らなければ、アナタのベストカードは取られていたのよ？」

「いいや、あのデュエル俺の勝ちだぜ」

そう言つて、持っていたカードを見せる。

そのカードを見て明日香は驚いたようだ

「死者蘇生を使ってフレイムウイングマンを出していれば俺の勝ちだったぜ！」

そう言つて十代は歩き出す、俺もそれについていく。



「ふー、疲れたな」

自分の部屋に戻って、ベッドに倒れこんだ。

「そういえば、あのカード結局何なんだっただ？」

そう言っただけで戦利品であるドリカードを見る、なんかこれだけ他のカードとは違う気がしたんだよな。

カードをじっくり見てみるが、特に変わった所はない気のせいかな？

「まあいいや、寝よ寝よ」

電気を消す、意識が混濁してきて、あーもう寝そうだなあなんて思いながら寝た。

『ありがとう』

なんか聞こえた気がしたがそのまま俺の意識は夢の世界へ旅立った。

## 第七話（前書き）

精霊が出ます、変な所があったらご報告願います。

## 第七話

『起きてください、もう朝ですよ』

「うーん・・・あと五分・・・」

『ダメです。ほら、遅刻しますよ』

「じゃあ、あと300秒・・・」

『結局五分じゃないですか。ダメですよ、おき~~~~~~~~ください~~~~~!』

「分かった、分かったから、耳元で叫ばないでくれ・・・」  
しぶしぶ布団を退かし上半身を起こして体を伸ばす。

『ほら、起きたら顔を洗って、歯を磨いてください』

「あー・・・分かったよ・・・」

実は俺、結構朝弱いんだよね。

顔を洗い、歯を磨く。そこで気がつく。

「・・・・・・あんだ誰？」

俺達は向かい合うように正座した。

「つまりお前はドリアードのカードで、昨日というか今日帰ってきた後、俺の影響を受けめでたく精霊になったと、そう言うわけ？」

『はい、私は神楽さんのおかげでこの姿になることができました、一度この姿になってみたかったんですよ。ありがとうございます』  
そう言って頭を下げる。

「ま、それはいいとして。いくつか質問していい？」

『はい、いいですよ』

「じゃあ、まず一つ目！俺の影響って何!？」

立ちあがりながら俺は言った！

『はい、よく分らないです!』

ズデン!!

『わっ!?!だ、大丈夫ですか?』

「大丈夫・・・だ。じゃあ気を取り直して第二問!」

俺は再び立ちあがってドリアードに向き直った。

「なんで俺の部屋に居るの!?!」

『ああ、それはカードの精霊はカードからあまり離れることができません、所有者の守護霊のような存在になるからです!』

「お、おお・・・まともな回答・・・」

ちよつと期待してたのに・・・。

「じゃあ最後の問題!なんで、さっき仲のいい幼馴染の朝みたいなきことをしてたの!?!」

一番の疑問だ。

『はい、前の所有者さんがやっていただけゲームの内容にあったのでやってみましたが、男の人はこういうしゅちゅえーしょんは憧れるものと聞いているので』

Aよそんな趣味があったのか。

「しゅちゅえーしょん、じゃなくてシチュエーションな・・・」

ん?聞いていた?

「お前って俺に会って精霊になつたんじゃないの?」

『はい、そうです』

「なら聞いていたってなんだ?話はできたのか?」

『いえ、前の所有者さんが私に話しかけてくれました。』

……Aよ友達がないのかお前は。それともそうゆう趣味か。

『あっ』

ドリアードが何か思いだしたようだ。

「ん、どうかしたのか？」

『授業は何時から始まるんですか？』

時計を見る。授業の始まる三分前、ここから走って学園に入り教室まで行くのは最速でも十五、六分はかかるだろう。

「早くいくぞ！！」

そう言っつて部屋を出る。

『待つて！置いてかないでくださいー！』

そう言えばカードからあんまり離れられないんだっけ？

いったん部屋に戻りドリアードのカードを持ち、いざ出陣！

「シニヨール丸藤、フィールド魔法の説明をお願いします〜」

「は、はい！え、えーと・・・」

「そんなの幼稚園児でも知ってるぜー！」

ブルーがヤジをとばす、すると周りから笑い声が漏れる。

「う、うう・・・」

「気にすんなよ、落ち着け」

「よろしい、引っ込みなさい〜」

翔が座る。

「では代わりに「すいませーん！！遅れましたー！！」ムッ」

教室にいた人が一斉にドアを見る。

「せ、セーフ？」

「遅刻ナノ〜ネ。では、代わりにシニヨール姫宮、フィールド魔法の説明をお願いします〜」

「フィールド魔法？え〜と、フィールドに一枚しか存在できない、とか？」

「50点ナノ〜ネ、他には互いに利用することができるや魔法・罫とは別にカードを置く場所があるなどもいってほしかったノ〜ネ」

「こまけーな、別にいいじゃん」

「カードの理解がたりないノ〜ネ、さすがオシリス・レッドナノ〜ネ」

レッド以外の生徒が笑う、うぜーこいつら。  
そんなことを思いながら席に座る。

「でも先生、デュエルは知識だけじゃないぜ。だって俺レッドなのに先生に勝っちゃたし」

「それなら俺だって勝ってる」

「ぐぐう〜、マンマミ〜ヤ〜」

悔しそうにハンカチを噛んでいる、いい気味だ。  
そのあとの授業は大徳寺先生の授業で、今は体育だ。

「翔の奴何やってんだ？」

「どうかしたのか？」

「翔がまだ来てないんだよ、授業はもう始まってんのに」

「そつか、まあ問題は無いだろ」



そう言えば偽ラブレター事件って今日だったけ？

「ふいふ、いい湯だったな」

寮に帰ってから荷物を置いて風呂に入りに戻ってきた。

『あつ。お帰りなさいませ、ご主人様』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
はい？

「ドリアード、なんだそれは？」

『男の人はこういうのが好きだとげーむで言っていたので、実践してみ「やらんでいい！そうゆうのは！」そうですか……。でも、所有者だからご主人様というのは合っていると思うのですが……』

「女の子がそういう言っちゃいけません」

すげーびっくりしたよ、男はそういうのが好きってどんなゲームだ。……別にちよとやってみたいなんて思ってないから、ホントなんだからね!？」

「暇だから十代のところ行くか」

『あつ。私も行っているんですか?』

「まあ、十代は精霊見えるし……いいんじゃないか?」

『はい!』

「フレイムウイングマンで攻撃!」

「のあつ!?!また負けた!?!」

只今、十代の部屋でデュエルしています、結構やったんだけど二、三回くらいしか勝っていない。

『クリクリ〜』

『へーそうなんですか〜』

精霊組も打ち解けているようだ。

「それにしても神楽もカードの精霊が見えるんなんて知らなかった

ぜ」

「ああ、俺も最近知ったからな」

そんな会話をしていると、十代の生徒手帳っぽいものがあった。

「なんだ？」

「マルフジシヨウヲ預カッテイル、カエシテホシクバジヨシリヨウマデキタレシ」

便利な生徒手帳。

「なんだこれ？イタズラか？」

「いや、案外ホントかもしれないぞ。翔居ないし」

「ん〜そうだな、行ってみようぜ」

「ああ」

そして、一緒に女子寮に行くことになった。

## 第七話（後書き）

次にヒロインが出ます。

## 第八話（前書き）

ヒロインとのデュエルです。変な所があったらご報告お願いします。

## 第八話

湖のほとりの近くに、自然公園などによくあるボートを止めている所みたいなどころからボートを勝手に拝借し、えっちらおっちらと十代と漕いでいると女子寮が見えてきた。というか、この時点で俺と十代はのぞき扱いされてもおかしくはないと思う。ん？誰かに見られたような気がする。誰も見てないよね？

「どうかしたのか？」

「いや、何でもない・・・のか？」

「？」

なんか嫌な予感する、これでも視線とかには敏感な方だ、だから人の視線とかにはすぐ気がつく。すると、ドリアードがビクン！と体を震わせた。

「どうかしたのかドリアード？」

『・・・誰かに睨まれたような気がします・・・』

「やっと来たのか、遅いぞ神楽」

私は今、窓からボートを漕いでいる神楽と十代と神楽のそばにいる精霊を見ている。  
もう少し早く来るのかと思っていた。

「むう……」

少しその精霊を睨んでしまう。

『……どうかした？』

「いや、何でもないよクラン。」

『……そう、ならいい。』

「まあ、今夜は楽しめそうだな」

そう呟き、私はディスクとデッキを持って部屋を出る。

「そろそろ着くぞ」

ボートを漕ぐ事五分くらい、やっと女子寮に到着する。  
ボートを止めると明日香と確かももえとジュンコ、と縄で縛られた  
翔が待っていた。

「アニキ、神楽くん……」

翔が弱々しく言う。

「何があっただよ翔？」

「な、何だって！？そんなことがあったのか翔！」

「まだ何も言っていないっす神楽くん」

ボケてみたがあっさり返されてしまった。

「こいつがね女子寮のお風呂をのぞいたのよ！」

「なんだって！」



「マジかよ……」

『そんな……』

「違っつス！のぞいてなんかないっス！」

「翔、お前はそんなやつだったんだな……」

「違っつス！！そんな可哀そうな人を見る目は止めてほしいっス！！」

しかし俺は翔の願いを無視して可哀そうな人を見るような視線を送り続けていると、翔が腹を立ててギャーギャー騒ぎ出した。

「ハア……ねえあなた、私とデュエルしない？もし勝てたらのぞきのことはだまっているわ」

明日香がため息を吐きながら十代にデュエルを申し込む。

「なんだかよく分かんないけど、まあいいや！そのデュエル受けて立っぜ！」

どうやら今回は見学になりそうだ、俺ってきた意味あんのかな？

「なにやら面白そうなことをしているな神楽」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・彘？

声が出た方を向く、そこには懐かしい友人の姿があった。

「なっ、なんでお前が、ここに、いるの・・・？」

何故だ？何故こいつが此処に居る？

「・・・・・・・・実羽・・・」

そう、そこにいたのは俺の数少ない友人の一人、黒猫「くろねこ」 実羽「みう」が立っていた。

『しっかりしてください！』

はっ！

あまりにも強すぎる衝撃を受けたためか、少し機能停止していたらしい。

「なんでここに居るのか、と言われるとそうだなあ、興味があったからだな」

「だから、私も混ぜてくれないか？」

「混ぜろ、と言われても・・・」

「なら私が神楽とデュエルする、そして神楽達が二勝したららのぞきのことは黙っている、というのはどうかしら」

「待て。条件が厳しくなってるぞ！」

それは俺と十代どっちも勝たなきゃダメじゃねーか、そんな条件飲めるか。

「別にいいだろこのくらい、君もそれでいいだろ？」

実羽が十代に言う。

十代は早くデュエルがしたくてしょうがない様で、体をうずうずさせている。

「どつでもいいから早くデュエルしようぜ！」

「どつでもよくない！」

だが、結局は実羽に言いくるめられてその条件でデュエルすることになってしまった。

湖の上、互いのボートが距離をとる。

「神楽くん、あの人と知り合いなの？」

翔が聞いてくる。

「ああ、腐れ縁ってやつだと思う」

あまり本意ではないがな。

「あの人って確か……」

「ん？」

翔がなんか呟いている。

「デュエル！」

いつの間にかデュエルが始まっていた。

「サンダージャイアントでダイレクトアタック！ボルティック・サンダー！」

「きゃあああああああ！？」

十代がサンダージャイアントで止めをさす。

「ガツチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

デュエルは原作ど通りに十代の勝ちで終わった。

「惜しかったな明日香」

「ええ、次はあなたの番ね実羽」

「ええ、任せて」

あっちは準備が終わったようだ。

「すごいッスよアニキ！」

「おう！さて、次がんばれよ神楽」

『がんばってください！』

「ああ、任せとけ」

もう諦めてやるしかないか。まあ細かいことは後で聞くことにしよう、いまはデュエルだ。

そして俺たちはポートの上に立つ。

「神楽とデュエルするのも久しぶりだな」

「そういえば、そうだな」

あつちの世界じゃ仕事とかがあつたからな、遊ぶ機会がなかった。

「手加減はしねーぞ！」

「心配するな、もともとそのつもりはない！」

「「デュエル！」」

「先行は譲。楽しいデュエルにしよう」

「そうかい、俺のターン、ドロー。」

まったく、何を企んでやがる。

「俺は切り込み隊長を召喚！そして切り込み隊長の効果でカードガンナーを守備表示で特殊召喚！」

切り込み隊長

効果モンスター

星3 / 地属性 / 戦士族 / 攻1200 / 守400

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は表側表示で存在する他の戦士族モンスターを攻撃対象に選択する事はできない。

このカードが召喚に成功した時、手札からレベル4以下のモンスター1体を

特殊召喚する事ができる。

#### カードガンナー

効果モンスター

星3 / 地属性 / 機械族 / 攻 400 / 守 400

1ターンに1度、自分のデッキの上からカードを3枚まで墓地へ送って発動する。

このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、墓地へ送ったカードの枚数×500ポイントアップする。

また、自分フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、

自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

「そしてカードガンナーの効果発動、デッキから三枚墓地へ送り、攻撃力を1500ポイントアップ」

デッキから三枚とり墓地へ送る。落ちたカードは、

ボルト・ヘッジホッグ・聖なるバリア ミラーフォース ・大嵐

マジですか・・・ボルトはいいけど他が最悪だなチクシヨウめ。

「なんで今、カードガンナーの効果を発動したの？」

「このデッキは墓地にあった方がいいカードが結構入ってるかな、カードを二枚伏せターンエンド」

LP4000

モンスター/カードガンナー、切り込み隊長

魔法・罫/二枚

手札/二枚

「私のターンだなドロー」

実羽のデッキは、やっぱりあれか？

「速攻魔法サイクロン発動！」

場にサイクロンのカードが現れ、そこから突風が吹き俺のリバースカードを破壊した。

なんか俺ってクズ鉄使う前に破壊されること多くね？

「さらにBF - 暁のシロツコを召喚！」

「やっぱりそのデッキか・・・」

ブラックフェネがっぎ  
BF - 暁のシロツコ

効果モンスター

星5/闇属性/鳥獣族/攻2000/守 900

相手フィールド上にモンスターが存在し、

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

このカードはリリースなしで通常召喚する事ができる。



1ターンに1度、自分フィールド上に表側表示で存在する「BF」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターの攻撃力は、そのモンスター以外のフィールド上に表側表示で存在する「BF」と名のついたモンスターの攻撃力の合計分アップする。この効果を発動するターン、選択したモンスター以外のモンスターは攻撃する事ができない。

「レベル5のモンスターを生け贄なしで召喚した!？」

「シロッコは相手にだけモンスターが存在する場合、生け贄なしで召喚できる、そしてBF - 黒槍のプラストとBF - 疾風のゲイルを特殊召喚するわ!」

チートじゃね!?!それ!?!

シロッコの両脇にプラストとゲイルが姿を現す。

「すげー!いきなりモンスターが三体も出てきた!」

「やっぱりあの人って試験の時の・・・」

「どうかしたか翔?」

「あの入試験の時、試験の先生にワンキルした人だよ!」

何してやがんだアイツは、その先生相当ショックだっただろうな。

「そしてゲイルの効果!切り込み隊長の攻撃力と守備力を半減させる!」

ATK 1200 600

やっぱこの効果ってありえねー。

「そしてシロッコの効果でブラストに場のBFと名のついたモンスターブラックフェザーの攻撃力分、攻撃力をあげる！そしてブラストは守備モンスターを攻撃して攻撃力が守備力超えていれば貫通ダメージを与える。」

ATK 1700 5000

「攻撃力5000!?!」

「いきなりだな!?!」

「手加減はしないって言ったたる、ブラストでカードガンナーに攻撃！ブラックスパイラル!」

ブラストが槍を構え、回転しながらカードガンナーに突っ込む。

「この攻撃が通れば……」

「実羽さんの勝ちですわ!」

「そう簡単にやらせるかよ!リバースカードオープン!ガード・ブロック発動!戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドロウする!さらにカードガンナーの効果で一枚ドロウ!」

ガード・ブロック

通常罫

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

「やはり簡単にはやらせてはくれないか。」

「ワンキルなんてさせるかよ」

「なら、メインフェイズ2に入り、ゲイルにブラストをチューニング！」

「チューニング!?」

「あの人もしンクロ召喚できるんすか!?!」

「どんなモンスターが出てくるんだ!」

翔と明日香が驚いているが十代は出てくるモンスターの方が興味があるらしい。

「黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれ!シンクロ召喚!BF -  
アーマード・ウイング!」  
ブラックフェザー

突然発生した竜巻の中からアーマード・ウイングが出てきた。

ブラックフェザー  
BF - アーマード・ウイング

シンクロ・効果モンスター

星7 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻2500 / 守1500

「BF」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードは戦闘では破壊されず、このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。

このカードが攻撃したモンスターに

楔カウンターを1つ置く事ができる（最大1つまで）。

相手モンスターに乗っている楔カウンターを全て取り除く事で、

楔カウンターが乗っていたモンスターの攻撃力・守備力を

このターンのエンドフェイズ時まで0にする。

「アーマード・ウイングは戦闘では破壊されず、ダメージも受けない。ターンエンドだ」

LP4000

モンスター/シロッコ、アーマード・ウイング

魔法・罫/0枚

手札/二枚

「俺のターンドロー！」

よっしゃ来た！今度はこっちから行くぜ！

「俺はジャンク・シンクロンを召喚！効果でボルト・ヘッジホッグを特殊召喚！そして、レベル2ボルト・ヘッジホッグとレベル3切り込み隊長にレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンが三つの輪になりその中を切り込み隊長とボ

ルト・ヘッジホッグが通る。

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます。光差す道となれ！シンクロ召喚！粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！」

ジャンク・デストロイヤー

シンクロ・効果モンスター

星8/地属性/戦士族/攻2600/守2500

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上このカードがシンクロ召喚に成功した時、

このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数まで

フィールド上に存在するカードを選択して破壊することができる。

「おお！かっけー！」

「すごいっす！」

「ジャンク・デストロイヤーがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊することができる！俺は暁のシロッコとアーマードウイングを破壊する！ダイダル・エナジー！」

湖の水がシロッコとアーマードウイングを飲み込む。

「やるわね神楽。」

「そりゃどうも、ジャンク・デストロイヤーでダイレクトアタック！デストロイ・ナツクル！」

ジャンク・デストロイヤーが実羽に殴りかかる。

「きゃあ!？」

LP4000 1400

「カードを一枚伏せ、ターンエンド」

LP4000

モンスター/ジャンク・デストロイヤー

魔法・罫/一枚

手札/三枚

「私のターン、ドロー！」

状況は俺が有利だが、どうなるかな。

「私は強欲な壺を発動、デッキから二枚ドロー！永続魔法黒い旋風（せんぷう）を発動！このカードは自分がBFを召喚した時、そのBFの攻撃力以下のBFをデッキから手札に加える」

このカードでBFはさらに強くなったよね。

黒い旋風

永続魔法

自分フィールド上に「BF」と名のついたモンスターが召喚された時、

自分のデッキからそのモンスターの攻撃力より低い攻撃力を持つ「BF」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

「BF - 蒼炎ブラックフェイズのシユラを召喚！そして黒い旋風の効果でシユラ以下の攻撃力を持つ、BF - 月影ブラックフェイズのカルートを手札に加える。」

「BF - 蒼炎ブラックフェイズのシユラ

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1800 / 守1200

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから攻撃力1500以下の「BF」と名のついたモンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

カルートか厄介なカードをサーチしてきたな。

「バトル！シユラでジャンク・デストロイヤーに攻撃！」

「ジャンク・デストロイヤーの方が攻撃力は上なのにな？」

「ダメージステップ時に手札のカルートの効果発動！自分フィールド上に表側表示で存在する「BF」と名のついたモンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送るで、そのモンスターの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで1400ポイントアップする！」

ATK 1800 3200

ブラックフェザージェット

BF - 月影のカルート

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1400 / 守1000

自分フィールド上に表側表示で存在する「BF」と名のついたモンスターが

戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、

そのモンスターの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで1400ポイントアップする。

シユラが爪でデストロイヤーを切り裂き、デストロイヤーが爆発する。

「ぐっ！」

LP 4000 3400

「そしてシユラの効果発動！このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、

自分のデッキから攻撃力1500以下の「BF」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。効果はなくなるけどね」

可愛く言ってもその効果は可愛くねえよ。

「その効果でBF - 疾風のゲイルを特殊召喚してダイレクトアタック！」



「え？二枚目！？」

「ちなみにゲイルは三枚入っているゾ」

可愛く言えば済むとでも思ってたのかこいつは！？

「リバースカードオープン！スピリット・フォース戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる！」

ゲイルが翼で風を飛ばしてくるが見えない壁に阻まれた。

「その後、自分の墓地に存在する守備力1500以下の戦士族チューナー1体を手札に加える事ができる。ジャンク・シンクロンを手札に加える」

「さすがだな、神楽」

「どういたしまして。」

「メインステップ2に入り、フェザー・ウィンド・アタックを発動。ゲイルをデッキに戻し、カルートを手札に加え、ターンエンド」

LP1400

モンスター/シユラ

魔法・罫/0枚

手札/一枚

「俺のターンドロー！」

よし、カルート使わせよう。さっさと使わせた方が安心だ。

「俺はジャンク・シンクロンを召喚！効果でボルト・ヘッジホッグを特殊召喚！」

「今度はどんなモンスターが出てくるんだ神楽！」

「今度はシンクロじゃなーぜ！俺はジャンク・シンクロンを生け贄にターレット・ウォリアーを特殊召喚する！この方法で特殊召喚したこのカードの攻撃力は、生け贄したモンスターの元々の攻撃力分アップする！」

ターレット・ウォリアー

効果モンスター

星5/地属性/戦士族/攻1200/守2000

このカードは自分フィールド上に存在する

戦士族モンスター1体をリリースし、

手札から特殊召喚する事ができる。

この方法で特殊召喚したこのカードの攻撃力は、

リリースしたモンスターの元々の攻撃力分アップする。

ATK1200 2500

「ターレット・ウォリアーでシユラに攻撃！」

ターレット・ウォリアーが肩についた銃でシユラを打つ。

「カルートの効果このカードを捨ててシュラの攻撃力を上げる！」

「カルートにチェーンしてイージー・チューニング発動！墓地のジヤンク・シンクロンをゲームから除外してジヤンク・シンクロンの攻撃力分ターゲット・ウォリアーの攻撃力を上げる！」

ATK 2500 3800

「これでターゲット・ウォリアーの攻撃力の方が上だ！」

シュラが打たれて爆発する。

「くっ……！」

LP 1400 800

「ターンエンド。」

LP 3400

モンスター/ターゲット・ウォリアー、ボルト・ヘッジホッグ

魔法・罫/0枚

手札/0枚

「状況は私の方が不利だな」

たしかに、実羽の場合は旋風だけだから俺の方が有利だ。

「だが、私が今この状況を打破することができたら、面白いと思は

ないか？」

出てな決め台詞、主人公属性ある人がこんなこと言うと必ず逆転するよね。

「たしかに面白いな。ただし、できたらの話だ」

「やってみるさ！私のターン、ドロー！私は貪欲な壺を発動！自分の墓地に存在するモンスター5体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする、私はこの五枚を選択する」

そう言って見せたカードは、ブラスト・カルート・シユラ・ゲイル・アーマードウイングの五枚。

「そして、この五枚をデッキに戻しシャッフル、そして二枚ドロー！」  
さーてどう出る？

「カードを二枚伏せ、ターンエンド」

LP800

モンスター/なし

魔法・罫/二枚

手札/二枚

「あれっ？何もしないのか？」

「何もできないんだよ」

「ドロー、なら遠慮なく行くぞ！ターゲット・ウォリアーでダイレクタアタック！」

ターゲット・ウォリアーが実羽に狙いを定める。

「この攻撃が通れば……」

「神楽さんの勝ちっす！」

「いや、絶対になんかある……」

「その通りだ、トラップ発動！フェイク・フェザー！」

通常罠

手札から「BF」と名のついたモンスター1体を墓地へ送り、相手の墓地に存在する通常罠カード1枚を選択して発動する。このカードの効果は選択した通常罠カードの効果と同じになる。

「手札から「BF」と名のついたモンスター1体を墓地へ送り、相手の墓地に存在する通常罠カード1枚を選択して発動する。このカードの効果は選択した通常罠カードの効果と同じになる！」

「でも、神楽はトラップは使っていないぜ？」

「あつ、ミラフォ……」

「神楽の墓地のミラーフォースの効果を使わせてもらっぞ。」

実羽の周りに透明なバリアが張られ、ターゲット・ウォリアーが放った弾丸を跳ね返しターゲット・ウォリアーが破壊された。

「ぐうっ！それは俺が使いたかった……！！」

「それは悪いことしたな。しかし利用するのも知恵だ」

「そうですね、メインフェイズ2にマジックカード名推理<sup>めいすいり</sup>発動！」

### 名推理<sup>めいすいり</sup>

#### 通常魔法

相手プレイヤーはモンスターのレベルを宣言する。

通常召喚が可能なモンスターが出るまで自分のデッキからカードをめくる。

出たモンスターが宣言されたレベルと同じ場合、めくったカードを全て墓地に送る。

違う場合、出たモンスターを特殊召喚し、残りのカードを墓地へ送る。

「レベル5だ」

「それでいいのか？」

「ああ、それでいいぞ」

普通ならうとかなのにな。

「じゃあ名推理の効果でデッキからカードをめくる」

そう言っつてカードをめくる。

増援・おろかな埋葬・サイクロン。

おい！なんで制限カードばつかなの！？いじめですか！？

バイス・ドラゴン・・・レベル5

「・・・レベル5だから墓地へ送る・・・。ターンエンド」

LP3400

モンスター/ボルト・ヘッジホッグ

魔法・罨/0枚

手札/0枚

「私のターン！ドロー！」

だ、大丈夫だろ、ボルト守備だし。守備だからダメージ喰らわないしー！

「闇<sup>やみ</sup>の誘惑（ゆうわく発動！自分のデッキからカードを2枚ドロし、その後手札の闇属性モンスター1体をゲームから除外する。手札に闇属性モンスターがない場合、手札を全て墓地へ送る。ドロー、シユラを除外」

シユラを除外か、召喚すればアタッカーになるのに。

「BF<sup>ブラックフェギんたて</sup> - 銀盾のミストラルを召喚！BF - 黒槍のプラストを特殊召

喚！そして、ミストラルにブラストをチューニング！」

「またシンクロ召喚するの！？」

「こんどはどんな奴なんだ！」

「漆黒の力！大いなる翼に宿り、その力を今ここに現せ！シンクロ召喚！吹きすさべ、BF - アームズ・ウイング！」

地味にセリフ変えてるな。

ブラックフェザー

BF - アームズ・ウイング

シンクロ・効果モンスター

星6 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻2300 / 守1000

「BF」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードは守備表示モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が500ポイントアップする。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

ブラックフェザンタテ

BF - 銀盾のミストラル

チューナー（効果モンスター）

星2 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻1000 / 守1800

フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた場合、このターン自分が受ける戦闘ダメージを1度だけ0にする。



「そしてリビングデッドの呼び声よこえを発動！シロッコを特殊召喚！そして効果発動！アームズ・ウィングの攻撃力をアップさせる！」

負けましたねこれは。

ATK 2300 4300

「アームズ・ウィングでボルト・ヘッジホッグに攻撃！ブラック・トルネード！」

アームズ・ウィングが銃を撃ちながら突っ込んでくる。

「アームズ・ウィングが守備モンスターと戦闘を行う場合ダメージステップの間攻撃力が500ポイントアップし、攻撃力が守備力を上回っていた場合貫通ダメージを与える！」

ATK 4300 4800

「いつつてえ！？」

弾丸が痛い！石投げられてるみたいだ！

LP 3400 0

『残念でしたね』

「ああ、ちよつと悔しい・・・」

「楽しいデュエルだったぞ神楽」

「そうかい、そりゃよかったな」

ボートを岸に近づけて降りる。

「翔、すまん負けちまった。」

「いいよ、もとはと言えば僕が悪いんだから・・・」

「だよなー！俺は悪くないもん！お前がのぞき魔と言われようと関係ないよな！元々のぞいたお前が悪いんだからな！」

「それとこれとは話が違う気がするツス！？」

「二人ともすげーデュエルだったぜ！」

「そうね、でも実羽がシンクロ召喚を使ったのは知らなかったわ」

「今まで使っていなかったからな」

「そういえば、こいつの事どうするんですか？」

ジュンコが翔を指さしながら言う。  
その言葉に翔は下を見る。

「一勝一敗だから、ノーカウントというのはどうだろうか？」

翔が顔を上げる。ジュンコとももえが明日香の顔を見る。その様子だと結論を明日香に委ねたようだ。

「・・・確かに、わたしは負けちゃたからね。いいんじゃないかしら、本人もやっていないって言っているんだし」

その言葉に翔が「ホントツスか!？」と声を上げ、十代もそれを喜んでるようだ。

二人がはしゃいでいる隙に、俺は実羽に近づく。

「・・・お前、元々このつもりだっただろ」

他の奴らに聞こえないように、実羽に聞いてみた。

「さあ？何のことだろうな？」

なにを白々しく。

「聞きたいことは山ほどあるが後で聞くことにする」

「そうか、私も神楽に聞きたいことがあるがまた今度にしよう。おやすみ、神楽」

「ああ、お休み」

そして十代達に「そろそろ帰るぞ」と言い寮に帰った。

これから実羽がらみで厄介なことが起こりそうだな。なんて考えながら俺たちは寮に帰った。

## 第八話（後書き）

次回はテストです。

## 第九話（前書き）

テストじゃないです。すいません、変なところがあったらご報告お願いします。

## 第九話

皆さん、おはようございます。って誰にあいさつしてるんだ俺？  
まあ、それは置いてだ、さっきあいさつした通り今は朝で、起きたばかりである。そこで皆さん——（だから誰だ）に質問がある、

『・・・すう・・・すう・・・』

皆さんは起きたら目の前に知ってる人の顔があったらどのような反応をしますか。

- 1、びつくりする。
- 2、いたずらする。
- 3、叫ぶ。
- 4、あくまで紳士的対応をする。
- 5、たたき起す。暴力反対？何それ？美味しいの？

1はもうしている、2は人としてダメだと思う、3は幸せそうに寝ているこいつびつくりさせるのはちょっとあれだ、4を飛ばして5も人としてダメだと思う、つまり俺がすべき対応は、

「起きろ、もう朝だぞ」

紳士的に対応、なんかこう・・・やさしく起こす？みたいな感じだ

と思う。

『うう〜ん……。あれ？神楽さん？』

「ああ、おはよう」

『おはようございます……。』

なんかすごく眠たそうだ、だが次第に意識が覚醒してきたようだ。

『な、なんで一緒に寝ているんですかー！？』

「ぐぼあー！？」

ドリアードのパンチが俺の鳩尾を貫いた。つーか女の子がグーで殴るってどうよ？

『いくら女の子でもこれはグーですよ！？』

人の心を読むな、ついでに言うと俺はベットから吹き飛ばされて床でうずくまっている。ガタイのいいチンピラ共より強かったぞ今の……。

『それに！なんで一緒に寝ているんですか！？昨日決めたばかりなのに！こんな素敵いべんと、前の人がやっていたげーむでも中々ありませんよ！』

ドリアードが顔を真っ赤にして叫んでいる。相当パニくってるな。

それとA、あれ？Bだっけ？どうでもいいや。どんなゲームやってんだお前。





『うう……こんな事されたら、もうお嫁にいけません……』

ドリアードがほっぺを両手で押さえながら涙目になっている、結構萌……じゃない可愛いな。いや、これもダメか。

「人聞きの悪いこと言うな、お前の勘違いが原因だろうが」

『だって目が覚めたらいきなり目の前に、いたずらしました。みたいな笑顔で見ているから……、それでも普通はビックリしますよ……』

……俺の紳士的笑顔はいたずら小僧の笑顔と同じレベルなのか。

「ていうか、なんで俺のベットに居たんだよ」

『私、寝相悪いからですから、アハハ……』

どれだけ寝相悪いんだよ。いや、ある意味いいのか？二段目から一段目に来るんだから。

よく見てみるとドリアード髪がすごいことになっているのに気がついていた。

「確かに悪そうだな、寝ぐせ。直してこい」

水飲み場をさす。

『あ、大丈夫ですよ、見ていてください』

ドリアードがカードの絵柄と同じようなポーズをとる、するとドリアードの全身が光に包まれる。

「おお！」

光が消えるときれいに身だしなみを整えたドリアードがいた。

「へ〜、便利だな〜それ」

『さあ、神楽さんも準備してください。』

「ああ、分かった」

今日はたいして必要な物はなかった。デッキを持ち食堂に向かう、そろそろ時間のはずだ。

部屋を出て、階段を静かに下り、食堂に入ると、レッドの生徒たちが何やらたむろしていた、

「あ？何してんだ、お前ら」

「あ、神楽くん、これ見てよ」

翔が差したのは一枚の紙だった、読んでみると。

「なになに、《急用ができてトメさんは来れないにや〜、なので自分でご飯を作ってくださいにや〜。大徳寺より。》なんだこれ？」

大徳寺先生適当だな、あんたは作らんのか。

生徒A「どうするんだよメシは」

生徒B「俺達で作るしかないだろ」

生徒C「料理できる奴って居んのかよ……」

しゅん……。

「ふあゝあ、腹へった。朝メシは」

十代があくびをしながら入ってきた。

「今日トメさんこれないんだって」

「トメさんって？」

「いつも料理作ってくれるおばさんだよ」

「そうだったけ？」

「そうっすよ、アニキ覚えてないんすか？」

十代と翔が何か話している、これって原作にはないよな。

生徒B「どうするんだよメシは！」

生徒A「誰か作れよ！」

生徒D「料理できる奴居ねーのかよ！」

うるさくなってきたな、しょうがない。

「誰も作れないんだったら俺が作るぞ」

シーン……………。黙るなよ。

「……神楽くん、料理できるんスか？」

恐る恐る翔が聞いてくる。

「できるぞ、簡単な物ならな」

「そうなのか？じゃあ早く作ってくれ、もう腹ペコだく……」

「分かったよ、待ってる」

台所に向かう。

『本当にお料理出来るんですか？』

「俺をなめんなー！」

台所に立つ。さあ、デュエル（料理）の始まりだ！

生徒達「「「「「う、うまい・・・」」」」」

「ホントだ美味しいッス！」

どうだ参ったかお前ら、あっはっはっはっは。

『神楽さん、本当にお料理出来たんですね、意外です！』

「トメさんには及ばないけどな。」

ホントどうやってあんな美味しくできるんですかね？

「あ」

「どうしたんだ？」

十代がガッツキながら聞いてくる。

「自分の分忘れた」

みんなが自分の取り分を守りながら急いで喰い始めた、俺が作ったんだぞ！お前等ちょっと分ける！！

「このチェーンの処理は、こうやって処理しま「遅れましたー！！」  
！」また遅刻ナノ〜ネ、シニヨ〜ル姫宮」

はい、また遅刻しました。俺が自分の分を作って喰っている間にも  
うこんな時間になっていた。  
急いで席に着く。

「では、このチェーンの処理をお願いします〜」

「ええ〜・・・」

「こんなの幼稚園児でも「これから処理して、次にこれを処理、こ  
のカードは除外されて、効果はまだ残っているからこのモンスター  
は破壊されます」・・・」

「せ、正解ナノ〜ネ・・・」

フツ、こんなのちよろいぜ。ブルーの人が意味のわからなそうな顔  
をしている。

神「え？もしかしてあいつ分かんないの？ぶっ！こんなのサルでも  
わかるぜ」

野次を飛ばそうとした生徒に向かって聞こえる程度の声で言う。

「き、貴様あゝ・・・！」

ブルーの人が悔しそうに睨んでくる。

「ププツ、その顔笑える」

ブルーの人が顔を真っ赤にする。いい気味だ。

そのあとは普通に授業が進み早くも昼である。さてと、実羽に色々聞かないとな。早々に席を立ち、実羽の所に行く。すぐ隣まで来ると実羽は寝ているようだった。うつ伏せになっているので顔は見えないがたぶん寝てる。

「おい、起きろ」

肩に手を載せて体を揺する。

「む・・・神楽？ああ、もう授業は終わったのか・・・」

「珍しいな、お前が居眠りなんて」



「昨日は帰った後あまり寝付けなくてな」

昨日は、俺も深夜過ぎてから寝たからな。

「まあいい。話がある、一緒に来い」

「なんだ、デートのお誘いか？」

「なんでそうなる、いいから行くぞ」

実羽の手をひっぱり連れていく。周りの視線があるが気にしない、どうせ実羽のファンだろ、もう慣れた。

「ここなら大丈夫だろ」

ここは、十代のお気に入りの場所、だったような気がする場所だ。詳しく言うと第四期のOPで十代が立っていたところだ、たぶん。

「じゃあ質問するぞ、この世界に来た時どこに居たんだ？俺は気がついたらこの世界の公園に居た、お前はどうかんだ？」

「わ、私は気がついたら試験会場に居た・・・持ち物で変なものは、特になかったな」

そうか、ならなんで俺たちはこの世界に来たんだ？

「じゃあ次、試験会場に居たんだったら会いに来てくれたっていいじゃないか、それはどうしてだ？」

「そ、それは・・・」

答えるのにためらっているようだ、なぜ？

「お、お前を驚かそうと思ったからだ、私がここに居ると思っていないだろうと思ったからな！」

確かに、お前がいるとは思わなかったよ。

『もしかして、神楽さんはこの世界の人じゃないんですか？』

『・・・そう』

『はひゃ！？』

いきなり話しかけてきたドリアードが後ろから現れたやつにビックリしているようだ。つーか誰？

『ク、クランちゃん！？もう、びっくりさせないでくださいよ！』

「そつだ紹介していなかったな、この子はクラン、私のカードの精霊だ。そつちの子は神楽の精霊か？」

『はい、神楽さんの持っているエレメンタルマスター精霊術師 ドリアードの精霊です。クランちゃん、前の人はどうしたの？』

ドリアードがクランの頭を撫でながら言う、クランの背低いな。

『……よく分からない』

よく分かんないって、前の所有者だろ？なんで知らないんだよ。まあ、そこは置いていて。

「でもどうして俺たちがこの世界の人間じゃないのが分かったんだ？」

『……あなた達はこの世界の人達と違うから。……あと、実羽から聞いた』

「ああそう、つか違うって何が？」

『……よく分からない』

神楽「何だそれ？」

『……よく分からない。……でも、あなた達はこの世界の人とは違う』

何が違うんだ？雰囲気とかか？

「実羽、他に何かあるか？」

「べ、別に何も無いぞ。」

なんか隠してるなこいつ。

「なんか隠してないかお前。」

「!?!」

「すぐ慌てている、こいつホント嘘つくの下手だな。」

「な、何も隠してないぞ！本当だぞ!」

「なら目を反らすな、合わせる。」

実羽の顔を手で固定する。

「ッ!?!?!」

「白状しやがれ、なにを隠してる」

無理やり目を合わせさせる。でも顔を赤くして俯いてしまった。

「……は……ろ。」

「は?なに?」

聞こえん、何言ってるんだ?

神楽「もう一回言って「離れろー!」」「ヒデブフォツ!?!?!?」

実羽の強烈な膝蹴りが腹部に直撃する。

ま……また……腹を……。

「な、何を、するんだ……。」

「う、うるさい！ほら立て、昼食を食べに行くぞ！」

「ぐえ！え、襟をひっぱるな！立てとか言いながらひっぱるな！」

『……頑張れ実羽』

『何がですか？』

「とゆうことなのによ。そろそろ授業が

終わるにや、明日香君、号令をお願いするのによ。」

「はい。起立、ありがとうございます」

明日香に続きみんなも挨拶をする。

「そう言えば、来週試験があるので勉強もしてくるよつに。では、さようなら」

「はあ、テストか。自信ないな」

翔がため息を吐いている。

「時間はあるから勉強すればいいだろ」

「そつだぜ翔、まだ時間はあるんだ気楽にいこつぜ」

「そつだけど、筆記だけじゃなくて実技もあるから・・・」

「うだうだ言っても仕方ないだろ。ほら、帰るぞ」

試験って事は十代が万条目を倒すやつだよな、俺は誰と当たるんだろ？同じ寮の人と当たるみたいだがイレギュラーだしな俺は。実羽とはあんまりやりたくないな。

## 第九話（後書き）

次がテストです。次も良ければ見てください。

## 第十話（前書き）

テストです、変な所があったらご報告ください。



## 第十話

俺は今十代達の部屋の前に居る、何故かって？暇だからだ。ドリ  
アードは『今日は眠いのもう寝ますね・・・、お休みなさい・・・  
。』と言ってさっさと寝てしまった、しばらく寝顔を見ていたが飽  
きた。だってあいつ眉ひとつ動かさないんだもん。ホントに寝相悪  
いのか？

今は夜の八時、寝るにはまだ早い。  
という訳で、十代達の部屋に突撃！

「遊びに来たよつと」

「お願いします〜・・・!!」

何をだ？翔が壁に貼り付けられたオシリスの天空龍に向かって何か  
している。

「デュエルの神様、明日のテストの成績次第でオシリス・レッドか  
らラー・イエローに昇格することができます、どうかこの翔にお恵  
みを頼みまする〜・・・!!」

「おお神楽、どうかしたのか？」

「暇だったから遊びに来た。で、何してんだ？翔は・・・」

チラッと横目で翔を見る、もうどっかの怪しい宗教の信者みたいだ

ぞ。

「最近、勉強が終わった後は毎日この調子なんだ」

「毎日かよ……」

テスト期間ずっとこの調子なのか。

「なんで、二人とも落ち着いてられるんすか！？明日はテストなんだよ！？」

「別にいいだろ、成績が悪くて停学とか退学になる訳じゃないんだし」

「それでも！このオシリス・レッドからラー・イエローに昇格できるかもしれないんすよ！？」

「そんなに意気込まなくてもいいだろ翔、もっと気楽にこつぜ」

翔は「もういいッス……」と言って勉強を始めてしまった。その後十代とデュエルとかしていたら翔に「うるさいッスよ！アニキ！神楽くん！」と怒られて、今は自分の部屋である。

「あー、暇だ……」

今は八時半、まだ寝るには早すぎる。

暇なのでドリアドを見ているが、『すう……すう……』と一定の間隔で呼吸しているだけでさっきと違うのは壁の方を向いているくらいだ。

「チクシヨウ、こうなったら嫌がらせしてやる！」

机にあったマジックペンを持ち、ドリアードの顔を覗こうとしたら。

『・・・すう・・・はあっ!!』

「ゴオツ!!?!」

ドリアードが寝返りをして思いつきり顔面をグーで殴られた。  
俺は飛ばされて床に仰向けになって倒れている。

「そつゆう事か・・・」

確かに寝相悪いな。鼻殴られた、鼻血出るぞ・・・。

あれ？出てる？ホント出てるよ!?!ちよっ、この恨み!女子には  
悪いがグーで返してや

『ふみゆ〜・・・』

ドリアードがそんな声を発しながら落ちて・・・

「ぐふっ!!?!」

頭が腹に落ちた。

「ガッ!?!」

そのあと手が頭にグーの形で落ちてきた。

「こ、これが・・・真の・・・グー・・・なの、か・・・ガクッ・・・

「

そして俺は意識を手放した。

『これが、ぐーですよ……。かぐらしゃん、むにゃむにゃ』

なんか言っているようだが、いまいち聞こえん。

「あれ？」「は？」

「ゴルエンダア！！」

「なんでー！ー！ー！？」

ドガシャアアアアア！ー！ー！

「・・・ハッ！」

気がついた。変な夢を見た気がする。

「・・・知ってる天井だ」

当たり前だな、俺の部屋なんだから。

周りが明るいので恐らく朝なのだろう、そこで俺の上に何かが乗っている気がつく。

『・・・むにゃむにゃ、もう食べられません・・・』

幸せそうに寝やがって、昨日はお前のせいでひどい目にあっただぞ。

そして寝言がベタだ！

「おい、起きろ。そしてさっさと退け！」

ドリアードの体を揺する、すると目が覚めたみたいだ。

『みゅ〜・・・。あれ？神楽さん？』

ドリアードがゆっくりり体を起こす。

「そうだ、分かったらさっさと退け」

『お、お布団が神楽さんになっちゃいました！？』

「なんでだよ！」

俺は元から人間だ！

『ち、違うんですか、よかったです。・・・じゃあなんで私に馬乗りにされてるんですか？』

「お前が乗ってるだけだろ！」

今の状況はドリアドが俺に馬乗りになっている。

『ま、まさか！神楽さんは誰かに敷かれるのが趣味なんですか！？』

「ねえよ！そんな性癖！」

勝手に人をMにするな！

『じゃあなんで私に敷かれてるんですか！？』

「昨日お前にKOされたからだよ！つか敷かれた覚えもねえ！！」

『KOって・・・はっ！な、殴られて興奮して鼻血を出したんですか！？』

「お前は俺をMにしたいのか！？お前に顔面殴られて鼻血出したんだよ！」

ちなみに鼻血はすでに止まっていて、乾ききっている。

『ま、まさか、私がやっちゃたんですか？』

恐る恐る聞いてくる。

「そつだよ。お前に殴られて気絶して、今起きたんだよ」  
省略したがだいたいこんなもんだろう。

『……ごめんなさい』

「ど、どうした急に。」

いきなり謝られても困るぞ。

『私は神楽さんに酷いことをしました……』

「酷いことって、殴られたのは別に怒ってないぞ」

もともと俺がイタズラしようとしたのが悪いからな。

『いえ、それでも悪いことは悪いんです。だから……』

ドリアードが一息あける。そして、

『私に責任とらせてください!』

どんな展開!?

「ちょっと待て!お前何言って……」

『せ、優しく痛くしてください!』

「ど、どうして!?!」



ガチャ。

「神楽、迎えに来た『わ、私、その……。痛くても我慢します!』  
何をしているんだお前は……。」

ドスの利いた声で実羽が俺に言う。

今の状況は、俺がドリアードに馬乗りになられて、ドリアードが顔を赤くし若干涙目になっている。ちなみに俺は鼻血を出している、乾いているけど。

「ま、待て!ご、誤解だ!」

「何を誤解しろと言うんだ!……!!」

「グベラッ!?!」

実羽が素早くドリアードを俺から退かし、俺を蹴り上げた。そして俺は意識を手放した。

「う．．．あ．．．」

なんか、メチャクチャ頭がガンガンする．．．二日酔いしたサラリーマンの気持ちがよく分かりそう．．．。

「あゝ痛って．．．今何時だ？」

蹴られた所を押さえながら立ち上がり机の上の時計を見る。  
時計を見ようとして机に紙が置いてある事に気がつく。

「なんだこれ？えーと何々、《試験に遅れるので先に行くぞ。実羽より。PS・ドリアドも連れて行く》まだ疑ってんのか、誤解つて言ったのに．．．」

とりあえず学校に行く準備をする、鼻血は拭かれているようだ。

「そついや今何時？」

試験は・・・もう始まっているね。

「ヤバい！」

部屋を出て走る！

「うおおおお！！！！！」

「急げ急げ！遅刻だ～～！」

走っていると前を十代が走っていた。

「おい！十代～～！」

「ん、神楽か！お前も寝坊か！？」

走りながら聞いてくる。

「そんなとこだ！早く行こうぜ！」

「おお！」

俺達は学園に向かって走っていると、トメさんが車を押ししていた。それを通り越すと十代が止まった。

「うう・・・、こつゆづの弱いんだよな俺！」

「十代！？しょうがないな！」

トメさんの所まで戻る。

「手伝うぜオバさん！」

「右に同じ！」

車の後ろを二人で押す。

「あんた達今日は試験なんだろう？早く行った方がいいんじゃないのかい？」

「困っているオバさんを見過ごすわけにはいかないぜ！」

「気にしないでください！」

三人で車を押す、完全に遅刻だな。

トメさんの車を無事に届けたので、教室に向かう。案の定試験はすでに始まっていて教室に入ると皆に見られた、実羽の方を見ると目が合うがすぐに反らされた。誤解なのに……。そのあとは試験の問題をもらって問題を解いた。高校一年の問題だから案外簡単だった。

「そこまで。一番後ろの人は回答用紙を集めて持ってきてください。」

後ろの奴が来たので渡す、十代と翔は爆睡しているようだ。

「それでは解散なのによ、午後は実技試験があるので遅れないようにしてくださいのによ。」

生徒「oo」

解散を宣言した瞬間に生徒たちは席を立った。そう言えば新しいパツクが入荷するんだっけ？  
ほとんどの生徒はいなくなった。

「ようっ」

「……………」

そっぽを向かれた。

「なあ実羽、朝のは……」

「誤解、だったんだろ、この子から聞いた」

ドリアードのカードを返してくる。  
俺は受け取りながら、聞いてみる。

「どうしたんだよ？」

「……一つ聞いていいか？」

実羽は真剣な顔でこっちの俺の顔を見てくる、そんな表情につられ顔を引き締める。

「別にいいぞ。なんだ？」

そして実羽が躊躇いながら聞いてくる。

「その、人にはそれぞれ個性や趣味がある。だから、その……。」

何が言いたいんだ？

「だから何が言いたいんだ？」

『……がんばれ』

黒猫「うん……お前は、その……。」

クランが応援する、それに勇気付けられている様子の実羽。というかクラン居たのか？  
いったん言葉を区切り、そして……

「……お前は、マゾなのか？」

「違げーよ!!」

何言っただこいつ!マゾってMの略だろ!?

『・・・照れ隠し?』

「全然違う!!何だその出まかせ!誰から聞いた!」

実羽の肩を掴み顔を近づける。すると実羽は顔を赤くし、

「か、顔が近い!!」

ドンッ!!

「ゴフッ!?!」

ボ、ボディを・・・顔じゃないだけマシ、なのか?

「・・・ドリアードから、聞いた」

実羽が目を反らしながら答える。

クソッ・・・!!こいつが原因か・・・!

「その子なら試験が始まってすぐに寝たぞ」

コイツ昨日スゲー寝てたくせに!帰ったらお仕置きだ!!  
俺がカードになったドリアードに恨みの念を送っていると十代がや  
ってきた。

「神楽！新しいパックが出るんだってさ！買いに行こうぜ！」

「そういえば今日だっけ？別にいいぞ、お前も来るか？」

実羽に聞く。

「ああ行く、お昼も食べないといけないからな」

「早く行こうぜ！」

十代が走っていくので俺達も追いかける。

「ええ〜〜！！ほとんど売り切れ！？」

翔がバカでかい声を出しながら仰天する。

「はい、沢山勝って行った生徒がいまして今はこれしかありません」  
そう言って一つのパックを出す。

「そんな〜・・・」

「俺はいいから翔が買えよ」

「そんな悪いツス、アニキが買ってくださいッス」



「遠慮すんなって」

「でも……」

すると奥からトメさんが出てくる。どうやら俺たちの分のパックを残しておいてくれたようだ。

だが俺には必要ないので俺の分は翔に譲った。

「お前は誰とデュエルするんだ？」

今は十代と翔が新しいパックでデッキを調整している、俺と実羽はその隣で食事中だ。

「対戦相手は抽選で決まるからまだ分からないらしい」

「そうなのか？俺は誰と当たるんだろうな？」

「案外私かもしないぞ」

笑顔で言うなそんなこと、誰が喜んでガチデッキと戦う。

ああ神様、アంతタの存在なんてあんま信じてないがどうか、こいつとだけはヤメてください。

「ゲイル、シユラ、ブラストでダイレクトアタック!!」

ブルー女子「きゃああー！！！！！！！！！！」

LP2300 0

ヒデーな・・・この勝ち方。ちなみに実羽の相手はちょっとお嬢様っぽい人だった。

「楽しいデュエルでした。また機会があればデュエルしてくれませんか？」

そう言いながら尻もちを着いている女子に手を差し伸べる。

お嬢様っぽいブルー女子「ま、まあ、あなたがどうしても言うなら相手をしてあげてもよろしくてよー!!」

また、ファンクラブの会員が増えたか……。

「お疲れさん」

買っておいたコーヒーを渡す。

「ああ、ありがとう」

『……圧勝だった』

「クランも応援してくれたのか？ありがとう」

『……えっへん』

「む、ブラック……」

「？お前飲めないっけ？」

「飲めるが今はこれじゃなくて甘い方が良かったな。」

「買い直すか？」

「いや、別にいい。ありがとう」

「気にすんな」

しばらく経つと会場にアナウンスの音が響く。

アナウンス《姫宮神楽さん、遊城十代君、デュエルリングに来てください。》

なぜ十代が君で俺がさん？ケンカ売ってる？アナウンスの女の人。

「……そんなに怒るなよ、神楽……君」

「無理矢理つけるな!!」

『……神楽ちゃん?』

「つけばいいってもんじゃねえ!」

『……ご主人様?』

「それはやめろっていったろ!もういい!!行ってくる!!」

速足でリングに向かう。

リングに着くともう相手は居た、つーかブルーじゃん同じ寮同士なんじゃないのかよ。

「遅いぞ！レッドのドロップアウト分際で！！」

「先生ー、この試験って同じ寮の人とじゃないんですか？」

「無視するな！ドロップアウト！」

「あなたの実力デ〜ハ、同じ寮にあなたの相手が出る生徒は居マセ〜ン、そこで特別にブルーの生徒と戦わせてあげル〜ノデス！」

「え〜、なんでまた面倒な事を・・・。」

「ふん！怖気ずいたか！！」

「これから負ける奴が何言ってるんだか」

「な！？何だと！！お前のような女みたいな変な名前をした奴に誰が負けるか！！」

それを聞いた瞬間、俺の中の感情がいつきに冷めるのが分かった気がした。

「・・・お前、今なんて言った？」

「お前みたいな奴に負けるか！！って言ったんだよ！！」

「違う、少し前」

「女みたい変な名前した奴！」

馬鹿にしたような口調で言う男。

別に俺自身を馬鹿にするなら好きなだけしやがれ、でもな……。

「お前にみたいな「黙れ……！」「っ!？」」

男が一步後ずさる。

「こいよ、ぶちのめしてやるよ」

「レ、レッドの分際で……！」

「」「デュエル……！」

「先行は譲ってやる」

「こいつ、舐めやがって……！俺の先行！ドロー！俺はジェネティック・ワーウルフを攻撃表示で召喚！ターンエンド！」

LP4000

モンスター/ジェネティック・ワーウルフ

魔法・罨／0枚  
手札／五枚

「俺のターン、ドロ。天使の施しを発動、三枚ドロし二枚捨てる」

「ハッ！いきなり手札を交換かよ、そんなに手札が悪かったのかよ！所詮レッドなんて俺にかかれば瞬殺なんだよ！！」

「安心しろ、お前に次のターンは来ない」

「な！？何だと！？」

「相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、はバイス・ドラゴン手札から攻守を半減させて特殊召喚する事ができる」

フィールドに出たカードからバイス・ドラゴンが出てくる、がすぐに小さくなってしまふ。

ATK2000 1000

「そんなモンスターじゃ俺のモンスターは倒せないぜ！」

「少し黙ってる」

「うっ・・・！」

黙る男、これで進めやすくなった。

「さらにチューナーモンスター、ダーク・リゾネーターを召喚、レベル5バイス・ドラゴンにレベル3ダーク・リゾネーターをチューニング」

ダーク・リゾネーターが三つの輪になりバイス・ドラゴンを囲む。

レッド・デーモンズ・ドラゴン

シンクロ・効果モンスター

星8 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃した場合、

ダメージ計算後相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する。

このカードが自分のエンドフェイズ時に表側表示で存在する場合、

このターン攻撃宣言をしていない自分フィールド上の

このカード以外のモンスターを全て破壊する。

ダーク・リゾネーター

チューナー（効果モンスター）

星3 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1300 / 守 300

このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

バイス・ドラゴン

効果モンスター

星5 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2000 / 守2400



相手フィールド上にモンスターが存在し、  
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、  
このカードは手札から特殊召喚する事ができる。  
この効果で特殊召喚したこのカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる。

『ゴオオオオオオ!!!』

レッド・デーモンズ・ドラゴンが雄たけびを上げながら現れる。

ATK3000

「攻撃力3000だと!?!」

「さらに二重召喚発動、俺はもう一度通常召喚が可能になる、デブリ・ドラゴンを召喚」

デブリ・ドラゴン

チューナー（効果モンスター）

星4/風属性/ドラゴン族/攻1000/守2000

このカードが召喚に成功した時、

自分の墓地に存在する攻撃力500以下のモンスター1体を

攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

このカードをシンクロ素材とする場合、

ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

また、他のシンクロ素材モンスターはレベル4以外のモンスターでなければならない。

「デブリ・ドラゴンの効果で墓地のヴィークラーを特殊召喚、さらに墓地のボルト・ヘッジホッグ自身の効果で特殊召喚」

デブリ・ドラゴンが出てきてその隣にヴィークラーとボルト・ヘッジホッグが出てくる。

「そしてレベル2ヴィークラーとボルト・ヘッジホッグレベル4デブリ・ドラゴンをチューニング」

デブリ・ドラゴンが四つの輪になりその中をヴィークラーとボルト・ヘッジホッグレベルが通る。

ブラックフェザー・ドラゴン

シンクロ・効果モンスター

星8 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2800 / 守1600

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

自分がカードの効果によってダメージを受ける場合、

代わりにこのカードに黒羽カウンターを1つ置く。

このカードの攻撃力は、このカードに乗っている

黒羽カウンターの数×700ポイントダウンする。

1ターンに1度、このカードに乗っている黒羽カウンターを全て取り除く事で、

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力を

黒羽カウンターの数×700ポイントダウンし、

ダウンした数値分のダメージを相手ライフに与える。

『コオアアアアア!!!』

ATK2800

「もう一体のドラゴン・・・!」

「手札のシンクロ・マグネーターの効果発動、自分がシンクロモンスターにシンクロ召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。」

さらに死者蘇生で墓地のバイス・ドラゴンを特殊召喚」

シンクロ・マグネーター

チューナー（効果モンスター）

星3/地属性/機械族/攻1000/守 600

このカードは通常召喚できない。

自分のシンクロモンスターのシンクロ召喚に成功した時、

このカードを手札から特殊召喚する事ができる。

「レベル5のバイス・ドラゴンに、レベル3のシンクロ・マグネーターをチューニング」

シンクロ・マグネーターが輪になりバイス・ドラゴンがその中を通る。

スターダスト・ドラゴン

シンクロ・効果モンスター

星8 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻2500 / 守2000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ

魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、

このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。

この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、

この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、

自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

『オオオオオオオオ!!』

「さ、三体目のドラゴンだと!?!」

会場の奴らが騒ぎ出す。

「うお! カッコイイ!!」

「よそ見をするな! ドロップアウト!!」

十代がなんか言っているがそこまで気が回らない。

「レッド・デーモンス・ドラゴンでジェネティック・ワーウルフに  
攻撃!!」

レッド・デーモンズ・ドラゴンが炎を纏った手でジエネティック・  
ワーウルフを吹き飛ばす。

「うああああ!!」

LP4000 3000

「スターダスト・ドラゴンとブラックフェザー・ドラゴンでダイレ  
クトアタック!!」

「うああああ!!」

LP3000 0

「俺の勝ちだ。さっさと消えろ」

自然と怒鳴り声のような声が出る。男は悲鳴を上げてリングを飛び  
出す

俺も実羽達の所に戻る。

「・・・そんなに怒るな、怖いぞ」

「うっせえ、あれだけは許せないんだよ」

「それ、何度も思っているがどうにかならないのか？」

「アイツを殴らなかっただけ我慢した方だ」

「・・・」

そのあとは十代が万条目に勝ち、そのまま試験は終わり俺はさっさと寮に戻った。

## 第十話（後書き）

次は神楽の過去の話をちょっとします、よければ次も見てください。

## 第十一話（前書き）

シリアスです、短いです。誤字脱字があったらご報告お願いします。



## 第十一話

俺は試験が終わるとすぐに部屋に戻りさっさとベッドに向かう。今日はもう寝たい。

ベッドに横になり、毛布を頭から被った所でドリアドが話しかけてきた。

『あの、聞いていいですか？』

「……………何をだ？」

ベッドにうつ伏せになりながら聞き返す。

『なんで、そんなに怒っているんですか？』

「…………別に、もう怒ってない」

『嘘です。神楽さん、怒ってます』

バレバレみたいだな、隠してもしようがないか。

「…………俺は名前を馬鹿にされるのが大っ嫌いだ」

『…………理由、聞いていいですか？』

「…………これから言うのは独り言で、ある男の話だ。聞きたきゃ勝手に聞け」

このフリ、ベタだな。でも、話した方が楽になるかもしれないな・・・。

「・・・その男は家族に恵まれていた。父はいつも心強くて、母はいつも優しく、妹はいつも笑っていて、そして男もいつも笑っていた」

幸せだった。

「もう、これでもかかってくらい男の家族は幸せで、男の生活も充実してた。その時の男は、この幸せが永遠にあるものだと思っていた」

・・・本当に幸せだった。

「男の妹は三年生になり男は五年生になった。ある日事件が起きたんだ」

あの事件から俺の幸せは崩れ始めた。

「男の妹が小学校同級生の奴らに苛められていた・・・。理由は、ただムカツクから」

『・・・』

ドリアードは黙って聞いている。

「妹は優しく、底なしのおひとよしで人を信じて疑わない、だから同級生からの苛めも暴力も全部、友達とのじゃれ合いなんだと思っていたそうだ」

苛めはひどかった、何も知らない子供だから。どの程度で、どの位傷つくのかを知らないから。

「男はそれを知った、それから男は妹のそばには出来る限りいた。それでも苛めは続いた、男の知らない所で・・・」

どれだけそばに居ても、アイツの傷が完全になくなる事はなかった。いつも、傷が治っても、また新しい傷を作って、俺に笑顔で話してくる、「今日は友達と遊んで、ちよっと、怪我しちゃた」なんて言ってくる。

「先生にも頼った。でも、苛めは無くならない」

無邪気な子供は、言う事を聞かない。

「そして、妹がそいつ等のいじめで死んだ・・・」

『!?!?』

ドリアードが目を見開く。

「ある時に、屋上で苛められてたらしいんだ、壊れたかけたフェンスに突き飛ばされて、そのまま屋上から落ちた・・・」

即死だった。

誰が見ても分かるくらい、酷かった。

「男は悔やんだ、妹を守れなくて・・・」

泣いた、泣きまくった。

「そして、妹の葬儀の日、苛めてた子達は来なかった」

謝って欲しかった、一言でいい葬儀に来て、謝って欲しかった。

「そして、葬儀の日からしばらく経って、男の父親も死んだ」

『!?!?・・・どうして・・・』

「・・・殺したのは、妹を苛めていた子供の母親だった・・・理由  
は自分の子供が人殺しされた、っていう、訳の分からない理由で  
!?!」

言いがかりも甚だしい。

「襲われたのは男だったけど、父親が男を庇って死んだ・・・」

俺は守るどころか、守られていた。

「それから男は荒れた。六年生になって、妹を苛めた子達を事故に  
見せかけ半殺しにした」

あれは大変だった。何人もの人を使って呼び出して、呼び出した場  
所の近くにあった壊れかかった建物を壊したり、わざと危険な場所  
に呼び出したり。すごい時は一人を呼び出すために学校の大半の人  
を使ったりした。そのおかげで、警察には捕まらなかった。

『半殺し・・・』

「そんな事だから、自然と男の周りから人は居なくなっていくた、

中学の後半には男の周りから人はほとんど居なくなつた」

毎日、気に食わない奴と思つたらそいつを殴つていた。

「でも、男の周りから離れない人がいた。母親だつた」

いくら俺が荒れても、母さんだけは俺の近くに居た。

「母親のおかげで何とか中学を卒業出来た、高校は地元から離れた所なつた。これも母親の考慮だつた」

俺もそれに答えようと努力した。

「男はその高校で普通に戻ろうとした。でも、それは出来なかつた」

『……どうしてですか？』

「その高校の近くに、中学時代の男を知っている奴がいた。そいつは男が仕返しした奴だつた。そいつが男にケンカを振ってきた、味方を付けて」

あの日は、暴れた。今までにない位、結果は俺がそいつ等を全員倒した。

「男はそいつ等を倒した。そこにある女の人が見れた」

それが実羽と初めて会つた日だつた。

## 第十一話（後書き）

続きます。良ければ次も見てください。

## 第十二話（前書き）

シリアス・・・むずい。

変なところがあったら、ご報告してください。

## 第十二話

ザアアア・・・。

雨が降って来た・・・。いや、元々降っていたのかも知れない。

・・・気がつかなかった。

今、俺は昔に戻っている。戻りたくなかった、母さんに心配をかけたくないから、守りたいから。

でも、俺は戻った。なんで？

目の前で尻もちをついている奴を見る。

ああ、そうだ。こいつが来たからだ。

少し前に、こいつが来たから・・・。



「はぁ・・・眠い・・・」

授業めんどくさい・・・。

高校からは、自分を変えようと出来るだけマジメ君になってみたが・・・  
・・・疲れる。

中学は必要最低限の勉強しかしてないからな・・・。高校で頑張ろう、と思ったが。最近授業の時間、寝てしまう。二週間でこれって  
どうよ。

ドンツ。

「つと。すまん。」

高校生活を振り返っていると、前から歩いてきた人とぶつかってしまっ  
まった。

「いつてー！ー！！腕折れたー！ー！！！！」

「何してくれんじゃ、テメー！！！！」

「慰謝料払えやゴリアー！！」

・・・今時、こんな不良居るんだね、お兄さんビックリだよ・・・。

「腕折れちまったよ!!どうしてくれんだよ!!」

俺の胸倉掴んでくる。その腕は折れたんじゃないのか？

「シカトしてんじゃねえぞ!!」

「いや、ぶつかったのは謝ったじゃないですか・・・」

出来るだけ、優しい口調で言う。

「そんなんじゃ足んねえよ!!金払えや!!」

この・・・、ウゼエ、殴りてえ。っと、殴ったら駄目だ、普通にしなきゃ。

「ちょっとこっち来いや!!」

「ちょ!なんでだよ!?!」

「うるせえんだよ!!」

ガンツ!!

「ッ!!」

いった!?!この・・・!!

そのまま裏の路地に連れて行かれる俺、はぁ・・・。なんでこうなったんだろうね?奥に行くと、数十人のガラの悪い奴らがいた。ヤナ予感がする・・・。

奥に連れて行かれると、ボスみたいな奴が来て、持っていた写真と俺の顔を見比べる。なんだよ？

「おい！こいつでいいんだな？」

ボスが後ろを向いて叫ぶ。すると、奥から眼鏡をかけてちょっと小太りな奴が出てくる。

「ああ、こいつで間違いない」

口を歪めて笑う。スッゲー気持ち悪い。

「覚えてるか？この僕を」

「誰だっけ？あ、もしかして斎藤君？久しぶり、こんなに変わっちゃて、あの時は眼鏡かけてなかったのに。なにそれ？イメチェン？」

俺の完璧でビューティフォーな回答に眼鏡は怒った様だ。

「僕は斎藤じゃない！！鈴木だ！！」

「惜しいな。一応サ行で合ってるぜ」

「またもや俺の完璧な回答に怒った様だ。」

「黙れ！お前が僕にどんな事をしたか！！忘れてとは言わせないぞ！！！」

眼鏡は俺に指を刺す。

俺こいつになんかしたっけ？

「小学生の時、俺を嵌めただろ！！忘れてとは言わせんぞ！？」

「ああ？」

小学生の時、嵌めた奴。

あいつらの中の一人、か……。

「で、その嵌められたお前が何の用だ？仕返しにでも来たのか？」

低く、脅すように言う。

「ああそうだ！！お前を僕にした以上の仕返しをするために、ここに連れてきた！！！」

「お前は、俺の兄妹を苛めた奴だよな？」

「兄妹？ああ、あのナマイキな小娘か？」

この野郎……、自然と拳を強く握りしめる。

「一つ、聞かせろ。なんで亜里抄あしり抄を苛めた？」

小学校の時は詳しいことを聞いていないからな。真実を知りたい。なんで亜里抄は虐められてたのか？

「苛めた理由？簡単だ、気に入わなからだよ。」

「気に入わない、だと？」

本当に、それだけの理由で！！

「馬鹿な小娘だ、僕がそばに置いてやると言ったのに断りやがって！当然の報いだ。」

「当然の報いだと！？」

眼鏡に怒鳴る。

「そ、そうだ、当然の報いだ！！この僕に逆らうから！！」

「ふざけるな！！！！」

俺の声が響き渡る。

「それだけで亜里抄を苛めて！追いこんで！傷つけて！それで逆らうから、殺したってゆうのか！！お前は！？」

眼鏡に飛びかかるが、周りの不良共が邪魔をする。掴みかかってきた奴らを退かしながら眼鏡に怒鳴り続ける。

「そんなのただの逆恨みじゃねえか！！全部、自分の思うように進

むと思っんじやねえ!!この愚図野郎!!」

「う、うるさい!何をしているお前ら!!さっさとヤレ!!」

眼鏡の合図で不良共が近づいてくる。

「邪魔なんだよ!お前ら!!」

俺を押さえていた奴らを振りほどく。それを合図に他の奴らは俺に殴りかかってくる。

「失せやがれ!!」

近づいてくる奴らから順に殴っていく。

「おとなしく殴られガツ!」

後ろから近づくと奴は振り向きざまに蹴り飛ばす。

「ゴォ!」

前から来る奴は顔を思いつきり殴り飛ばす。

「大人しくしやがれ!!」

後ろから羽交い絞めにされる。

そして前から来た奴に頭を殴られる。

「っ!?!ってーな!!」

羽交い絞めをしている奴の頭を無理矢理掴み、背負い投げのようにして前に居た奴にぶつける。

眼鏡が呼んだ不良の人数はかなり多く、眼鏡はそいつらのずっと後ろに居て気持ち悪い顔をしている。

俺は目の前にいる奴らを殴り飛ばしながら眼鏡にも聞こえるように大声で言う。

「少し待ってる！！クソ眼鏡！！テメーは絶対に、殺してやる！！」

ザアアア……。

この眼鏡のせいで俺は昔に戻った。あれから何分経った？何十分かもしれない。ケンカをしている最中に裏路地から表通りに移っている、その後も殴り合いをしていたからかなり野次が集まっている。

「よお……眼鏡、待たせたな……」

「ば、化け物……！」

化け物か……。

自分の姿を見てみる、両手は血で真っ赤になっていて、見えないが頭を鉄パイプで殴られたから血が出る。

確かに、化け物かな……。

そう思いながら尻もちをつきながらも逃げようとする眼鏡の襟を右手で掴み持ち上げる。

「ヒイツ!?!」

「なんか言うことがあんだろ」

襟を掴む手の力を強める、そのせいで眼鏡の脚は地面数センチ浮いている。

「た、助いで、ぐれえ……!」

眼鏡が苦しそうに言う。

この時に眼鏡が「助けて」ではなく「許して」なら、自分の対応は変わっていたのだろうか。

「この……!クズ野郎が……!」

「ぐえ!?!」

ドチャ!!

空いていた左手で眼鏡を思いっきり殴る。水溜りに倒れた眼鏡を駆けより、馬乗りになり襟を持ち上げる。

「人の家族を殺しておいて助けてだど!?!ふざけるな!!助けて欲



しかつたらなんで亜里抄の葬儀に来なかつた！！？なんで謝りに来なかつた！？謝りもしない奴が自分勝手なこと言つな！！！！！！」

左手で襟を掴み、右手で何度も何度も眼鏡を殴る。

「お前が亜里抄を苛めなきや亜里抄は死ななかつたんだ！！父さんだつてお前の親が逆恨みなんてしなきや死ななかつたんだ！！！！人の家族を、滅茶苦茶しやがつて！！！！」

眼鏡を殴ろうと右手を振り上げる。しかし

ガシッ！！

殴ろうとし、振り上げた腕を誰かに掴まれた。

後ろを向くと、一人の女の学生が俺の腕を掴んでいた。

「離せ！！」

「もうやめろ！！」

そう言つて俺の肩を掴み、眼鏡から俺を引き離す。

「何しやがる！？離せ！！！！」

また眼鏡に襲いかかろうとする俺を、その女は引き留める。

「そんな事したつて意味ないだろ！！！！」

「うるせえ！！！！」

遠くからパトカーのサイレンの音が聞こえてくる。

「殺す！！アイツは殺す！！！！」

「やめろ！！そんなことしても、そんな事をしてお前の家族は喜ぶのか！？」

「ッ！？」

女の言葉に体が固まる。

「お前の事情は大体分かった。でも、そんな事をして亜里抄という人とお前の父親は喜ぶのか？」

喜ばない。絶対に。

「もうやめろ、こんな事」

意識が薄れていく、血を流し過ぎたか？  
警官が野次の間から出てくる。

「でも、悔しいん、だよ・・・」

そう言って俺は意識を手放した。

「……」

なんか、夢を見ていた気がする。昔の夢を。

『あ、起きちゃいました?』

ドリアードの顔がすぐ目の前にある。

「……俺、いつから寝てた?」

『男の人が、女の人に会う所を話している途中です』

そう言えば、話をしている最中だったな……。

「……続き、聞くか?」

枕に顔を埋めながら言う。

すると、ドリアードはくすくすと静かに笑いだす。

『独り言じゃないんですか?』

微笑みながら言う。からかってんのか?

「・・・寝る」

壁の方を向く。

『質問していいですか?』

「・・・何だ、眠いから早く言え」

意識が混濁してくる。

『その男の人は・・・、』

一旦、間を開ける。そして、

『・・・今、幸せですか?』

「・・・」

どうしているのだろうか、俺は?

「・・・その男は、」

俺は、

「今、」

今、

「・・・少なくとも、不幸じゃない」

『・・・そうですか、ならいいです。』

その言葉にドリアードは満足そうにならずいた。

そうかい、なら俺も寝るとするよ。

## 第十三話（前書き）

更新、遅くなってすいません。

誤字・脱字等があったらご報告ください。

## 第十三話

おはようございます。皆さん如何お過ごしでしょうか？え？俺は  
どう過ごしているかって？いつもどおりですよ、目の前に居る奴を  
除いて。

「……ふみゆ……」

何が「ふみゆ……」だ、ちょっと可愛かったじゃないか……  
。もちろんそんな事にはならないがな。

こいつの寝顔なんて何回も見てる。だからなん通りもの対処法があ  
る、いくつかあげてみよう。

- 1、そのまま起きる。
- 2、起こす。
- 3、そっとする。
- 4、イタズラする。
- 5、作戦プランB

1は後が危険だ。ほっておいて学校に行ったら学校で「なんで起こ  
さない！」なんて理不尽な逆切れされた事があるから。

2は殴られる、なぜ？

3は1と同じ。

4は前に額に「実羽LOVE」と書いたらすごく怒られた、冗談なのになさ……。

あれ？よく考えると俺、実羽と一緒に寝てるの結構多くないか？少なくとも16歳で身内以外の異性と寝たことは少ないはず……。おお、なんだろうこの優越感。

まあいい、5番にしよう。

俺は5番を実行するため、そつと体を起こし起こさないように実羽を抱き上げる、いわゆるお姫様抱っこだ。そのままベットを降り兵隊さんよろしくなように脚をそろえて立つ。

「おつはー」

何時の時代の言葉か分かんない言葉を言いながら実羽を抱えていた両手を話す。すると、実羽の体は地球の重力に従い当然、落ちる。

ゴトン！！！

「~~~~~!?!?」

バタバタバタッ！！！

「つう……。。何をする！！！」

どつやら思いつきり腰から落ちたらしく二、三度転げ回った後、腰を押さえながら俺を睨んでくる。

「お前が何してんだ、人のベットで」



プランB、はつきり言えば「たたき起す」である。

「で？なんでお前が居る。お前の寮はここじゃなえ、ましてやベックトでもねえぞ」

「それは・・・」

床に伏せているような格好から正座に座り直す。その表情はどう言いかねないのか考えてる顔だった。

ガチャ。

「神楽くんづるさいっスよー・・・何時だと思って・・・」

翔が固まる。そして、俺と目が合う。そして視線を下に向け正座している実羽を見る。ちなみに俺と実羽はパジャマだ。

「お邪魔したっス〜〜〜！！！！」

「ちょ、ちが「リア充！！」「違ええ！！」」

どうやら翔に変な誤解を招いてしまったようだ。

しょうがない、後で誤解を解こう。今行っても面倒くさい事になりそうだし。先にこっちの事情を聞くとしよう。

「はぁ・・・。で、何しに来たのお前？」

「えっと、それは・・・」

「それは？」

「・・・昨日、試験が終わったらすぐに帰ったから、その・・・心配、で・・・」

座り方を正座から女の子座りに変えm両方の人差し指をくっ付けてこっちをチラチラ窺いながら言ってくる。

「・・・・・・・・」

・・・な、なにそんなしおらしくなってんだよ・・・。

「どうかしたのか？」

「いや、何でもない！まあ、心配してくれてありがとつな、実羽」

「もう、大丈夫なのか？」

立ち上がりながら聞いてくる。

「昔じゃないんだ、我慢位できるし、もう怒ってない」

「そうか、なら良かった」

笑顔でそう言う。

その笑顔を見て、俺の顔も和らぐ。

「つーか、なんでベットのの中に居たんだよ？」

「へっ！？そ、それはだな！えっと、何というか、その・・・お

前も人のぬくもりが欲しいだろうと思って……」

「は？なに？聞こえん」

「だ、だからな！その……」

赤くなつて俯く、なんだよ？

『……ハアアアアア！てえりやあああ！……！』

「オゴオツ！？」

ドタンツ！……！

「グハア！？」

『みゆ！？』

ドリアードが上のベットから掛け声と共に落ちてきて、丁度良く俺の頭にグーパンが直撃し、その衝撃で床に倒れ、これまた丁度良く殴られた所を床に打ってしまう。

「痛つてえ……！なんで、また……、つか、今てりやつつたる……！？狙つただろ……！」

『ひつぐ、痛いです……うつ、狙つてないです……』

ベットから落ち、俺を殴つてそのまま顔を床にぶつけたらしく半べそ状態だ。俺は頭が痛い。

「大丈夫か、二人とも？」

『痛いです……』

目をうるうるさせている。  
子供かつ。

「痛いの痛いの飛んでけー」

お婆ちゃんかつ。

ドリアードを起こし、顔を撫でる。俺には？抱きついてんじゃねえよドリアード、ホント子供かお前。

「そついえば神楽、お前《ブラックフェザー・ドラゴン》持ってたよな？」

「まあ、持つてるけど……なぜ？お前も持つてるだろ」

机に置いてあるデッキケースからブラックフェザー・ドラゴンを取り出す。

このカードが入ったパックが出た時買いまくって余ってたてくらいだからなたからな。

抱きついていたドリアードを離し、立ち上がり俺の隣まで来る。

「それが何処にも無いんだ」

「無い？どうゆつ事だ？」

「分からない。試験の前は有ったと思うんだが、気がついたら無くなっていたんだ」

何だそれ？

どうゆう事だ？試験の前は有ったのにその後無くなった？なんで？

「つか、何か？お前もしかしてこれ欲しくて来たのか？」

「いや、ここに来た目的は、お前が心配だったからであり……。や、でも、ちよつと期待したりしなかったり……」

「つまり欲しかったのか？」

「……多少」

「ていうか、ぶっちゃけ言っても良い効果では無いだろ、コイツ」

そう言いながら実羽にカードを差し出してやる。

「いいのか？」

そんなこと聞いてくるなら差し出した瞬間にカードを掴むな。

「別にいい。試験の時は使ったが、あんな状況にはほとんど何ないだろ」

揃いすぎだったからなあれは。

「ありがとう神楽」

「別にいい。さて、そろそろ朝飯の時間だ、さっさと帰れ」

「私の分もあるのだろうか？」

「ここで喰う気かよ？」

ブルーの方が無駄に豪華な朝食が出てくるだろうに。

「女子寮の料理は豪華すぎるからな、普通の朝食が食べたいんだ」

「ここは少し質素過ぎる気もするけどな。」

「あつそ。じゃあ行くか」

俺たちはいつの間にか二度寝をしていたドリアードを残し、食堂に向かう。

「トメさん、作ってるとこ見ていいっすか？」

「別にいいよ、まあ人に見せるほどのもんじゃないんだけどねえ」  
トメさんに了承を得て厨房に入る。なぜそんな事をしているのかと  
言うと、トメさんがどう料理を作っているのか気になったからだ。  
ちなみに翔についてはもう誤解を解いてある。

「神楽つてホントに料理するんだな」

「この前に作ったご飯は美味しかったっす！」

「神楽の料理はそこらの主婦よりうまいぞ」

「たしかにあれば美味しかったっす！」

「そんなんだな、トメさん以外であんな旨い飯を喰ったのはお袋の  
飯以来なんだな」

実羽が食堂に入った時はみんなびっくりしていたが、今は普通に十  
代達の中に溶け込んでいる。

「もう少し煮込んだ方がいい味が出るよ」

「へーそんなんですか、為になりますよ」

その後も、トメさんの料理をずっと見ていた。

「つまり錬金術とは「すいません!!遅れました!!」またですか、神楽くん」

「すいません。料理に夢中でした、トメさんもやっているうちに火が付いたらしくこうして俺は遅刻しているのだ。  
まあ、正直に言えるわけもなく。」

「すいません、以後気をつけます」

「そうしてくださいにゃ〜。では、授業にもどりますのにゃ〜」

俺は席に着く、すると十代達が小声で話しかけてきた。

「なあ神楽!さっき大徳寺先生が廃寮の話をしてたんだけど、今夜行ってみないか?」

「廃寮?ああ、昔の特待生の寮だった所か・・・」

「そうッス、なんでも闇のゲームについて研究していたらしいッス」

「怖いけど、行ってみたい気もするんだなあ」

なんか原作とは違う気がするな、翔と隼人ってこんなノリ気だったけ



？原作では怖い話で大徳寺から聞いたんじゃないかなかったっけ？

「まあ面白そうだな、俺も行く」

「神楽くん」

突然、大徳寺に指名され慌てて起立する。

「は、はい！」

いきなり呼ばれたらびっくりしたじゃん、先生。  
その先生はいつになく真剣な表情だった。

「な、なんですか？」

「ファラオを捕まえてくれますかじゃ？」

「ファラオ？」

「にゃ〜お」

そう呟いた瞬間、足元からネコの鳴き声がする。

「……いつの間に」

下を見ると、ファラオが俺の脚にすり寄っていた。

## 第十四話（前書き）

変な所があったらご報告、お願いします。

## 第十四話

今、俺は帰宅している途中だ。授業も終わり、十代達はデュエルをしに行った、俺も行くとしたが部屋にドリアードのカードを置いてきたのを思い出し、今まではほったらかしにしていたので退屈なんじゃないかと思いつき寄り道をせず帰宅している。実羽はファンと話をしていた、というか一方的に話しかけられていた気がしなくもないが、まあファンクラブの人たちに囲まれていたので適当に挨拶して来た。

「ただいま」

『あ、お帰りなさい』

『・・・おかえり』

「クラン？居たのかよ」

心配する必要なかったじゃん。  
つか、なんでコイツ居んの？

「なんでここに居んの？精霊ってカードのそばからあまり離れられないんじゃないのか？」

『・・・』

クランがベットの近くの床を指さす。そこを見ると床に落ちているクランのカードを見つける。

『・・・落して行った』

「・・・そうか」

クランが指さす方を見てみると、床にカードが落ちていた。というか、よく一枚だけ落したな。

「なんで落したまま、拾えばいいだろ」

カードを拾いながら言う、その問いにクランが答える。

『・・・精霊は霊のようなもの。この世界では基本、物体に触れる事はできない』

「そうなの？つかこの世界って事は、やっぱり精霊の世界とかあるんだ」

『いい所ですよー、学校なんてないから遊び放題ですっ』

「そうやってお前は墮落していったのか」

『落ちてないですよー！』

「そっち側に居る奴はみんなそう言うんだよ、じゃあなんで俺はコイツに触れるんだ？」

ドリアードの頭に手を乗せながらクランに言う。  
ちなみに頭のかぶり物は着脱可能らしい。

『・・・精霊のカードの所有者には触れる事が出来る。でも、それは例外。・・・精霊は、この世界では物に触れる事が出来ないのが普通。・・・そして、この世界の住人も、普通は精霊に触れる事はできず、認識も出来ない。精霊の存在を認識できるのは、いわば霊能力者の様なもの。精霊自体が、幽霊のようなものだから』

予想以上に長いセリフにちょっと驚いた。要するに精霊は幽霊って所か。

その後は俺も含めてトランプとかをした、自分のカードには触れないのになんでトランプは触れるんだ？

『・・・元の世界から持ってきたものだから』

そう言ってババの隣にあるスペードのAを取る。

「そうなのか、・・・なんでババ取らないのお前ら？」

『・・・はい』

『ん〜・・・これっ、あ！揃いました！』

「くっ・・・！」

『・・・これ。・・・揃った』

いつの間にかカードを引いていた。

「マジかよ・・・」

「五の革命！」

『・・・七の革命返し』

『二の革命です』

「なんで持ってんだよ!？」

「ドローフォー!」

『・・・ドローフォー』

『あっドローフォーです』

「なんでだよ!」

「・・・ありえねえよ・・・絶対にチートだよ・・・」

全戦全敗だよ。強すぎる・・・お前ら・・・。

そんな意気消沈している時に、ノックの音もなく突然玄関のドアが開かれる。

「ああ、やっぱりここだったのかクラン」

『・・・お帰り』

『おかえりなさいです、実羽さん』

「ただいま」

「なに自分の家のように入ってきてんだよ、ここはお前の家か？」

「どうしたんだ神楽？なんというか、覇気がないぞ？」

「・・・色々、あつてな」

「そうなのか？」

結構きついよ、ボードゲームで勝てないって。

「・・・結構遅かったよな、何してたんだ？」

ここは気分を変えようと、話題を変えてみる。

「ああ、教室でみんなと話をしていた」

「そついやそつだったな・・・」

モテやがってこいつ。



「その後、その後男子生徒に呼び出されて、告白されたいた。まあ断ったが」

「またか？気の毒にな、その男子」

はあ・・・、俺のまだ見ぬ未来の奥さんはいつ会いに来てくれるんだろうね・・・。  
もういい、そろそろ夕食の時間だ。食って忘れよう・・・。

実羽は約束が在るとかでクランを連れて女子寮に戻って行った。その後は食堂に向かい、中で十代達と合流した。

「十代、廃寮にはいつ行くんだ？」

「んぐ？ほふのひゅうひじは」

「十二時か、結構遅いな」

「今ので解ったんすか!？」

「すごいんだな」

『廃寮つて、どんな所なんですか?』

「(お化け屋敷みたいなところだ)」

『怖そうです・・・』

クランに聞いた話だと、頭の中でドリアドに伝えたい事を思うと通じるらしい。人前とかで声出すと変な人みたいだからこれは便利だ。

「ご馳走様でした、夜に備えてもう寝る。もし俺が起きなかったら、起こしてくれ」

「分かったぜ!」

「了解ッス」

部屋に戻るとすぐにベットに入る。

「あー、眠い」

『お休みなさいです』

「ああ、お休み・・・」

そうして、俺は夢の世界に旅立った。

## 第十五話（前書き）

変な所があったらご報告お願いします。

## 第十五話

寝た。と思っただらすぐに目が覚めた。

「あれ、寝たと思っただのに・・・」

上半身を起こし、体を伸ばす。十分に伸びた後、時間を見ている。部屋に置いてある電子時計は11時55分と表示していた。

「マジかよ、そんなに経ったのかよ」

寝た実感が無い。あーアレか、夢を見なかったんだ。偶にあるよねこつこつというの、目を閉じて次に目を開けるともう朝で「・・・寝たりねえ」なんて事が。寝た実感が無いんだよね。そしてその日が学校の日だったら最悪だよな。

まだ眠いが約束の時間が近いので仕方なく起きる。しばらくボーッとしていると、ドンドンとドアが叩かれ、次に翔の声が聞こえてくる。

「神楽くん。起きてるー?」

「ああ、ちょっと待ってる」

一応ディスクとデッキ、懐中電灯を持って部屋を出る。階段を降りると、もう十代と隼人は集まっていた。

「少し待たせたな」

「おっ、揃ったな。じゃあ廃寮に行こうぜ！」

「森の中って、結構暗いな」

俺たちは寮を出て廃寮に向かっている、森の中は思いのほか暗く、懐中電灯がなければ数メートル先も見えないだろう。歩いている十番は先頭に十代、次に隼人、翔、俺の順だ。

「本当に何か出てきそー……」

「きっと、廃寮はもっと雰囲気あるんだなあ」

「にしても、闇のゲームなんて本当に実在すのかなあ？」

「でも、廃寮は昔、闇のゲームの研究をしてたって聞いてるよ」

「闇のゲームねえ……」

無くていいけどな、そんなの。

「もし本当にあったら怖いよね」

翔が少し怖がっているようなので少し脅かしてみる。

「ああ！翔の肩に、ネクロ・フェイスがー！ー！」

「ギヤアー！ー！ー！ー！ー！」

そんな感じで廃寮に到着、すると廃寮の門の近くにバラの花が置いてあった。

「うあ、怖そう・・・」

「ふ、雰囲気出るんだな・・・」

隼人が震えた声で言うのとほぼ同時に、俺たちの後ろの方から小枝を踏む音がする。

「で、出たー！ー！！！」

木の枝を踏んだ音がした瞬間、翔と隼人が十代にしがみ付く。俺は少し離れていたから被害は全て十代に行った。その音のする方に視線を向けると、そこには見知った人物が居た。

「明日香か？」

「なんで、明日香がここに？」

「それはこっちのセリフよ、貴方達こそ何をしているの？」  
少し強めの口調で聞いてくる。

「ちよいと、俺たちは夜の探検にね」

「貴方達知らないの？ここで何人もの生徒が、行方不明になっているって」

「そんな迷信、信じないね」

明「この寮の噂は本当よ、遊び半分で来る所じゃない。それに此処は立ち入り禁止だし、学校に知られたら騒ぎになるわ」

「そんなのが怖くて探検なんて出来るか。」



「真面目に聞きなさい!!」

なんか、空気になりそうなので俺も発言することにする。

「なんか、妙に止めるな……。なんかあったのか？」

すると明日香は神妙な顔つきになり。

「ここで消えた生徒の中に、私の兄も居るの……」

「えっ」

翔は驚きを声に出し、十代、隼人は息をのむ。

「それでも行くというなら、勝手にすればいいわ」

明日香は諦めたようにそう言うと森の奥に行ってしまう。

明日香の姿が完全に見えなくなると翔が口を開く。

「アニキ。今、明日香さんが言った事……。僕、この話は作り話だって……」

「まあ、入ってみれば解るさ。行くつぜ」

「う、うん」

「わかった」

十代が、立ち入り禁止と書かれた看板を吊っているロープを超える。俺と隼人もそれに続き、翔が少し遅れてついてくる。

「ま、待ってくれよ」

四人で廃寮の中に入る。

「うわっ、埃すごっ」

テーブルやシャンデリア、到る所に触らなくても分かるくらい埃が積っていて、実際に触ってみると見た目よりも埃が積っているのに気が付く。

「確かに埃とか蜘蛛の巣とかあるけどレッド寮より豪華だぜ、いつそ此処に引っ越さねえか？」

「やめてよアニキ……。僕、絶対嫌だからね！」

「俺も……」

十代が冗談交じりに言ったであろう言葉にやや本気気味に答える翔と隼人。

まあ、確かにレッドよりはすごく豪華ってのは確かだ。ていうか、なんでシャンデリアまであるんだよ、レッドとの差が凄過ぎたる。

「じゃ、色々見て回ろっぜ。」

各々、壁の石板？とかを見ている。

「この部屋はなんかあんのかな？」

その言葉に自分で何もないうとツッコミながらドアを開ける。

神楽「これは……」

部屋の中には何も無さそうだが、部屋の床の半分くらいごっそりと床が抜けていた。

ゆっくりと穴の近くまで進み、しゃがんで穴を覗いてみる。床の下は暗いせいもあるんだろうが、底が見えないくらい深かった。

「こえーな、なんで此処だけ抜けてんだ？」

バキッ

穴の深さに感心していると、何かが折れるような音が聞こえる。

「ん？」

バキバキッ。

音は段々大きくなり、外が出ているのは自分の足元のすぐ後ろだという事に気が付く。

「おいおい・・・」

バキバキバキッ！

「マジかつ、うああああああ！！！！」

しゃがんでいた所の床が抜け、俺の体は穴に落下する。

「う・・・っ・・・」

俺は体の痛みで目が覚める。上体を起こし、体を見つめる。それほど大きな怪我はしてないようだが、落ちた瞬間の記憶がないので少し気を失っていたようだ。

「何処だ、ここ・・・」

立ち上がり周りを見てみる。

自分が立っている下には潰れた段ボールが大量にある。どうやらこの段ボールの山のお蔭で軽い打撲で助かったらしい。

周りは見た感じ一本道、漫画とかでよく見る鉱山のトロッコが通る通路みたいだ。どこ通じているのかは今の状況じゃ分からない。

「まあ、明りが在るのはうれしいな」

壁にはランプがあり火が付いている。

上を向くと大きな穴が開いている。どうやらここから落ちてきたようだ。

しばらく立ち止まっていたが、そうしてもしようがないと思い、歩く。どちらが出口なのかは分からないが、とりあえず歩く。

「誰かいないかー！聞こえたら返事してくれー！」

適当に叫びながら歩く。数分歩いていると、通路を塞ぐように扉があった。

「出口か？つか、ここホントに寮の地下なのか？」

と、ぼやきながら扉のドアノブに手を掛ける。

「あれ、このっ、開かないっ」

開かない、硬いなこの扉。

「このっ！開け！」

なかなか開かないので体当たりをしてみると少しだけ扉が動く。

「開くのは開くみたいだな」

その後も数回体当たりをしていると、最後の体当たりで扉が大きな音を立てて開く。慎重に中に入るが、中には何もなく、ただ広い空間あるだけだった。

「なんだ、ハズレか・・・」

少し痛む肩を押さえながらため息を吐く。

「ハズレなどではないぞ、姫宮神楽」

「っ!」

ここが出口ではなく行き止まりだったのでさっさと出ようとするが、奥から人の声がして、身構えする。

「・・・誰だ」

「フツ、そう警戒するな・・・」

声からして男みたいだな。

「初めて会う奴に対して、警戒するのは当然の事だと思っが?」

「・・・それもそうだな」

そう言い終わると同時に周りに明りが灯った。

男の姿が見えてくる。しかし、フード付きのマントみたいなを着て、顔は雑に巻いた包帯で隠して顔は分からない。身長は俺と同じくらいか俺より低い。

「質問していいか？なんで俺の名前を知っている？」

すると男は静かに笑い、マントから腕を出す。その腕にはデュエルディスクが付いていた。

「フッフ、そうだな、俺にデュエルで勝てたら、教えてやってもいいぞ」

男はからかっているようにも見える。

「そんな事しなくても力づくで聞いてもいいんだぞ？」

体勢を低くする。それを見た男は笑いを止める。

「そつゆつのは・・・趣味じゃない」

ガシャン！！

「ッ！？」

突然背後から大きな音が聞こえる。振り返ると入口の扉が閉まっている。

「俺に勝てたらその扉は開く。さあ！どうする？」

ディスクを展開しながら聞いてくる。

「そうかい、しょうがねえな」

こっちもディスクを展開させる。

「フツ、では・・・楽しいデュエルにしようじゃないかっ!」

「そうかよ!」

「「デュエル!」!」



## 第十五話（後書き）

次は男とのデュエルです。

## 第十六話（前書き）

変な所があったらご報告ください。

## 第十六話

「先行は貰うぞ、ドロー！私はモンスターをセットしカードを一枚伏せターンエンド」

LP4000

モンスター／裏守備一体

魔法・罫／一枚

手札／四枚

「俺のターンドロー！」

どんなデッキを使う？まあいい、手加減はしない！

「俺は手札のモンスターを一枚捨て、クイック・シンクロンを特殊召喚！」

クイック・シンクロン

チューナー（効果モンスター）

星5／風属性／機械族／攻 700／守1400

このカードは手札のモンスター1体を墓地へ送り、手札から特殊召喚する事ができる。

このカードは「シンクロン」と名のついたチューナーの代わりにシンクロ素材とする事ができる。

このカードをシンクロ素材とする場合、「シンクロン」と名のついたチューナーをシンクロ素材とするモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

「チューナーか・・・シンクロ召喚でもするのかな？」

男は俺の場に出てきたモンスターを見て小馬鹿にするような口調で言うてくる。

この世界でシンクロのことを知っているのは俺や実羽くらいだ。もしかしたらこの男も俺たちみたいにこの世界に来たのか？

「そうだよ！墓地のボルト・ヘッジホッグの効果発動！俺の場にチューナーが存在する時、墓地から特殊召喚できる！そしてボルト・ヘッジホッグにクイック・シンクロンをチューニング！」

クイックシンクロンが五つの輪になりボルト・ヘッジホッグを包みこむ。

「こい、ニトロ・ウォリアー！」

ボルト・ヘッジホッグがいる所に上から光の柱が下りてくる。その光から勢いよくニトロ・ウォリアーが出てくる。

「ニトロ・ウォリアーでセットモンスターに攻撃！ダイナマイト・ナツクル！」

ニトロ・ウォリアーがフィールドに出ていた裏側のカードに殴りか

かる。

「俺のモンスターは、ライトロードハンター・ライコウだ」

ライトロードハンター・ライコウ

効果モンスター

星2 / 光属性 / 獣族 / 攻 2000 / 守 1000

リバース：フィールド上のカードを1枚破壊する事ができる。

自分のデッキの上からカードを3枚墓地に送る。

「なに!？」

ライコウはニトロ・ウォリアーのパンチを避けニトロ・ウォリアーの首に噛みつき爆発する。

「クッ！なんでライトロードが・・・」

「さらにライコウの効果でデッキから三枚カードを墓地へ送る」

男がデッキからカードをとり墓地へ送る。

ライトロード・ウォリアー ガロス

聖なるバリア - ミラーフォース -

ライトロード・モンク エイリン

ライロが二枚落ちたか、ただどこかでミラフォの警戒をしなくていいな。にしても、視力良くて良かった・・・。

「モンスターを伏せてターンエンド」

LP4000

モンスター/裏守備一体

魔法・罫/無し

手札/三枚

「私のターンドロ！私はライトロード・サモナー ルミナスを召喚！」

ライトロード・サモナー ルミナス

効果モンスター（制限カード）

星3/光属性/魔法使い族/攻1000/守1000

1ターンに1度、手札を1枚捨てる事で自分の墓地に存在するレベル4以下の

「ライトロード」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する場合、

自分のエンドフェイズ毎に、自分のデッキの上からカードを3枚墓地に送る。

「やっかいなカードだ」

「フツ、説明する必要はないな？手札を一枚捨て、墓地に存在するライトロード・モンク エイリンを特殊召喚！エイリンは攻撃した守備モンスターをデッキに戻す事が出来るカード、この説明も必要

なかつたかい？」

ライトロード・モンク エイリン

効果モンスター

星4 / 光属性 / 戦士族 / 攻1600 / 守1000

このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算前にそのモンスターをデッキに戻す。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分のエンドフェイズ毎に、自分のデッキの上からカードを3枚墓地に送る

「いらん！さつさと続ける！」

「そう急かすな。エイリンで守備モンスターを攻撃！」

エイリンが突っ込んでくる。

「俺の守備モンスターは、シールド・ウイングだ」

シールド・ウイング

効果モンスター

星2 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻 0 / 守 900

このカードは1ターンに2度まで、戦闘では破壊されない。

エイリンがシールド・ウイングにとび蹴りをするが、羽で弾かれる。

「しかし、エイリンの効果でデッキに戻ってもらっ

エイリンがシールド・ウイングに回し蹴りを当てるとシールド・ウイングが吹っ飛ばされながら光になって消える。

「そしてルミナスでダイレクトアタック！」

「うあっ！」

LP4000 3000

「エンドフェイズ、ルミナスとエイリンの効果でデッキから六枚のカードを墓地へ送る」

ライトロード・ビースト ウォルフ

ソーラー・エクステンジ

冥府の使者めいふのしやゴーズ

ライトロード・マジシャン ライラ

ライトロード・ハンター ライコウ

光の召集

「今墓地に送られたライトロード・ビースト ウォルフの効果発動！墓地より特殊召喚する！」

ライトロード・ビースト ウォルフ

効果モンスター

星4 / 光属性 / 獣戦士族 / 攻2100 / 守 300

このカードは通常召喚できない。

このカードがデッキから墓地に送られた時、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。



これで墓地のライロが三種類になったか、ジャッチメントまであと一種類……。

「少し手加減し損ねたかな？ターンエンドだ」

LP4000

モンスター/ウォルフ、ルミナス、エイリン

魔法・罫/一枚

手札/三枚

「けつ、余裕ぶりやがって……。俺のターンドロー！」

手札は四枚、結構キツイがやらなきゃ不利になるだけだ。それに余裕そうなアイツの鼻っ面へし折ってやる！

「俺は手札の星見獣ガリスほしみじゆうを相手に見せて効果を発動！デッキの一番上のカードを墓地へ送りそのカードがモンスターだった場合、そのモンスターのレベル×200ポイントダメージを相手ライフに与え、ガリスを特殊召喚する。モンスター以外だった場合このカードを破壊する」

星見獣ガリスほしみじゆう

効果モンスター

星3/地属性/獣族/攻 800/守 800

手札にあるこのカードを相手に見せて発動する。

自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送り、

そのカードがモンスターだった場合、

そのモンスターのレベル×200ポイントダメージを相手ライフに与え

このカードを特殊召喚する。

そのカードがモンスター以外だった場合、このカードを破壊する。

「フン、賭けか……。さて、当たるかな？」

「当たるさ」

「何？」

デッキからカードを引き、相手に見せる。男はカードをみて、感心したように声を上げる。

「ほう……。当てたか……」

「デッキの一番上のカードは、ネクロ・ガードナーだ！そしてネクロガードナーのレベルは3。よってお前に600ポイントのダメージを与えガリスを特殊召喚する！」

場にガリスが現れ、男に体当たりをする。

LP4000 3400

「グツ、中々やるじゃないか」

「ただだぜ、もう一枚のガリスの効果！デッキの上のカードを墓地へ送る。今度はレベル・スティーラー！よって200ポイントのダメージを与える！」

LP3600 3400

「二枚目も当たりか・・・」

「そしてジャンク・シンクロンを召喚！効果で墓地のレベル・ステイラーを特殊召喚！」

レベル・ステイラー

効果モンスター

星1/闇属性/昆虫族/攻 600/守 0

このカードが墓地に存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在する

レベル5以上のモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターのレベルを1つ下げ、このカードを墓地から特殊召喚する。

このカードはアドバンス召喚以外のためにはリリースできない。

「シンクロ召喚、レベルは九・・・。チツ、アイツか・・・」

「知ってるみたいだな？レベル3のガリス二体にレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

ジャンク・シンクロンが三つの輪になりガリス二体を包む。

「いい、氷結界の龍 トリシューラー！」

氷結界の龍 トリシューラ

シンクロ・効果モンスター

星9 / 水属性 / ドラゴン族 / 攻2700 / 守2000

チューナー＋チューナー以外のモンスター2体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、

相手の手札・フィールド上・墓地のカードを

それぞれ1枚までゲームから除外する事ができる。

下から冷たい冷気の突風と共に巨大な氷が地面を衝き出てくる。そしてその氷が砕け散り、咆哮と共にトリシューラが姿を現す。

「厄介なカードだ・・・」

「俺もそう思うぜ。トリシューラの効果発動！相手のフィールド、墓地、手札のカードを一枚ずつゲームから除外する。フィールドからルミナス、墓地からライラ、手札は右端のカードだ。」

トリシューラがそれぞれルミナスと男の墓地、手札に向かってブレスを吐く。

「チツ、手札のカードは裁きの龍だ」  
ジャッジメント・ドラゴン

「よしっ！トリシューラでエイリンを攻撃！」

三つの顔全てがエイリンに向き、一斉にブレスを吐く。

そのブレスはエイリンに直撃し、その余波はプレイヤーである男のほうにまで及ぶ。

「ぐあっ！」

LP3400 2300

「ターンエンドだ。どうした？加減し損ねたか？」

「舐めるなよ小僧オ！」

男はその言葉を不快に思ったらしく、いままでの余裕のある声とは違い苛立った声に変わる。

LP3000

モンスター／トリシューラ、レベル・ステイラー

魔法・畏／無し

手札／一枚

「チィ！！俺のターンドロォー！」

男は勢い良く引いたカードをみて笑う。

「フフフツ、どうやら天使は俺に微笑んでいるようだ・・・」

「なに？」

「俺はウォルフを生贄にライトロード・エンジェル ケルビムを召喚！」

ライトロード・エンジェル ケルビム

効果モンスター

星5 / 光属性 / 天使族 / 攻2300 / 守 200

このカードが「ライトロード」と名のついたモンスターを生け贄にして生け贄召喚に成功した時、デッキの上からカードを4枚墓地に送る事で相手フィールド上のカードを2枚まで破壊する。

ウォルフが大きな光の球になり、その中からケルビムが羽を大きく広げながら姿を現す。

「ケルビムの効果！ライトロードと名のついたモンスターを生け贄に召喚に成功した時、デッキの上からカードを4枚墓地に送る事で相手フィールド上のカードを2枚まで破壊する！」

ケルビムが持つてる杖を俺の場に向ける。

「消え去れ！」

杖の先が直視できないほど輝く。

「眩しっ!?!」

「この効果のコストとしてデッキの上からカードを墓地へ送る。」  
眼を開けるとトリシューラとレベル・ステイラーは消えていた。

「バトル！ケルビムでダイレクトアタック！」

ケルビムが俺の近くまで一瞬で飛んできて杖を振りかぶる。とつさに避けようとしたがそれより早く、ケルビムは杖についている刃物の部分を俺の首筋に当てる。

しかし、そのまま切り裂こうともせずに切っ先を首筋にとらえたまま動かない。おかしいと思いケルビムの顔を見る。……その顔は心なしか、俺を見下しているかのように笑っているように見える。

「なんだその顔、ッ!？」

文句を言おうとするとケルビムはトリシューラを消した時のように、またケルビムが杖を輝かせる。

LP3000 700

「カードを一枚伏せターンエンドだ」

LP2300

モンスター/ケルビム

魔法・罫/二枚

手札/一枚

「うく、クッソ……!」

アイツ、ワザとやったのか?それともただのソリットビジョンなのか?

男の元に戻ったケルビムの表情は無表情で、何も感じない。

「俺のターン!」

クソッ、さっきの光で墓地に送ったカードが見えなかった。

「俺はシンクロン・エクスペローラーを召喚！このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「シンクロン」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する事ができる！俺はクイック・シンクロンを特殊召喚！さらにワンショット・ブースターを特殊召喚！」

シンクロン・エクスペローラー

効果モンスター

星2/地属性/機械族/攻 0/守 700

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する

「シンクロン」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

「今度は何を出すのかな？」

男がまた小馬鹿にするように声を掛けてくる。

「うっせえ！レベル2シンクロン・エクスペローラーとレベル1ワンショット・ブースターにレベル5クイック・シンクロンをチューニング！こいジャンク・デストロイヤー！」

地面を突き破ってジャンク・デストロイヤーが姿を現す。

「ジャンク・デストロイヤーの効果！シンクロ素材にしたチューナー以外のモンスターの数につき一枚、相手フィールドのカードを破壊する！ケルビムと右のリバースカードを破壊！」



「ジャンク・デストロイヤーの効果にチェインし、リバーズカード  
光の召集ひかりしゅうじゅう

を発動！手札をすべて捨て、捨てた枚数墓地の光属性モンスターを  
手札に加える！俺は一枚捨て、墓地の裁きの龍ジャッジメント・ドラグーンを手札に加える！」

ひかり  
光の召集

通常罫

自分の手札を全て墓地に捨て、その枚数だけ自分の墓地から  
光属性モンスターを選択して手札に加える。

「いたのか！？」

「ジャンク・デストロイヤーの効果でケルビムと光の招集は破壊さ  
れる」

ジャンク・デストロイヤーが地面を殴る、その衝撃は地面を伝いケ  
ルビムに当たる。

「まあいい！ジャンク・デストロイヤーでダイレクトアタック！」

これが通れば、終わりだ！

「墓地のネクロ・ガードナーの効果！このカードを除外し、攻撃を  
一度だけ無効にする！」

ネクロ・ガードナー

効果モンスター（制限カード）

星3 / 闇属性 / 戦士族 / 攻 600 / 守 1300

自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。  
相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

「それも落ちてたのか!？」

ジャンク・デストロイヤーが殴りかかるも半透明のネクロ・ガード  
ナーに阻まれる。

「惜しかったな。さてどうする?」

「・・・ターンエンド」

LP700

モンスター / ジャンク・デストロイヤー

魔法・罫 / 無し

手札 / 無し

「私のターン、ドロ。感謝するぞ、お前がケルビムを破壊してく  
れたおかげでこのモンスターが召喚召喚条件が揃うのだからなあ・・・」

「勿体ぶってんな、出すならさっさと出せ」

「ならばお望み道理にしてやろう!自分の墓地にライトロードと名  
のついたモンスターが4種類以上存在する時!私は手札から裁きの  
ジャッシュメント・ドラグーン  
龍を特殊召喚する!」

## 裁きの龍

シャッジメント・ドラグーン

効果モンスター（準制限カード）

星8 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2600

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に「ライトロード」と名のついた

モンスターが4種類以上存在する場合のみ特殊召喚する事ができる。  
1000ライフポイントを払う事で、

このカード以外のフィールド上に存在するカードを全て破壊する。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、

自分のエンドフェイズ毎に、自分のデッキの上からカードを4枚墓地へ送る。

男はディスクにカードを置くと天井が輝き、  
裁きの龍シャッジメント・ドラグーンがゆっくり下りてくる。

『ゴオオオオ！！！！！』

「ついに来やがったか・・・」

「そして効果を発動！ライフを1000払い、このカード以外のフィールドのカードをすべて破壊する！」

ドラグーンがフィールドに向かってブレスを吐く。

「ぐあああ！！」

「そして裁きの龍シャッジメント・ドラグーンでダイレクトアタック！！」

「墓地のネクロ・ガードナーの効果！説明はしなくてもいいな！！」  
ネクロ・ガードナーが俺の盾になり、ドラグーンの攻撃を防ぐ。

「エンド・フェイス、裁きの龍ジャッジメント・ドラグーンの効果でデッキの上からカードを四枚墓地へ送る」

光の援軍

ライトロード・パラディン ジェイン

ゾンビキャリア

死者転生

「ターンエンドだ」

LP1300

モンスター／裁きの龍ジャッジメント・ドラグーン

魔法・罫／無し

手札／一枚

最悪だな。手札は無し、相手にはジャッジメントが居るし、この引きでこの局面をひっくり返さなければ、俺は負ける。  
男は勝ち誇ったように勝利宣言をする。

「どつやら、俺の勝ちみたいだな」

「どつだろつな？俺が逆転できるかもしれないだろ？」

「逆転、できるかな？」

「出来る出来ないじゃねえ、やるんだよ！俺のターンドロー！！」  
俺の引いたカードは・・・

「俺の、勝ちだ！俺はシンクロン・エクスペローラーを召喚！！」

「何だと！？」

「効果は知ってるよな？俺はクイック・シンクロンを特殊召喚！そしてチューニング！」

クイック・シンクロンが輪になりエクスペローラーを包む。

「こい、ジャンク・アーチャー！！」

ジャンク・アーチャー

シンクロ・効果モンスター

星7/地属性/戦士族/攻2300/守2000

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上  
1ターンに1度、相手フィールド上に存在する

モンスター1体を選択して発動する事ができる。

選択したモンスターをゲームから除外する。

この効果で除外したモンスターは、

このターンのエンドフェイズ時に同じ表示形式で相手フィールド上に戻る。

「この土壇場で!?!」

「ジャンク・アーチャーは1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスター1体をゲームから除外する!ちよっと休憩してる  
ジャンク・ドラグーン  
!?!裁きの龍を除外!?!」

ジャンク・アーチャーが裁きの龍ジャンク・ドラグーンに向かって矢を放つ、矢が当たった所から裁きの龍が消えていく。

「ば、馬鹿な・・・!」

「ジャンク・アーチャーでダイレクト・アタック!」

ジャンク・アーチャーが男に狙いを定め、矢を放つ。

「ぐあああ!?!?!?!」

LP13000

「俺の勝ちだな。約束通りに質問に答えろ」

「痛つて〜・・・、あゝあ負けちまったな〜」

「だからお前は！」

「俺だよ俺、気付かないもんなんだな。いやもしかして気づいてるか？」

男が顔に巻いていた包帯を取る。

包帯を取った男の顔を見る、それは良く見知った顔だった。

「お、お前!!」

「そんなに怒るなよ、かぐ〜」

「それと変な呼び方するな! 拓馬!!」

包帯を取った男は、俺の知っている一条拓馬いちじょうたくまだった。

## 十七話（前書き）

今回は短いです。

誤字脱字などがありましたらご報告お願いします。



## 十七話

神楽「で？なんでお前がここに居るんだ？」

一番気になる事だからな、ここにはどうやって来たんだ？  
すると、拓馬は人差し指を立てて自分に口元に当てて、

拓馬「禁則事項です。」 女声

神楽「キシヨイ。」

拓馬「直球だな?!」

神楽「それ以外に言いようがねえよ。」

拓馬「もう少し包めよ！オブラートに!!」

神楽「お前が女声出すのが俺的に無理だし、そのポーズも無理、ついでに言えばネタのチョイスもちよつとアレだ。」

拓馬「アレってなんだよ!？」

神楽「アレはアレだ、……………その前に俺の質問に答える。」

拓馬「話を変えるな!」

神楽「俺の質問に答える!!」

拓馬「お前から言え!!」

神楽「お前からだ!!」

拓馬「お前から!!」

神楽「考え付かなかったんだよ!!」

拓馬「言った!?!そこはもう少し乗れよ!!」

神楽「いいから、お前も質問に答える!!」

拓馬「そ、それはだな・・・、え〜と・・・。」

悩んでないでさっさと言え!!

拓馬「口に出せ!!」

神楽「うっさい。で、なんでこの世界に居る?」

拓馬「それは・・・。」

神楽「それは?」

スゲー考えてる顔だな。

五分経過

拓馬「そ、空から天使が舞い降りてきて、俺を天界に拉致、もとい！連れて行ってくれて・・・えーと、なんかお前が困ってるから助けてやってくれと命れ、頼まれて有無を言わずここまで連れてこられ、てません！！来たんです！！」

神楽「訳分かんねえよ。」

拓馬「うるさい！事実だ！！」

若干涙目になり俺に顔を近づけてくる。

神楽「キシヨイ！！」

拓馬「イタイトツ！！」

ワザとらしく倒れる。

なんかむかついたから起き上がる所を蹴り倒す。

拓馬「いたっ！何すんだよ！！」

神楽「うるせー。さっさと本当の事言いやがれ。」

拓馬「今言っただじゃん！！」

神楽「信じれるかボケエ！だれだ天使って！？何処だ天界って！？拉致られたのは信じるとして、俺を助けるってどうゆう意味だ！！」

拓馬「なんで拉致の部分は信じるんだよ！」

神楽「だってお前よく拉致られるじゃん。」

拓馬「九割はお前の所為だ！！お前をボコボコにしたい奴が人質として俺を拉致るんだよ！！分かったか？！」

神楽「サーセン。さあ！俺の質問に答えろ！！！」

拓馬「お前！それで許されと・・・！！！」

ザシユ・・・バタンツ。

神楽「ゑ？」

突然落ちてきた槍が拓馬の頭を貫く。

神楽「ちょ！大丈夫か！？」

？「大丈夫よ、死んでないから。」

神楽「お前・・・ケル、ビム？」

顔を上げるとゆっくりとケルビムらしき人物が下りてくる。

ケルビム「さつきから話が進んでないのよ、使えないわね。」

そう言いながら拓馬の頭に刺さってた槍を無造作に抜く。

神楽「ちょ！！ヤバいつて血が！？」

出なかった。

神楽「あ、あれ？」

ケルビム『大丈夫よ、刺さっても死にはしないから。』

そう言いながら仰向けになって気絶？している拓馬に槍を突き刺す。

拓馬「!?!?!?!?!」

声は出ないが体は反応しているようだ。

ケルビム『さて、話を進めましょう。会話からしてアンタが姫宮神楽でいいのよね?』

神楽「あ、ああ。そうだが……。」

ケルビム『アタシはカードの精霊。不本意ながらもこれの持っている『ライトロード・エンジェル ケルビム』の精霊よ。』

これって、持ち主をこれって……。

なんか、ケルビムが槍で拓馬を突き刺し始めた。いやーいくらなんでもヤバくない!?

神楽「あの!!な、なんでコイツが此処に居るんだ?」

ケルビムが突き刺すのを一旦やめ、こちらを向く。

あの槍で出来た傷はすぐに治るらしい。

ケルビム『拉致つた。』

神楽「は、はあ……。そうですか……。」

いや「普通でしょ。」みたいな顔で言われても……。

神楽「あ……。拉致つた理由は？」

ケルビム『理由？あ……。なんだろう？拉致り易かったから？』

神楽「え……。じゃあ、なんでコイツこの世界に来たの？」

すでに屍と化している拓馬をさす。

ケルビム『お前を虐め……。もとい、助けるためだ。』

神楽「そうか、拓馬が言っていたのは強ち間違いでもなかったのか……。」

屍「だ……。ろお……。」

ケルビム『死体は喋んな。』

グサアと拓馬の腹に槍を容赦なく刺すケルビム。

神楽「とりあえず此処から出ない？」

ケルビム『そうね。ほら、寝てないで起きろ。』

ズボオ、ゲシツ！！

拓馬「アブウ！？」

わあ、容赦ねえ。とくに屍に対して槍を抜いた所をピンポイントで蹴るあたりが。

拓馬「誰が屍だ！！」

神楽「さっきまで気を失っていたのに……、これがギャグキヤラ補正と言うやつか！！！」

拓馬「なんだとこのヤロ！！」早くしろ。『ハイ、スイマセン。』

ケルビムに怒られた拓馬はディスクを弄りだす。すると、周りの景色が一変し薄暗い部屋に変わる。

神楽「スゲー……。さっきの洞窟みたいなのってソリッドビジョンだったんだ。」

拓馬「結構便利だろ、廊下とかも全部そうだ。」

ケルビム『さつさと案内しなさい。』

拓馬「……………こちらです……………」

そう言つて部屋の奥にある扉に向かう、俺もその後を追う。

拓馬「あー、神楽は元来た道に戻ってくれ。落ちてきた所を越すと出口だから。」

神楽「じゃあそっちのドアはなんだよ。」

拓馬「色々あんだよ。それじゃ、また会おうぜ。」

そう言っつてさっさと行っつてしまふ。

神楽「はあ、戻りますか。」

そう言えば俺って落ちてきたんだよな、あいつらに心配かけたかな？  
そう思い、走って元来た道を俺は戻る。



## 十八話（前書き）

短いです。

誤字脱字などがありましたらご報告願います。

## 十八話

不本意ながらも拓馬の言う事を聞き、素直に落ちてきた場所に戻る俺。

と言つか廊下もソリッド・ビジョンならどうやって戻ればいいのかろう？と思っただが来た時と同様で廊下は一本道だったし、潰れた段ボールも有ったので迷いはしなかった。

神楽「ん？階段かあれ？」

段ボールを通過して数分、目の前に階段が見えてきた。上るかどうか迷ったが上るしかないので階段を上がっていく。

神楽「本棚？なぜ？」

一番上まで上がると本棚がありそれ以外は何もない。

神楽「もしかして隠し通路とかなのか？ここ。」

とりあえず本棚を弄ってみるが何も起こらない。こいゆうのって決められた本を取ったり押したり並べ替えたりするんじゃないのか？最後に面倒なの残しやがって拓馬の野郎……。

神楽「壊せるか？」

頭使うのは面倒なので拓馬の時みたいに蹴り破る事にする。

階段を数段降り、助走を付ける。

神楽「一つ、二いいのおおお・・・！！！！！！」

助走を付け、

神楽「三！！！！！！」

とび蹴り！！

ドガアアアアア！！！！！！

神楽「成功 成功」

凄まじい音を立てて本棚が倒れる。少し不安だったが案外出来るもんなんだな。

本棚の向こうは最初に来た部屋みたいな場所だったので探せば出口は見つかるだろう。

神楽「心配掛けたかな？さっさと出るか。」

そう思い、さっさと出口を探すために俺は部屋を出る。

明日香「……んっ、うう……。此処は？」

十代「おっ、気が付いたか!!」

明日香「貴方達どうして此処に？」

明日香が目を覚ますと目の前には十代、翔、隼人が居た。

十代「よし！明日香が目を覚ましたから俺は神楽を探してくる。翔達は明日香を見てくれ。」

翔「分かったっす。」

隼人「大丈夫かな神楽は？」

明日香「そう言えばもう一人はどこに居るの？」

明日香が神楽の姿が見えないのに気が付く。

十代「いや、それは……。」

ガサガサッ。

翔「うわ！？何！？」

十代「下がってる！！誰だ！？」

十代が呼びかけると草むらの中から人が出てくる。

神楽「俺だ、十代。」

十代「神楽！良かった！大丈夫だったか？」

神楽「落ちただけだ、なんともない。」

翔「よかった。もう、心配したんだよ神楽くん！」

隼人「でも、無事でよかったんだな。」

翔達も駆け寄ってくる。

神楽「すまんすまん、悪かった。」

心配させたので謝っておく。

そして皆が揃ったところで十代が明日香に写真とカードを渡す。

明日香「これって、兄さん！？間違いないこれは兄さんのサイン……」

十代「ごめんな、これしか手懸りが見つかなかったんだ、兄さんの話を聞いて少しは役に立てるかなあ〜と思ったんだけど。」

明日香「アナタわざわざそのために？」

コケコッコ〜!!

明日香が十代に聞きかけたが鶏の鳴き声がそれを遮る。

十代「ヤッバ!!皆が起きだす前に戻ろうぜ!!」

神楽「そうだな、深夜に寮を抜け出してるのがバレたら問題だしな。」

翔「明日香さん。」

隼人「それじゃ。」

十代「またな!」

神楽「気を付けて帰れよ!!よし、ダッシュだ!!」

十代「おお!!」

そう言つて俺と十代は走り出す。

翔「あ!待つてよアニキ〜!神楽くん!」

隼人「待つてくれなんだな。」

翔と隼人も走り出す。

それを見送つた明日香は、写真を大事そうに持ち自分の寮へ戻る。

明日香「(遊城十代、お節介な奴。)」



## 十九話（前書き）

やっとここまで来ました、長かったですね・・・。

もう少しはかどるかと思ってきましたが、夏休みがあと少しで宿題に追われています、面倒ですな宿題・・・。皆さんも宿題等の事はちやんと頑張りましょう！

誤字脱字などが在りましたらご報告願います。



## 十九話

廃寮探索から数日がたち、特に何事もなくいつもの日常を送っていた。「俺が転校してきただろう・・・むにゃむにゃ。」「・・・なんかツッコまれたが拓馬が転校生としてアカデミアへ来た、説明は面倒なので省く。それより眠いので俺はもう寝る、お休み。」

ドタドタドタドタドタ!!

早朝のレッド寮に複数の足音が響く。

女「私たちはこっちだ、お前たちはそっちを抑えろ」

男達「「イエッサー！」」

数人の男が一つの部屋の前に立ち、ドンドンと強くをやる。

男「開けなさい！速やかにこのドアを開けなさい！」

？「はい、ちょっと待って下さい、今開けますんで・・・」

しばらくしてドアの鍵が開く音が鳴る。男達はドアが開くのを待たずにドアを開け中に入る。

？「ドウオ!？」

ドアの前に居た学生が踏み倒されるが男たちはそれを無視し、いまだに寝ているもう一人の学生の前に立つ。

男「姫宮神楽だな？お前を査問委員会まで連行する。御同行を願いたい」

神楽「・・・・・・・・」

男が呼びかけるが学生はピクリともしない。

男「もう一度言う、姫宮神楽！お前を査問委員会まで連行する！御同行を願いたい！」

神楽「うるせー・・・・・・・・寝かせる・・・・・・・・」

男「貴様！」

脇に控えていた男が痺れを切らし神楽をベットから引きずり出す。

男2「お前を連行する！言い訳は聞かん！！」

男は神楽の腕を引っ張り上げ、自分と同じ目線にする。

神楽「……よ」

男2「何？」

男は顔を近づけ聞き取るうとする。

神楽「うるせーって言うてんだろっが！！！！」

怒声を上げながら神楽は男に頭突きをする。

男2「グア！」

拓馬「何なんだってんだっ！！？」

男は神楽の頭突きを喰らい、起き上がろうとした拓馬に背中から倒れこむ。

男3「な、何をする！？」

男の問いに神楽は不機嫌そうな顔をする。

神楽「なんなんだ貴様等は？なぜ我の眠り妨げる？なんの権利を持って我を起こす？答えよ？」

男「　　!？」

男は神楽の出す威圧感に押され一歩後ろに引く。

神楽「なぜ黙る？我は答えろと言つてのだぞ!!」

男「グアツ!？」

神楽が繰り出した蹴りに反応出来ず、開いていたドアから手すりまで男は蹴り飛ばされる。

男3「き、貴様!大人しくしろ!!」

神楽「フンツ!」

男3「ゴアツ!？」

男は神楽を取り押さえようとしたが神楽に殴り飛ばされ尻もちをつく。

神楽「なぜ我が貴様などの言つ事を聞かねばならぬ？身の程を知れ!!」

男3「ひ、ひいいい!？」

そんな男の姿を見て神楽は狂つたように笑う。

神楽「フハハハハハハ!!!そうだ!お前たちはそうして地べたを這い蹲るのがお似合いだ!フフフツハハハハアハツハツハツハツハ!!!」

ドリアード』うるさー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

神楽「ヒデブ！！？」

ドサツ。

男3「な、何なんだ？何が起こったんだ？」

拓馬「ご愁傷様」

精霊の見えない男は困惑していたが精霊の見える拓馬は状況を理解し神楽に労いのことばを言う。

男3「ひ、姫宮神楽！お前を査問委員会に連行する！」

男は気絶した神楽を抱えて部屋を出る。

十代・翔「ええー！退学！？」

十代と翔が大声で言う。

俺たちはなんか良く分かんない所に連れてこられ目の前にある巨大スクリーンに映った先生方をみている。

女「先日、遊城十代以下三名は閉鎖され、立ち入りとなっている特別寮に入りこみ、内部を荒らした。調べはついている！」

十代「うう、何でも言う事聞くからチャンスくれよ・・・」

十代が校長にお願いしている。

鮫島「そうですね。さすがに退学と言つのは厳しすぎるかもしれません」

女「何を言いますか！この者たちは校則を違反した、それだけで十分です！」

鮫島「しかし・・・」

クロノス「ならば、別のペナルティを提案スルノ。それは制裁タッグデュエル！」

十代「制裁タッグデュエル？」

十代がクロノスに聞き返す。

クロノス「その通り、遊城十代と丸藤翔、君たち二人でタッグを

組みデュエルするノネ。デュエルに勝利したら無罪放メーン、ナノネ」

十代「タツグデュエルか、面白そうだな！」

翔「僕が、アニキとタツグを・・・」

十代がやる気十分なのに対し、翔は浮かない顔だ。

神楽「せんせーい、俺は誰とタツグを組めば？」

クロノス「同じ寮の誰かと組めばいいノネ。では校長、本人もそれでもいいと言っていますか？」

鮫島「では、仕方ないですな・・・」

クロノス「では、諸々の詳細は私わたくしがおって伝えるノネ！」

俺たちは寮へ戻り、タッグデュエルの対策を練るつもりだったが、  
翔「僕じゃアニキのタッグなんで無理だー！！神楽くん拓馬くん隼  
人くん、僕と変わってー！！」

帰ってきてからこの調子だ。隼人も校長に抗議してきたそうだが無  
理だったそうだ。

十代「そう弱音をはくなよ翔。勝てばいいんだろ勝てば」

そう言いながらデツキを弄る十代。

翔「アニキは強いからそんな事が言えるんだよ」

十代は手を止め翔を見る。

十代「翔、お前が本当に俺の弟分ならそんな弱音は吐かねえぞ」

翔「でも・・・」

神楽「ああ、拓馬。俺と組んでくれ」

拓馬「唐突だな、俺でいいのか？」

神楽「同じ寮ならだれでもいいって、お前もガチでいけ」

拓馬「酷いなお前！ワンキルするつもりか！？」

神楽「当たり前だ！こんな所で退学になってたまるか！！」



十代「よし！翔、まだお前のデッキの特徴知らないからデュエルと行こうじゃないか！」

俺と拓馬が言い合っていると十代と翔がデュエルするみたいだ。

翔「……」

十代と翔のデュエルをするために、俺たちは寮の後ろにある崖に居る。

隼人「すまないんだな、俺も寮に居たのに何もできなくて……」

神楽「気に済んな、俺もアイツ等も何とかするさ」

拓馬「俺たちは大丈夫として、問題は翔だな」

確かに、原作じゃ勝ってたけど何が起こるか分からないからな。

ドリアド『大丈夫でしょうか？』

神楽「（まあ、なんとかするだろう）」

明日香「きつと大丈夫よ」

隼人「明日香さん、それに実羽さんも」

実羽「なんだ、落ち込んでないか心配だったが大丈夫そうだな」

実羽と明日香が俺たちの隣に来る。

神楽「まあ、俺はな。翔は少し心配だが、何とかなるだろう」

実羽「そうだな」

結果から言おう翔が逃げた。デュエルが終わった途端にどっかに走って行った。

隼人「翔！」

隼人は翔を追いかけて行った。俺は十代の所に行く。

神楽「どうした冴えない顔して」

十代「なあ、デュエルって楽しいもんだろ？でもアイツのデュエルはなんか辛そうだ・・・、手札にパワーボンドなんてキラーカード持ってたのに・・・」

明日香「・・・翔君には本当のお兄さんがいるのよ」

明日香が十代に言う。

十代「そうなのか？」

拓馬「知らないのか？丸藤亮、カイザーって言われてるチートやろ、もといブルーのトップだ」

チート言うな。まあチート臭いが。

ドリアード『（ホント、凄いですよね。前の持ち主がわんきるされてましたよ）』

容赦ねーカイザー。



## 第二十話（前書き）

遅くなりました、すいません。そして短いです。

誤字脱字などが在りましたらご報告願います。

## 第二十話

今俺と拓馬は翔を探すために手分けして探している。俺は学園内を探しているのだが中々見つからない、ドリアードも手伝ってくれているのだが翔はまだ見つかっていない。

ドリアード『こっちは居ませんでしたよ』

ドリアードの声がした方に目を向けると、ドリアードが廊下の壁から出てきて俺のすぐそばに浮かぶ。

神楽「（そうか。じゃあ、また歩きながら探すから翔が居たら教えてくれ）」

ドリアード『分かりました。でも、翔さん大丈夫でしょうか？』

神楽「（落ち込んでるだろうな……、さっさと探して元気づけてやるっぜ……）」

ドリアード『そうですね……』

心配そうな顔をしてドリアードは翔を探しに行く。

ドリアード自身も翔を心配していて、さっきから動きっぱなしだ。

神楽（たくっ、さっさと出てこいってんだ）

俺はドリアードが動ける範囲を広げるために再び歩き出す。

無言のまま歩いていると裏路地とかにありそうな青いゴミ箱を見つけた。

神楽（………ないない、もしそうだとしたら苦労はない）

だが、もしも………ということもあるからな……。

意を決した俺はドリアードに連絡を取る。

神楽「（ドリアード、聞こえるか？）」「

ドリアード『はい？何ですか？』

神楽「（ホアア！？）」「

いきなり後ろからした声にビックリしながらも声には出さなかった俺を誰か褒めてくれ。

そして振り向きざまにドリアードの頭を叩く。

スパンツ！

ドリアード『いたっ！？』

神楽「（いきなり後ろから返事すんなー！ビックリするだろうが！）」

ドリアード『呼んだから返事したんじゃないですか！？叩かないでくださいー！』

ゴスツ！

神楽「（ゴフツ！？俺に悟られず鳩尾に一撃を喰らわせるとは・・・。だが、終わらん！終わらんぞおおおおおー！！！！）」  
ふにふに。

ドリアード『ふにゃ！？ほっへひっはらはいへくらはい（ほっぺ引っ張らないでください）！！』

キンツ。

神楽「へバア！？」

男なら一度は経験が在るであろう息子へのクリーンヒットに思わず変な声をあげて倒れこむ俺、その姿は実に情けない事だろう。

ドリアード『あっ、ごめんなさい・・・。大丈夫ですか？』



神楽「……………それより、あのごみ箱の中身、確認して、くれないか？」

ドリアード『……………はい。その、ごめんなさい』

ドリアードは俺に謝ってからごみ箱を確認しに行く。というかまだ痛い……………。

ドリアードがごみ箱まで飛んでいき、ごみ箱に顔を当てて中を確認する。そして勢い良くごみ箱から顔を外すと俺の方に飛んでくる。

神楽「……………居たのか？」

ドリアード『居ました!』

すごい嬉しそうな顔だ。どうやら本当に居たらしい……………翔、もう少し隠れる所を選ぶ。

まあいい、柄でもないが少し説教でもしてやりますか。

物音を立てないように立ち上がり、静かにごみ箱に近づき、勢い良く蓋を開け

神楽「みーつけたああああ……………!」

翔「ぎゃあ……………!」

ごみ箱に隠れていた翔を思いっきり脅かしてやる、翔はびっくりした拍子でごみ箱ごと倒れてしまう。

神楽「ていうか隠れるならもっと分かりにくい所に隠れるよ」

翔「な、なんで分かったの？」

頭をぶついたらしく後頭部をさすりながら聞いてくる。

神楽「廊下にごみ箱があれば不思議に思っただる普通」

翔「あ・・・」

今気付いたようだ、重症だな。

とりあえず翔の襟を掴む。

翔「な、何？」

そのまま翔を引きずる、翔は訳が分からないといった顔で俺に何か言ってくる。

翔「ちょ、ちょっと！？何するの！？」

神楽「なに、ちょっと購買に強制的任意的同行をしてもらっただけだ」

翔「それって任意同行じゃない気がするっス！！」

翔がなんか言っているが無視無視、そのまま引きずりながら購買を  
目指す。

翔「もう、なんで引きずるんすか〜・・・」

神楽「悪い悪い。ホレ、お前の分」

ズボンに付いた埃を落している翔に買ってきたジュースを投げ渡す。  
翔はそれを何度か落としそうになるがちゃんとキャッチする。

翔「ありがとうッス」

神楽「気にすんなって」

近くにあった椅子に座る。翔ももう一つの椅子に座る、だがジュースには手をつけようとせず黙って板を向いている。

俺は缶の蓋を開けコーヒを一口飲み、翔の方に顔を向ける。

神楽「・・・いつまでも気にするな」

翔はその言葉に反応し、ジュースの缶を強く握りしめ俯いている。

神楽「十代のパートナーはお前なんだ。いつまでもウジウジしてんじゃねえ」

翔は俯いたまま黙っている。

神楽「お前がそんなんじゃ十代の方も滅入っちゃうぞ」

翔「……僕じゃ、無理だよ……」

神楽「どうしてそう思う？」

翔「僕がアニキの足を引つ張って……やっぱり僕には無理だよ  
！！」

突然、翔が立ち上がり大声を上げる。  
俺はそれを黙って聞く。

翔「どうしても駄目なんだ！！僕は弱いから絶対アニキの足を引つ  
張る！！その所為でアニキが退学になるくらいなら、僕は！！」

ドリアード『翔さん……』

大声でそう言った後、翔は俺の方を向き意を決したような顔で俺に  
向き合うように立つ。

翔「アニキを頼みますっス」

そう言って購買を走って出ていく翔。

俺は残ったコーヒーを煽るように飲み干す。

神楽「……はあ……」

ドリアード『翔さん、大丈夫でしょうか？』

ドリアードが心配そうな顔で翔が出て行った方をみる。

神楽「俺達は何もできなかった。後は他の奴に任せるしかないだろ」

ドリアード『……………そうですね』

ドリアードはそれから黙る。俺も何も話さずただ飲み干したコーヒ  
ーの缶を見続けていた。

不意に翔が俺に言った言葉が頭の中で蘇る。

頼むって、言われてもなあ。

## 第二十一話（前書き）

遅くなつてすいません。

言い訳にしかありませんが部活やらテストやらで忙しかったんです。  
。。。

誤字脱字などが在りましたらご報告願います。

あと、今回からセリフの前に着けていた名前を消してみました。

## 第二十一話

購買を出て、レッド寮に帰る途中に隼人とタオルで頭を拭いている十代と会う。近くで見ると十代は水浸しで、理由を聞くとカイザーに会いに行ったら追い返されたそうだ。

「ちくしょ〜アイツ等！水ぶっかけやがって！」

「無茶すんな〜、お前」

「まったくなんだな」

「くそっ！こんなんで俺が諦めると思うな！絶対カイザーとデュエルしてみせるぜ！」

『ちゃんと拭かないと風邪を引いてしまいますよ』

「ちゃんと拭いたって、なんか母ちゃんみたいだな」

「だな」

「？」

十代が愚痴ながらドアを開ける。部屋のベットのの上には膨らんだ毛布があり十代はそれを見てため息をつく。

「翔、授業にも出ねえでいつまで何時までも閉じこもってるもつてると隼人みたいになっちまうぞ」

随分と隼人に失礼な言葉である。

「失礼な事ゆーなー！」

そんな隼人の言葉をスルーし、ベットに近づき毛布を取る。

「うりゃ！つてあれ？翔は？」

「そついや、翔ならちよつと前に購買で会ったぞ」

「え？じゃあアイツ何処に居るんだ？」

「なんだこりゃ？」

「どうした」

隼人に近づき持っていた手紙を覗きこむ、俺も近づき手紙を見る。

『一筆啓上、翔は島を出ます。止めてくれるなアニキ！さよならだ  
けが人生だ。』

なに書いてんだアイツ……ていうか一筆啓上ってどんな意味？  
十代も読み終えたようで隼人から手紙を取り、握りつぶしてしまう。

「アイツ、逃げやがった……！探しに行こう！」

「でも、もうすぐ晩御飯……」



「いいから行くぞ!!」

『でも、どうやって島を出るんでしょう?』

「案外泳いで渡るかもな」

「?」

俺のドリアドに対する言葉に隼人が反応するが十代に引っ張られて部屋を出る、俺もそれに続き部屋を出る。

部屋を出た所で丁度よく実羽、拓馬、クラン、ケルビムと出会う。

「ん?どうした?そんなに慌てて」

「なんかあつ』・・・なにかあつたの?」・・・せめて言わせ『喋るな』・・・うう・・・」

拓馬の扱いが酷い気がするが・・・まあいいだろう。

「翔が島を出ていくって!みんな探してくれないか?」

「なに?分かった、手伝おう」

実羽は即答で十代に言葉返す。と言う訳でみんな得手分けして翔を探すことになった。

『翔さん、どこですかー、返事してくださいー!』

「いや、お前が叫んでも聞こえないだろ……」

『あ……そうでした……』

その言葉にドリアドはシュンとする。

「そう落ち込むなって、すぐに見つかるって」

『だといんですけど……』

さつきから歩きまわっているが翔は見つからない。というか、この辺の記憶が曖昧でいつ翔が見つかるのか分らん。

『私もう少し遠くの方を探してきます!』

「気を付けてな」

前を飛んでいくドリアドに手を振りながら見送る。

「神楽！」

後ろから実羽の声がしたので振り返る、後ろには実羽がこっちに走り寄ってきていた。

「そっちに居たか？」

「いや、居なかった。その様子だどこっちにも居なかったみたいだな」

「まったく、どこ行ってんだか……そっといえばクランは？」

実羽の近くにクランが居ないことに気づき聞いてみる。

「ああ、今は少し離れて探してもらっている。その方が効率がいいからな」

なるほど。と納得しながら残された俺たちも翔を探すために再び歩き出す。

「なあ、神楽」

「ん？どうかしたのか？」

しばらく歩いていると実羽が話しかけてきた。

「いや、ただこうして二人きりになるのは久しぶりだな、と思ってな」

「あー……そういやそうだな、いつもはドリアドやら拓馬とかが居たからな」

実羽に言われて気が付く。

こいつと知り合ってからには一人きりにならない日の方が少ないと思う。この世界に来てからは昔より会う頻度は少なくなっている。

「なんだかとても懐かしく感じるぞ！そうは思わないか？」

隣に居る実羽がこちらに顔を向ける、その顔は他人にはあまり見せない笑顔だった。

「確かに、少し懐かしい感じがするな」

「そうだろう！」

そうやって俺の少し前に出て上機嫌な様子で歩き続ける。

なんか、やけにテンション高いな……なんかあったのか？

「……本当に、懐かしいな……」

「ん、なんか言ったか？」

何か言ったような気がしたので聞き返すが返事は帰ってこない。

「実羽？」

もう一度声を掛けると実羽は俺の数歩先で立ち止まり、こちらに振り返る。その表情はさつきとは違い、不安そうな顔をしていた。

「……なあ、神楽……」

「なんだ？」

「……私たちは……また、その……一緒に、歩いけるのか？」

「は？何言つて……」

「今度は！」

実羽が言った言葉の意味が分からず、聞き返そうとするが実羽に遮られる。

「今度は……」

「……」

実羽は下を向いていてどんな表情をしているのかは分からない、俺もどんな反応をしていいのか分からず、そのままお互い黙ってしまふ。

俺は次の言葉を待ったが、その次の言葉は出てこなかった。

「……………すまない」

実羽が口を開いたのは夕日も落ちはじめ、少し暗くなって時だった。

「……………変なことを言ったな、すまない忘れてくれ」

そう言って上げた実羽の顔は嘘をついているように見えた。

「行こう、翔を探さないといけない……………」

実羽は前を向いて歩いていく。俺は小走りに実羽の隣につく。

「……………言いたいことはちゃんと見えよ」

「……………」

「時間が掛かってもいい、だけど後でちゃんと見えよ」

「……………分かった、必ず、言う」

「絶対に見えよ！スッキリしないから！」

「分かってる、信じる」

実羽がこっちに顔を向ける。その顔はさっきとは違い、嘘を吐いて

いる顔ではなく。

「必ず言おう、それまで待っていてくれ」

「……おう、待ってるぜ」

何時もどつりの、信用出来る実羽の顔だった。

## 第二十二話（前書き）

スイマセン・・・めちゃくちゃ更新スピードが落ちていきます。

誤字脱字などがありましたらご報告お願いします。



## 第二十二話

実羽の・・・なんか良く分かんない行動にまだ若干頭が混乱しているが、翔を探さなければいけないので探索を続行している。すると突然、実羽の方から電子音が鳴り響く。携帯電話みたいな音だったが少し驚いてしまったが実羽はそんな様子も無く、ポケットから生徒手帳を取り出す。

「誰からだ？」

「拓馬からみたいだ、翔が見つかったのか？」

そう言いながら実羽は通信を繋ぐ。

『あーもしもし実羽さん？聞こえる？』

「ああ、聞こえる。翔は見つかったのか？」

『翔は十代が見つけたよ。っていうかそれより今灯台で皆と居るんだけどさ、十代とカイザーがデュエル始めてさ！』

「マジ？もうそんなに時間経ったか？」

日はすっかり沈んでいてもう夜だ。

この時間なら二人がデュエルしていてもおかしくはない。

「そうか・・・分かった、すぐに行く」

『ああ！早く来た方がいいって！！』

「ああ、切るぞ」

そう言っただけ通信を切る。

ていうかその生徒手帳ってケータイみたいなもんなの？確か部屋に放置状態なんだけど……。つかコイツ等連絡取り合ってるってことはメアド交換してるってことだろ？なぜ俺に生徒手帳がケータイの代わりだという事を言わない。あれ、もしかして省かれてる？省かれてんの俺？いやいやそんな訳無いだろう！いやしかし、もしもという可能性もある……。なぜだ、なぜ誰も言ってくれなかったんだ……。やっぱり省かれてんのかな？一緒に居る時は普通を装って、居なくなったら「アイツさマジキモイよね〜」みたいな感じなのか？俺って本当は

！！

「何をしている？早く行くぞ！」

つと、考え事をしている隙に実羽は歩き出して結構離れてしまってる。

急いで実羽に駆け寄り、実羽は俺が隣に着いたのを確認すると前を向き歩き出し、俺もその歩調に合わせ隣を歩く。嫌われてるなんてないよね？

「そういえば、アイツ等どこいった？」

「クラン達か？そう言えば見ていないな……。遠くまでは離れられない筈だが？」

その口ぶりからすると実羽もクランのカードを持っているのか。俺

もドリアードのカードは持っている、時間は結構たっているから一旦、戻って来てもいいと思うんだが、まさか近寄りたくないとか？そんなこと、無いよね？

「よ、よしっ呼んでみるか！」

「そんなこと出来るのか？」

「まあ、たぶん・・・」

立ち止まって目を閉じる。そんな必要は無いが気分だ気分。確かアイツに念じるように・・・だっけ？あれ？どうだっけ？ヤツベ忘れちゃった、どうしょ？まあ適当にやればいけるよな？とりあえず伝われーって思えば大丈夫なはず！よっしゃ行くぞ！！

「（ドリアードのスリーサイズは！！！！！！何言おうとしてるんですか！！！！！！ゴボツ！？）」

ドリアードの声が聞こえると同時に左腹部に強烈な痛み襲う。つかかなんで・・・対応が早だろ・・・。

微かに見えたが、隣の茂みから飛び出しそのまま俺の腹にグーパン、という感じらしい。強烈な痛みに耐えられずうずくまる。だがドリアードの怒りはまだ収まっていないらしく、うずくまっている俺の襟を掴み持ち上げられた。

「ちよ・・・！！・・・首、絞まってっ・・・！！？」

『なんで言おうとしたんですか！というかなんで知ってるんですか！いつ測ったんですか！はっ、まさか寝ている隙に！？不潔です！変態です！でりかしー無さ過ぎです！女の敵！！！！！！』

「じよ、冗……談……だつ、て……」

ヤベ、目がチカチカしてきた……。

「ま、待てドリアード！ホントに苦しそつだぞ！？」

実羽の協力もあつてどうにか脱出できた俺は地面に倒れこみ何度も咳き込む。ドリアードは実羽に羽交い絞めにされてこつちには来れないようだった。

しかし、実羽に押さえられているのに滅茶苦茶暴れているのは実羽が手加減しているのか、もしくは単純にドリアードの力が強いのか、もし後者なら早く誤解を解かねばならん。しかしメツチャ息苦しい、アイツ本気で締めてきたのか？

「神楽！何を言ったのかは知らないが、なんとかしてくれ！」

マジでヤバいの！？ちょ、お前どんだけ力強いんだよ！

まだ喉が変な感じだがドリアードの怒りを鎮めるためによるよろ立ち上がり、弁解しようと近づく。

「ドリアード、さっきのは……」

『うがー！ー！ー！ー！』

「ゴホオ！ー！？」

近づいたら暴れていたドリアードの蹴りを顎に喰らう、相当な威力だったのか意識が遠く、実羽がなんか言った気がしたが、地面に落ちた所で目の前が真っ白になる。

(弁解くらい、させるよ……)

そして俺は気を失った。

## 第二十三話（前書き）

スゲー遅くなってスイマセン・・・。

変な所があったらご報告ください。

## 第二十三話

side 神楽

気が付いたら目の前が真っ白だった。

どこかはわからない、何も感じない真っ白な世界、現実ではありえないような世界。

俺は立っているのか？それとも座っているのか？

自分の姿を見る。見た感じは立っている、でも立っている感じはしない。

（浮かんでる・・・？）

それが一番しっくりきた結論だった。

（ここどこ？）

あたりを見回す。しかし、白い世界が続くだけで何も無い。たしか、ドリアードに蹴られたんだっけ………

（ああ、夢か）

夢を見ている時、ああこれは夢だな、と自覚できる夢。そんな感じがした。

(にしては妙に目が冴えてる、なんなんだ?)

まったくもって訳が分からなかった。俺はなんでこんなところに居る? 夢ならばやく覚める! そんな事を考えながら周りを見ていると段々と眠気が襲ってくる。

(うわ……なんだ……すげー眠い……)

突然やってきた睡魔に身を委ねていると、耳鳴りのようなものが聞こえ始める。

(耳鳴り……?)

それは段々と大きくなっていく程度大きくなるとそれは耳鳴りではなく、誰かの声だという事に気が付く。

『……ろ! ……きろ!』

(うっさいな……寝かせる……)

そう思った瞬間、声は聞こえなくなる。

(聞こえなくなったな……)

再び睡魔に身を委ねようとした瞬間

「いい加減に起きろ――――!」



「ああああ!?!」

ゴンツ!!

「いたっ!?!」

「いたっ!?!」

突然聞こえてきた大音量の声によって睡魔なんぞ吹き飛んでしまった。

さらにその声にビックリして起き上がると頭に何かがぶつかると両手でぶつけた所を押さえながら倒れこむ。

「ああ……頭が……」

「うう……痛いぞ、神楽」

しばらくその痛みに唸っていると声を掛けられる。この声からして

実羽だな。

そしてこの部屋は俺の部屋だろう、気を失ってから運ばれたのか？

「なにしゃがる……この、石頭……」

頭を押さえ体を起こしながら文句を言ってる。実羽を見ると同じくぶつけた所を押さえながら俺の方を見ている。

「……石頭ではないぞ」

「良く言うよ、全体的に規格外のくせに……」

「規格外……失礼な、私は普通だ」  
わたし

そう言っつて顔を近づけてくる。

「っ!?!」

い、息が!?!

「ち、近けーよボケ!」

急いでベットの端に移動する。

その行動が気に食わないのか実羽は不機嫌そうな顔になる。

「別にいいじゃないか……なぜ嫌がる?」

「いや、嫌じゃないが……って何言ってるんだ俺!そうゆづのじやないんだよ!なんて言うか、その……!!」

確かに拒否する理由は無い、なんやかんや言いながら実羽は美人だ、断言できる。まあその美人の顔が目の前に来るんだ、なんていうか、その……ていうかなんで俺こんなに実羽のこと意識してんだよ、いつも通りやればいいんだ！いつも通り！

「と、とにかくダメなんだよ！」

「何がダメなのだ？説明しろ」

そう言ってまた顔を近づける。だからさあ！！後ろは壁で逃げられない。どう逃げるか考えている間にも実羽は俺に問いかけてくる。

「どうしてダメなのだ？説明してくれないと分からないぞ？」

目の前に実羽の顔が広がる。その表情は笑っているようにも見える。こいつわざとやってんのか！？

「……っ！？っ、うるさい！離れろ！」

「別にいいじゃないか、減る物ではないだろ？」

「い、いいから離れろ！！！」

s i d e ・ 拓馬

結局、実羽さんに連絡して二人・・・いや四人が姿を現したのはデユエルが終わった後で、なぜか神楽が気絶してて、実羽さんが神楽を運んできた。

事情を聞き色々と考えた結果、神楽悪い、ドリアドはやりすぎた、と言う事になって喧嘩両成敗ということでお互いに謝ろうという結論になったが、肝心の神楽が目を覚まさなかった。

部屋に戻って様子を見たが起きる気配はなく、実羽さんは心配だから一緒に泊る、と言って部屋に泊った。

朝になっても神楽は起きないし腹が減ったので購買で色々買ってきたのだが、部屋ではお楽しみ中なので入れずにいるのが今の状況だ・・・。

『誰に説明してんのよ?』

「うるさい!くそ神楽め!実羽さんとイチャイチャしゃがって・・・  
!!!このリア充め!!」

『楽しそうでいいじゃないですか』

『・・・バカツプル?』

ドリアードとクランは部屋に居たのだが、いい感じにイチャイチャ  
し始めたので空気を読んで出てきたらしい。

「チクシヨウ・・・」

この、リア充めええええええ!!!!!

「あれ?何してんだ拓馬?」

声を掛けられた方に首を向けると十代がいた。手に袋を持っている、  
どうやら神楽の見舞いらしい。

「・・・十代、今日は飲まないか?」

「は?何言ってるんだ?てゆうか神楽は大丈夫なのか?」

「大丈夫だよ、今お楽しみ中だから」

そして十代を回れ右させて背中を押す。

「お、おい！どうしたんだよ？」

「飲みたい気分何じゃーい！ー！！」

s i d e o u t

s i d e ????

ある部屋に一人の少女と一人の男が居た。

その部屋は機械やその機会のケーブルで足の踏み場もない様な部屋。その少女は相当苛立っているらしく、同室している長身の男も声を掛けずらい様子だった。

しかし、黙っても仕方がないので男が少女に声を掛けようとした時、少女が叫ぶ。



「そうした方がいい、お休み。一人で部屋までいけるか？」

少女はバカにすんな、と言いたげな目で男を見ると少女は男の手をパシんと叩き、さつさと部屋を出る。

少女が部屋を出た後、男は目の前にある機械の画面を見る。

「姫宮神楽、なんなんだこの男は……」

その質問に答える事の出来る者はおらず、その言葉は暗い部屋の中に消えていった。



## 第二十三話（後書き）

また更新が遅くなるかも知れません。

本当にすいません。

## 第二十四話（前書き）

更新速度がどんどん落ちてきていますが止めた訳では無いので、これからも見てください。

## 第二十四話

ここはいつも通りの俺と拓馬の部屋。今ここには十代と翔が来ている。違うと言えばドリアド達が居ないところだろうか。なぜ俺たちがここに集まっているのか、それは

「と、言う訳で・・・第一回チキチキ！男だらけの制裁タッグデュエル対策会議！！はっじめるよー！！！！」

「あんまり大声だすな、迷惑だろ」

「いきなりなツッコミだなおい・・・」

という訳で、なんかいきなりクロノスから連絡が来て、制裁タッグデュエルをする日が明後日になった。

その連絡を受けた俺達四人は対策を練るべく緊急会議を開いた。

「対策って、何をするんスか？」

「基本はみんなのデッキを調整したり、実戦だな」

「よし！じゃあ拓馬デュエルしようぜ！」

実戦と言った瞬間、十代が反応し拓馬にデュエルを申し込む。そういえばデュエルしてなかったなこの二人。

「いきなりだな・・・だが上等！！じゃあ神楽は翔にアドバイス

でもしててくれ！」

まあ十代はデッキの調整とか頭使いそうなのよりは実戦の方がいいか。いや十代もそこまでデュエルバカではない……と思う。

「わかった、じゃあやるか」

「お願いするッス」

「よっしゃ、行くぞ！」

「おう！」

拓馬と十代はそうそうと部屋を出る。

そんな訳で俺と翔はデッキの調整、アイツ等は……恐らく延々とデュエルをするんだろう。

「じゃあ始めるか。翔のカードを見せてくれ」

「了解ッス！」

「あれ？カイトロイドとか入れないの？」

「アレっスか？確かこの辺に……」

『スカイスクレイパーシュート！』

『お父（裁きの龍）さー……ん！』

無視無視。

「だからこの時はノーエントリー使って止めて、次のターンでシルドクラッシュユミみたいに」

「ああ！そうか！」

『なんでウォルフ三枚手札に！？』

『暇だったから』

『ケルビムー！？』

無視無視・・・。

side 翔

「だからパトロイド使えよ」

「あ・・・」

神楽くんに言われて気が付く。

(そうだ、パトロイドは相手の伏せカードを確認できるモンスター・  
・・・これはアニキにも言われたことなのに・・・)

何をしているんだろう、明後日のデュエルに勝たなきゃ退学なのに・  
・・・。

「まあ、実践でミスしなければいいんだ。気にすんな」

神楽くんは気を使ってくれる。

「でも、実践で同じ間違いをしたら・・・」

もし僕がアニキの脚を引っ張ってアニキが退学なんてことになったら・・・。

そんなイメージを思い浮かべてしまい、自分が情けなくなってしまう。

(どうせ、僕なんて・・・)

「翔、お前の悪い癖だ。なんでそんなに失敗することばかり考えてんだよ」

「・・・」

そう言われて気が付く。そうだ、僕はいつもそんな事を考えちゃう。

「自信を持って、お前は十分に強い。俺が補償してやる！」

そうやってドンツと自分の胸を叩く神楽くんがとても大きく見える。

「強くなってるよ、強かったら今頃レッドになんていないよ・・・」

「

オシリス・レッド、落ちこぼれ集団、そんな中に居る僕が強い訳ないよ・・・。

「なにいつてんだ、ならなんで十代はここに居る?」

「それは、アニキがここがいつて・・・」

「十代だけじゃねえ、俺だって結構強いんだぜ、拓馬だって同じだ」

神楽くんの強さは分かってる、拓馬くんも、でも・・・

「でも」

「でも、じゃねえ」

僕の言葉を遮り、神楽くんが僕の肩に手をのせる。

「翔、勝つために必要なもんは何だと思う?」

「勝つために、必要なもの?」

「ああ、そうだ。それは強力なカードやデッキなんかじゃない、ましてやレッドだとかブルーだとかはもつと関係ねえ」

分からない、そんなのが分かってたら苦労はしない。

「じゃあ、その必要なものって?」

その問いに神楽くんは笑いながら、

「さあな?」



「え？えええ！？知らないの！？」

「そんなの知ってたら苦労はねーよ」

「な、なにそれ・・・」

「さ、調整を再開するぞ」

真剣に聞いた僕が馬鹿だったのかもしれない。

それはそうだ、もしそんなもの本当に知ってたら易々と教えるわけがない。

勝つために必要なもの、それはきつとアニキ達は持っていて僕が持っていないもの

「お前、もしかして勝つために必要なものが、みんな同じだと思ってるか？」

「え？」

そう言ってくる神楽くんの顔にはさっきのような表情はなく、見たこともない真剣な顔だった。

「それは人それぞれ違うんだよ。強い奴は何にしる、それぞれ違う答えを持つてる。アイツに勝ちたい、守りたいものが在る、意地がある、プライドを傷つけられたくない、憧れの人を追い越したい、下の奴に追い越されたくない、色々だ。似てるのもある、でも勝ち残ってる奴は答えを見つけた奴だ」

答えを見つける？

神楽くんの言ってる事は正直良く分からない、でも答えを見つける、

自分の勝つ目的を見つける。そう言ってるように聞こえる。

「お前はまた答えを見つけてないだけ、信じる」

そう言っただけいつもの顔に戻る。

( 答えを見つけれ、信じる、僕も信じれば見つけれられるだろうか？ )

そんな疑問がのこったけど、でも答えを見つけてみようと、そう思った。

s i d e o u t

## 第二十四話（後書き）

翔の心境を書きたかったんですが、凄い変な気がします。

次の更新はまた送れるかもしれません。

## 第二十五話（前書き）

尋常じゃないくらい更新速度が下がってしまいました。しかも短い  
です。

これからは少なくとも月一で更新したいと思います。

## 第二十五話

ピツ、ガコン。

「ジュースとお茶と、コーヒー、あとは・・・これでいいか」

適当に決めた飲み物のボタンを押し、落ちてきた缶を手に取りその缶を見る。その表面には『抹茶サイダー』とデカデカと書かれている。

「抹茶サイダーって、どんな飲み物だよ・・・。よく商品化したな」

拓馬から珍しい飲み物と言われていたので買って見たが、俺は飲む気にはならないな。

買った飲み物を持ってきた袋に入れ、自分の分のコーヒーの蓋を開け一口飲む。

「ふう・・・四人でデュエルってリンチ食らうんだな・・・。やんなきゃよかった・・・」

数十分前、俺たちは喉が乾いたという事でデュエルに負けた奴が飲み物を買ってくるという罰ゲーム付きのデュエルをした。水を飲み、と言ったが発案者である拓馬が駄々をこねたので仕方なく参加した。その拓馬が一人ずつやるのは時間が掛かるから全員でやる、と言って四人でやった結果、俺がリンチをくらい罰ゲームを執行された、と言う訳だ。ちなみに金は俺もちだ。

どうやって奴に仕返ししようか考えながら校舎を歩いていると、前方から見知った人物が歩いてくるのが見える。

「ん？神楽か？おはよう」

「よ、よう」

前から来たのは実羽だった。

なんでだろう、最近実羽の事を無駄に意識してしまっている。なぜだ？この前までそんなことはなかった・・・はず、なんで急に・・・

奴はそんな俺の気まずい心情など知らんという顔で挨拶してくる。

「どうかしたのか？少し顔が赤いぞ？」

実羽は俺を心配したらしく顔を覗きこんでくる。当然お互いの顔は近づく。

そんな状況に恥ずかしいと感じ、実羽と距離を取る。

「うお！？急に近づくな！」

「む、それはどういう意味だ。なぜ近づいてはいけないのだ？」

「うつせえ！前にも言ってだろうが！つか体は健康だ何ともない！」

「本当か？少しでも気分が悪いなら早めに休んだ方がいい。明日は試合なのだろう？」

その気遣う言葉が妙にうれしかった。しかし、その気遣いを嬉しく思う自分が恥ずかしくなり、つい声を荒げてしまう。

「余計な心配はいい！ったく、明日はガチで行けば問題ないだろ。」

そんなに意気込む心配もないっ」

「しかし、負けてしまったては退学なのだろう？そんな事、私は絶対に嫌だぞ」

いつもの表情ではなく真剣な顔で言われる。

・・・心配、してくれてんだな。

「用心していて損はないと思うぞ」

今度は真剣そうな顔ではなく、いつも通りの笑顔で言われる。

「・・・」

・・・いままで楽観的に考えていたが、俺は今まで本気でデュエルするのをバカバカしいと思っていたんだらう。

この学園の退学と元いた世界の学校の退学は同じなんだ。デュエルが絡んでいたから俺は心のどこかで遊びなんだと思っていた。しかし、これはデュエルが絡むからって遊びじゃない。

実羽はその事に気づいていたんだらう。だからこそ、心配してくれてるんだ。

・・・確かに、用心して損は無いやな。

だがそれには問題が一つある。

「心配してくれんのはありがたいが、用心するって具体的に何をだ？」

「・・・それは・・・」

俺の質問に実羽は困ったような表情をして考え込むんだ。俺も同じ

ように考えてみる。通常の対策なら勉強するなりの事ができる。しかし、デュエルとなると考えられるのがデッキの調整あたりしか出てこない。

「……………」

「……………」

お互いに考え込む。実羽は腕を組んで真面目に考えている。お互いにしばらく考えていると、実羽の視線が俺の右腕に注目しているのが見えた。

俺の右腕には先ほどの罰ゲーム付きデュエルで着けたままのデュエルディスクが付いたままだった。そして実羽は良い考えが浮かんだのか表情を明るくする。

「そつだ神楽。私とデュエルをしよう！」

「……………なぜ？」

「明日の練習とでも思ってくれればいい。待っているリングの使用許可を貰ってくる！」

「ちょ、ちょっと待て。なんで俺がお前とデュエルしなければならん?!」

言い返した時にはもう実羽はどこかえ走り出していた。実羽は走りながらこっちを向いて答える。

「経験を積むのが一番大切だと思う!とにかくデュエルをしてみよう！」



「それは、そうなんだろうけど・・・！」

「そっこだ！リングで待っている、すぐに行く！」

「あつちよ・・・！相変わらず足早いな」

俺の意見など聞く事もなく、実羽は走り去ってしまっ。

確かに、経験を積むというのは間違っではないと思う。だが、別にリングでやる意味は無いだろう。

「行かない訳にもいかないよな・・・」

罰ゲームの方は適当に言い訳すればいいか。

強引にされた約束だが破る訳にもいかず、俺はデュエルリングのある場所まで歩き出した。

## 第二十六話（前書き）

前よりは早くなりましたがまだ遅いですね、更新速度が・・・。

## 第二十六話

『ふああああ．．．ん、んん？．．．あれ？ここ、どこですか．．．？』

リングに向かいながら歩いていると、でかい欠伸をしながらドリアドが目覚しカードから出てくる。カードから出てきて俺の目の前に姿を現したドリアドの姿を見る。そしてため息を吐く。髪はボサボサ、パジャマで寝たらしいがそのパジャマは皺くちやになっでいて目も半開きだ。まだ完全に意識が覚醒していないようにウトウトしている。そして何故か手に枕を持っている。まだ寝ていたいという意味表示なんだろうか？

「．．．お前、まだ寝てていいよ」

『そうですね？．．．じゃあ、お休みなさあい．．．』

眠たそうに欠伸をしながらそう言うと、さっさとカードに戻る。カードを取り出して絵柄をみるとイラストが変わっており、ドリアドは毛布にくるまって枕を抱いた状態で寝ている。その姿が映ったカードは、時々拓馬が見せてくるオリジナルカードのようだ。

「一日にどのくらい寝れば気が済むんだコイツは？」

そんな疑問を抱いたまま、リングに向かう。

それから数分歩くとリングに到着し中に入る。しかし中にはまだ実羽の姿は無く、代わりに数人のブルーの生徒がいた。あまり係わりたくは無いのでその場を帰ろうとすると、ブルーの一人が俺に気づき声を掛けてくる。

「おい、そのレッド。なんの用だ？ここはレッドが来て良い場所じゃないぞ」

そこに居た数人のブルーの生徒がこつちに歩いてくる。

このブルーの生徒はなぜこんなにもエリート意識が強いんだろうか？

「あんた等に用はねえよ、邪魔したな」

「……レッドの癖に生意気な奴だな」

そう言ってさっさと出ようとするが、俺の言い方が気に食わないらしいブルーの一人が俺の肩を掴んで振り向かせ胸倉を掴んでくる。それに合わせて他の二人のブルーの生徒が俺の後ろにつく。

「それにお前一年じゃん、年上には敬語を使えって言われなかったか？」

「あんた等に用は無いつてい言つてんだろ？」

「テメエ……。二年に対して、それもブルーの二年に対してその口のきき方はねーんじゃねーの？」

胸倉を掴んでいる手に力がいれられる。

すぐにもこの手を掴んで吹っ飛ばしてやりたいが、今の俺の状況は人数的に考えて不利だし、明日の事もある。変に手を出して即退学っていうのはどうしても避けたい。

素直に言う事聞いてさっさと解放された方がいいか……。

「……………すみませんでした。お願いですから離して下さい先輩」

「ハッ！素直に言う事聞いてやんの！腰ぬけじゃん」

その言葉に後ろの奴らが大笑いする。ひとしきり笑った後、目の前にいる先輩が俺に顔を近づける。

「ちょうどいいや、コイツにしよう……………なあ腰ぬけレツド。一つ俺の頼みを聞いてはくれないか？」

どうやらこいつの中で俺は腰ぬけに決定したらしい。どうせ頼み事とかもパシリとかそんなのだろう。

「……………」

「なんだ？ビビっちゃったのかあ？アツハハ、やっぱり腰ぬけか！……………まあいい、じゃそのまま聞け」

どうするか考えている間に話を進められる。まあ、話くらいは聞いてみるか。

「今年の新生で一人、調子に乗ってる女子がいんだよ。そいつに今夜12時にブルーの男子寮に一人で来いって伝えてこい」

何時の時代の不良だよ。つか女子をそんな時間に呼び出すなよ。どうせ振られた腹いせとか、そんなのだろう。そーゆーことするから嫌われるんだよ、と言ってやりたい。

「質問いい……ですか？」

コイツが何故その女子生徒を呼び出すのか？その理由に興味を持ってしまい、つい聞いてしまった。

「ああ？なんだ？」

「ソイツに恨みでもあるんですか？」

「……ソイツは生意気なんだよ。せつかくこの俺の彼女になれるってゆうのによお、ソイツはそれを断ったんだ。だからだよ……」

やっぱり振られたのか。先輩の顔は、確かに顔だけ見ればモテそうな顔つきである。これで性格が良かったらかなりモテているだろう。

「俺から告って断った奴はいねえのによお、アイツはそれを断ったんだと思う？」

急に話を振られても困る。

「さあ？」

ガッ！！

答えた瞬間殴られた。俺の態度が気に食わなかったんだろう。男は表情を怖くする。

「生意気言ってんじゃねえよ。殺すぞ？」

「早く話を進めてください目の怖い先輩」

ガンッ！！

さっきより強い力で殴られた。しかもほとんど同じ場所を殴られたのでちよつと痛い。

「さっきも言っただよなあ？生意気言っなってよお。まあいいや、今からその女の名前言うからソイツに伝えて来い、ちゃんと伝えなかつたら殺す」

殺す殺すって、気軽に言うんじゃねーよボケ。

「そいつの名前は、黒猫実羽っていうんだよ」

「………あ？」

その名前を聞いた瞬間自分でも分かるくらい自分の体温が上がった気がした。なぜかは分からない、なのに頭に血が上った。今までは何も感じなかったこの男の声に急に腹が立った。この男の顔に苛立ちを憶えた。

「なんだその口のきき方？ふざけてんじやねえぞ！」

男が腕を振り上げ、俺を殴ろうとする。

俺はそれをだた見続けた。見続けながら自分の拳を硬く握りしめた。男の手が段々と近づいてくる。俺はもう何も考えてなかった。ただ、

ブン殴る！！！！

「オラア！」

男が掛け声と共に殴りかかる。それと同時に俺は握りしめた拳を振り上げる。

その瞬間、俺は誰かに手首を掴まれ男は後ろに吹っ飛ぶ。

「ッ！？」

「ゲアツ！？」

それに少し遅れて聞きなれた声が響く。

「やめろ！！！」

突然現れ、男を突き飛ばし俺の手首を掴んでいるのは、実羽だった。

「………実羽」

「なにをしているんだ、お前は……」

実羽は男の方など気にせず俺を見る。その表情はとても怒っているようだった。そしてまっすぐ、俺を見つめていた。



手に入っていた力が抜けると、手首を掴んでいる手の力も弱められた。

「落ち着いたか？」

「……ああ」

「そうか、よかった」

実羽の表情が和らぐ。しかし、すぐに顔を引き締めて俺に、何があったと問いかけてきた。その問いに答える間もなく、突き飛ばされた先輩が怒鳴る。

「テメエ！！なにしゃがる！！」

この時、実羽は初めて先輩の方を向く。

「お前が神楽を殴ろうとしていたからな。それを止めたただけだ」

男は完全に怒っているようで近くの二人はなだめるような事もしよとせずに少し距離を取っている。

「ただじゃすまさねえ……！！」

先輩の顔は怒りでいっぱいであつた。俺の顔が台無しだ。

大股でズンズンと実羽に向かって歩いてくる。俺は先輩と実羽の間に立つ。

「邪魔だ」

先輩は見下したような目で俺を見る。その視線に対して俺はこつ答える。

「……………先輩、俺とデュエルしようぜ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0438/>

---

俺の決闘

2011年4月7日22時54分発行